麗澤教育

第24号
平成30年（2018）4月

特集　特色ある麗澤教育

『麗澤教育』発刊の趣旨

本誌は、麗澤大学における教育、特に建学の精神を中心とした人間教育について、教職員や学生、部活動の指導者、保護者、卒業生などが、お互いに議論を深め、かつ、それぞれの実践や現状を報告するためのメディアです。年１回発行しています。

麗澤教育 第二十四号〈目次〉

フォト・アルバム　IAUP（世界大学総長協会）2017ウィーン総会……6

〈特別企画〉日本初「学校教育研究科道徳教育専攻」……8

学校教育再生の本丸は、道徳教育の科学的・学問的再構築にある…中山　理　8

道徳大学院の開設に携わって……江島　顕一　16

社会人の学び直しに対する私の想い……松野　大祐　24
——「学校教育研究科道徳教育専攻」設置——

〈特集〉特色ある麗澤教育……29

ドイツ語・ドイツ文化専攻の教科書を使わない授業…草本　晶　30

学生からの視点（田口華子）

スポーツマネジメントコース「自主企画ゼミナール」……豊嶋　建広　39
——プロスポーツチーム支援活動——
自主企画ゼミナールのＰＢＬ型授業（大久保祐樹）　「プロスポーツチームの支援活動」授業の魅力（長島　圭）　自主企画ゼミナールで学んだこと（福智佑哉）

台湾語教育……邱　瑋琪　49

「ビジネスコミュニケーション上級演習」の概要と学生の様子…近藤　彩　57
「ビジネスコミュニケーション上級演習」から学んだこと（山本愛美）

第2回「グローバル経済経営フィールド演習」（初級）を終えて…堀内　一史　68
企業訪問を通して学んだこと（笹原　皐）

道徳の授業を創る力と観る力を育むことを目指して……江島　顕一　78
——麗澤大学教職課程「道徳教育の研究Ⅰ・Ⅱ」の挑戦——
道徳「も」指導できる教師を目指して（小林愛里）

継続活動する麗澤グローバル団体――「麗澤模擬国連」……88

「全米模擬国連大会」の経験と後悔から学ぶ……鳥畑　剛　88

本気の楽しさを知る……スルヤ・ウィジャヤ　92
――麗澤模擬国連団体に、リーダーとして参加して――

熱き挑戦者を追い続けた126日……野木　清司　95

継続活動する麗澤グローバル団体――「ASPIRE Reitaku」……100

学生自らの考えを世界に発信する場に！……齋藤　祐介　100

ASPIREの活動を通して得た産物……志賀　千晃　104

ASPIRE Reitakuの発展とともに……渡邊　信　108

◇卒業生の今

「特別なところ」……豊田　貴士　115
クリスマス２０１７……小林奈々子　119
「今」につながる麗澤大学……榊　初美　123
麗澤大学で学んだことを活かす……佐藤　大輔　128
――人づくり、仕事づくり、職場づくりを意識して――

◇麗陵祭

「同じ志を持つ者の大切さ」を知る……落合　愁斗　132

＊寄稿していただいた在学生の学年は、平成二十九年度です。

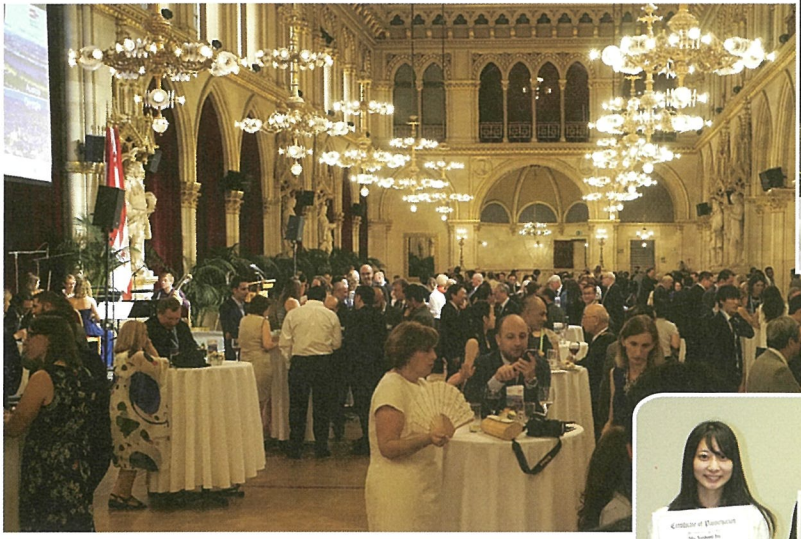
「IAUP2017ウィーン総会」（オーストリア）が開催され、中山 理 学長、渡邊 信 学部長、学生3名が参加。今回のメイン会場となったホーフブルク宮殿（Hofburg）は、1918 年までハプスブルク皇帝の統治する大帝国の中心地にあり、今でもその歴史と伝統の重みを感じさせてくれる。（2017.7.5 ～ 8）

UNAI ASPIRE Japan 代表団のメンバーと

グループディスカッション
英語で発表する中村さん

第３代国連大学学長や IAUP 副理事長等を歴任された
Heitor Gurgulino de Souza 博士（後列左より 2人目）と

左より、伊藤良美さん、志賀千晃さん、渡邊学部長
中山学長、中村文美さん



ウィーン市庁舎大ホールで開催されたレセプション

UNAI ASPIRE Japan より「総会参加証書」が授与される

IAUP（世界大学総長協会）2017ウィーン総会

IAUP 2017
Vienna Austria

International Association of University Presidents

歴史と伝統のあるウィーンで「麗澤の道徳教育」を語る

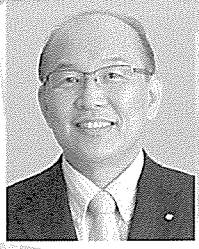
セッション共通テーマ：「教育における革新」
中山学長による研究発表「新しい教育制度に対して日本の高等教育はどのような貢献ができるのか」

総会の会場となった
ホーフブルク宮殿

〈特別企画〉日本初「学校教育研究科道徳教育専攻」

学校教育再生の本丸は、道徳教育の科学的・学問的再構築にある

麗澤大学学長　中山　理



世俗的な20世紀から倫理的な21世紀へ

エリザベス・キスとJ・ピーター・ユーベンの編集書『道徳教育を論ずる――近代の大学の役割を再考する』（Elizabeth Kiss & Peter Euben ed., *Debating Moral Education: Rethinking the Role of the Modern University*, 2010）によると、ここ30年くらいの間に、現在のアメリカの高等教育では倫理研究への回帰が起こっており、倫理を研究するセンターや教育プログラムが設立され、その数は１００を超えると述べられている。

それに対して現在の日本では、グローバル化の時代を迎えていると言いながら、こと倫理・道徳の研究・教育に関しては、一部の研究機関を除いて、一般に「道徳」と聞くだけで花粉症のように一種のアレルギー反応を起こす傾向があるためか、我が国の大学教育で、道徳教育を中心にすえた学問領域もなければ、講座や専攻もないという状況である。端的に言えば、高等教育のレベルでの倫理・道徳に関する理論的研究が圧倒的に不足しているという深刻な現状に直面しているわけである。その影響は、当然のこと、学校教育、中でも道徳教育にも及んでいるに違いなく、ことほどさように戦後の学校教育では、昭和25年に天野貞祐文部大臣が「修身科」の復

活を発言した時から、道徳教育が学校教育自体の問題というよりも、政治的イデオロギーの争点となり続けてきたような印象がある。その結果、道徳教育に賛成か反対かの二項対立的図式だけが前面に押し出され、道徳を巡る教育論はともするとその賛否論だけに終始する傾向があり、肝心の道徳教育の中身については、科学的、学問的な考察が十分になされていないような感を覚えるのである。その間、道徳教育の感情的な否定論やタブー視する議論は耳にするものの、「道徳教育とは何か」「道徳教育はどうあるべきか」といった本質的な議論は、未だになおざりにされたままなのではないだろうか。

そのような状況下では、たとえ「道徳の時間」が教科化されたとしても、それによって道徳教育が実質化されるかどうかは疑わしい。道徳を教えるスキルとコンピタンシーを備えた教育体制が整備されていなければ、道徳教育は単に絵に描いた餅と化す懸念を拭い去ることができないのである。ただし、この事態を教員個人の教育力の問題だけに矮小化してはならないのは、そもそも、高等教育における教員養成に大きな制度上の問題を抱えていることが、その一因と考えられるからである。大学のカリキュラムを例にとると、「教育職員免許法施行規則」により将来教員を目指す大学生が学ぶべき道徳教育に関連する科目は「教職に関する科目」の中に必修科目の「道徳の指導法」しかなく、大学4年間でたった2単位（90分×15回）を修得するにすぎない。それも小中学校のみで、高等学校の教員免許状取得には、この2単位さえ不要なのであり、道徳教育について学ぶ科目がないのである。これまでの道徳教育に議論の土台もモデルもないままの状態で道徳を教科化した場合、戸惑いと不安を覚えるのは、教育現場で真摯に道徳教育に取り組んでいる先生方ではないだろうか。この現状を打開するためにも、道徳教育を学問的、科学的に追求し、子供たちを幸せにする道徳教育に真摯に取り組む人々を支援する大学院の設立が急務なのである。

日本で最初の道徳に特化した大学院

そこで、本学大学院では、創立者廣池千九郎生誕150年記念事業「学校における道徳教育貢献事業（道徳の教科化への貢献）」の一貫として、学校教育研究科道徳教育専攻の設置を文部科学省へ申請したところ、昨年度に認可され、平成30年4月に開講する運びとなった。現在の日本には、道徳教育の研究者を養成する大学院が、筑波大学と大阪教育大学にしかなく、前者は人間総合科学研究科学校教育学専攻・博士後期課程の教育内容方法学分野の中に道徳教育学が、後者は教育学研究科学校教育専攻の中に道徳教育学コースがそれぞれ設置されているが、道徳教育だけをメインにした大学院ではない。その意味で、本大学院は我が国で初となる道徳教育に特化した大学院といえる。

本研究科では、道徳教育の理論と実践の融合を通して、教科化される「道徳科」に精通した教員や専門研究者の養成に取り組むとともに、教育学における新領域「道徳教育学」の開拓に向けた研究と教育を展開するために、以下のような人材像の育成を目指している。

① 道徳教育および道徳科のよりよい在り方を探究する人材

新たな時代に求められる子供の「生きる力」を育成するため、子供の道徳性が礎になるとの認識に基づき、道徳に関わる理論と実践の往還を成し得る高度な指導力を身につけた教員と、学校や教員に新たな知見を提供し得る専門的な学識を備えた研究者。

② 道徳教育を通じて学校の教育力を高めることができる人材

道徳教育は、道徳科を要としながら、学校の教育活動全体を通じて行われることを一層理解し、教科教育や教科外の活動における道徳的な指導の充実と発展を図り、学校全体としての教育力の向上に貢献する教員。

③ 教員および研究者の資質・能力として、自己の

科目区分	科　目　群
基礎科目	A 道徳教育の本質に関する科目
専門科目	B 道徳教育法及び道徳科教育法に関する科目
	C 各教育段階における道徳教育の在り方に関する科目
	D 各教科における道徳教育の指導に関する科目
実習科目	E 道徳教育及び道徳科の実習に関する科目
特別研究	F 修士論文の指導に関する科目

品性や道徳性を磨き続ける人材

一人の教員として道徳を子供とともに考え学び合う姿勢を持ち、人間の生き方について絶えず省察を加えて自己の人間性を磨き続ける教員と、また一人の研究者として研究倫理の理解と規則の遵守はもとより、公共性と有用性を持った研究に誠実に取り組む倫理観を高め続ける研究者。

カリキュラムは上記の目的を達成するため、以下のような「基礎科目」「専門科目」「実習科目」「特別研究」の4つの科目区分とAからFまでの6つの科目群によって構成されている。

このようなカリキュラムポリシーのもとに、学校教育研究科道徳教育専攻という成り立ちから、道徳教育の理論と実践の融合に取り組み、「道徳教育学」とも形容すべき教育学の新領域の開拓と学術的研究の深化に向けた教育・研究を展開してゆきたいと考えている。

道徳・倫理のグローバル・ネットワークの中で

グローバル時代に対応する高等教育での倫理・道徳研究に関しては、本学ではすでに道徳科学教育センター（Center for Moral Science and Education〔以下CMSE〕）を中心にして、平成19年に設立されて以来、海外の高等教育機関と学術・教育活動における積極的なコラボレーションを展開してきた。特に平成27年から29年にかけて「創立者廣池千九郎生誕150年」の関連事業として実施した、海外での講演会やシンポジュウム、著書の出版は、それまで蓄積してきたCMSEの学術的成果を海外に積極的に

発信する絶好の機会となった（詳細は「本誌」［第23号、平成29年］に収載された拙論「創立者廣池千九郎生誕150年を振り返って」［8～14ページ］を参照）。

ＣＭＳＥの評価としては、バーミンガム大学の人格教育・徳倫理学教授で、人格・徳ジュビリー・センター副センター長のクリスチャン・クリスチャンソン博士が、ご著書の邦訳書『子供を開花させるモラル教育――21世紀のアリストテレス的人格教育』（中山理監訳　堀内一史、宮下和大、江島顕一、竹中信介訳、麗澤大学出版会、平成30年）にご寄稿いただいた「日本語版への序」の中でＣＭＳＥは「道徳理論と道徳教育では傑出したアジアの研究センター」であり、本学の創立者、廣池千九郎の人格教育論は「アリストテレスの理論を現代の学校教育へ実際に応用する際に生じる欠陥をいくつか改善するのに役立つことでしょう」と述べておられる（viiページ）。ちなみに、原書の*Aristotelian Character Education*（Routledge, 2015）はイギリス教育研究学会から最高の研究書に選ばれている名著である。

平成30年1月に人格・徳ジュビリー・センター主催の国際学会に参加し、プレゼンテーションをした堀内一史教授と同行者の宮下和大准教授からは、本学とバーミンガム大学およびアメリカ合衆国のボストン大学との間でサービスラーニングと道徳教育に関する共同研究の企画が持ち上がっているという報告を受けている。

今後の活動予定としては、3月に本学の提携校であるフィリピンのパーペチュアル・ヘルプ大学より、道徳教育とモラロジーに関する共同学術研究がしたいという申し出を受け、その手始めに中山、堀内教授、犬飼孝夫教授が、現地で大学教員、大学院生、社会人を対象に学術講演をすることになっている。また5月には、中山と堀内教授が、オーストリアのアッパー・オーストリア応用科学大学で開催されるCross-Cultural Business Conference 2018で本学の道徳教育について学会発表を行う。これは中山が平成29年7月5～8日に開催された世界大学総長協会（ＩＡＵＰ）２０１７ウィーン総会にスピーカー

として登壇し、「日本の大学は今後の道徳教育にどのように貢献できるのか」と題した研究発表を行ったが、その時に司会を務めてくださった同大学経営学部長のMargarethe Überwimmer博士から、同じ道徳教育のテーマで是非とも研究発表をしてほしいとのお誘いを受けたからである。また10月には、中山、犬飼教授、山下美樹准教授が、アメリカ合衆国のセント・マーチンズ大学とポートランド大学から招待を受け、それぞれプレゼンテーションを行う予定である。

今回、道徳教育に特化した大学院が設置されたことで、教員や院生の交流はもとより、道徳教育のグローバルな学術的コラボレーションは飛躍的に発展するであろう。

【参考】

平成27年度から29年度における海外での講演会・シンポジウム、著書・論文等

平成27年度

(1) 講演会・シンポジウム等

・平成27年2月　シンガポールの本学提携校ナンヤンポリテクニックでの特別講演

・7月　ドイツの本学提携校イェーナ大学で講演

・10月　アメリカの本学提携校セント・マーチンズ大学との共同シンポジウム（テーマ：Higher Education for the Sustainable Future: Perspectives across the Pacific）で講演と研究発表

・12月　ベトナム国家大学ホーチミン市校人文社会科学大学の道徳研究センター開所式に参列。共催で「ベトナムと日本の文化――融合と発展」というテーマの国際シンポジウムを開催し、基調講演

・平成28年2月　フィリピンのパーペチュアル・ヘルプ大学で講演

(2)　共同研究

・アメリカ・ミズーリ大学「人格・市民性センター」と人格教育に関する共同研究の継続実施（平成28年度以降も継続）。研究テーマ「道徳教育のインパクトを測定するツールの開発」

平成28年度

(1)　講演会・シンポジウム等

・平成28年8月　インドのタゴール国際大学と共催で、ラビンドラナート・タゴール初訪日100周年および麗澤大学創立者廣池千九郎生誕150年を記念したシンポジウムを開催。記念式典で基調講演。「日本の文化・文学・社会・歴史」をテーマとする国際学会で発表

・12月　マレーシアの本学提携校サラワク大学で「モラロジーと経済学と企業倫理」（総合テーマ "Moralogy, Economics and Business Ethics"）の国際会議・UNIMAS-REITAKU Conference 2016を開催。基調講演、研究発表

(2)　著書・論文等

・アメリカの人格教育に関する学術雑誌に、「廣池千九郎の教育思想」、「麗澤大学における道徳教育の教授法およびインパクト測定法」の論文掲載を決定し、ゲスト編集者として作業を進める（平成29年度以降も継続）

・7月　平成27年12月にベトナム国家大学ホーチミン市校人文社会科学大学で開催した国際シンポジウムでの基調講演や研究発表を収載した論文集『日本：多様な文化が融合する国』を刊行

・平成29年3月　『グルデヴ・ラビンドラナート・タゴールの初訪日100周年：ラビンドラナート・タゴールと日本：「タゴールと日本、日本文化の諸相」に関する国際会議論文集』(Gita A. Keeni, ed., Rabindranath

Tagore and Japan: the Proceedings of the International Conference on 'Tagore and Japan & Various Aspects of Japanese Culture' [Granthana Vibhaga, Viva-Bhatati], 2017)を出版。本書はタゴール国際大学との共催で、タゴール初訪日100周年と本学の創立者廣池千九郎生誕150年を記念し、両国の学術・文化交流を図るために平成28年8月に開催した国際会議の論文集

平成29年度

(1) 講演会・シンポジウム等

・平成29年7月　世界大学総長協会（IAUP）2017ウィーン総会で発表。"How Can Japanese Universities Contribute to the New System of Moral Education?"

・11月　Association for Moral Educationの第43回大会に参加、論文発表。テーマ："Evolving Ethics, Moral Education, and the Struggle for Democracy"

・平成30年1月　バーミンガム大学・ジュビリー・センター主催の第6回国際学術大会に参加、発表。オックスフォード大学オリエル・カレッジ。テーマ："Virtues in the Public Sphere"

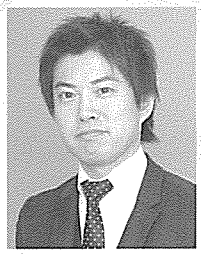
(2) 著書・論文等

・1月　「人格・徳ジュビリー・センターの副センター長 クリスチャン・クリスチャンソン博士著作"Aristotelian Character Education"の邦訳書『子供を開花させるモラル教育――21世紀のアリストテレス的人格教育』を出版

〈特別企画〉日本初「学校教育研究科道徳教育専攻」

道徳大学院の開設に携わって

学校教育研究科准教授・経済学部准教授　江島顕一



はじめに

本学大学院に平成30年4月、「学校教育研究科道徳教育専攻」が開設される。国内で初めて道徳教育に特化した大学院が開設される年となり、また「特別の教科　道徳」が小学校で実施される年でもある。その意味では、日本道徳教育史に画期をなす年といえる。

本大学院の設置申請を文部科学省に行ったのは、平成29年3月であり、同年8月に大学院の、同年12月に教職課程の設置が認可された。

本稿では、この事業に携わった一教員として、その認可前の構想および申請の段階から認可後の準備および具現化の段階における作業行程、すなわち端的にいえば、本大学院の成立過程について、個人的所感を交えながら述べてみたい。

本来本稿では、本大学院の社会的な意義や研究教育上の特色を示すことが求められているのではないかと思われる。とはいえ、こうした実務的な事柄を書ける範囲で書き記しておくことにも一定程度の（個人的には相当程度の）意味があると考えている。その理由は主に次の二点からである。ひとつは本大学院の設置申請が前例のない、まさに「日本初」の研究科を設立することであったという点である。い

まひとつは本大学院の設置申請そのものが、本学および本学大学院にとって、数十年振りに行った事業であったという点である。これらの二点は、これから新規の大学院設置を構想する本学や他大学にとって、またこれから大規模な改革を構想する場合の本学にとって有用であると思われる。

なお、本稿は設置申請という事業の全体像の描出を心がけてはいるものの、主に教員という立場からの記述となることをあらかじめご理解いただきたい。

認可前の構想および申請の段階

(1)事業の浮上

管見の限り、この事業が最初に公に表れたのは、本学の創立者・廣池千九郎（1866-1938）の生誕１５０年記念事業の一環として、「学校における道徳教育貢献事業（道徳の教科化への貢献）」のひとつに「道徳教育の研究者育成ならびに教育者養成（大学院）の計画を推進」が掲げられたことであったと思われる。平成27年度初頭の段階で、既にこうした計画が浮上していたが、公文書としては平成28年1月に本学の特設サイトにも掲載されたように、「廣池千九郎生誕１５０年記念事業の概要について」で明らかとなった。

奇しくも平成27年3月に学校教育法施行規則が改正されるとともに、一部改正学習指導要領（小・中）が出され、「特別の教科　道徳」が成立したのと同時期であった。

この生誕１５０年記念事業の発表を承（う）けて、平成28年度末に本学の学内に「新形態大学院設置準備プロジェクト」が設置された。筆者はそのプロジェクトメンバーの末席に名を連ねることとなり、「道徳教育に関する教員・研究者養成大学院構想」の実現可能性について調査に当たることとなった。

(2)構想の具体化

「新形態大学院設置準備プロジェクト」では、「道徳教育に関する教員・研究者養成大学院」を「道徳大学院」と仮称し（以下、「道徳大学院」という）、具体的な構想に入ることとなった。まずプロジェク

トメンバーの中の教員が取りかかったのは、設置の目的、育成する人材像を設定することであった。その次には、カリキュラムポリシーとそれに基づく具体的なカリキュラムを設計することであり、その後はカリキュラムに基づく科目とその担当者を検討することであった。

一言では片付けられないが、これらの構想の具体化に膨大なエネルギーを要したことはいうまでもない。ただ、その過程を振り返ってみて、重要なポイントがいくつかあった。それは以下の通りである。

①手引きの熟読

そもそも大学の設置等のためには、文部科学省高等教育局大学設置室から出されている「大学の設置等に係る提出書類の作成の手引」に基づいて、書類を作成し、申請しなければならない。ちなみにこの手引きは300ページ弱ある。まずはこれを理解しないことには、何も始まらないのである。すべてを熟読し、時にプロジェクトメンバー全員で読み合わせを行うなどし、共通理解のもとで、個々の作業を始めた。

申請書類を実際に書きはじめると、常にこの手引きを傍らに、改めて該当箇所を読み直し、示された手順に従って該当項目を過不足なく書くように務めた。今手元に残っているこの手引きには、膨大な付箋とマーカーが引かれており、何度も確認したページには手垢がついている。研究者として自分が書いたものでさえ、これほどまでは読み返さないだろうというくらい、この手引きには目を通した。

②申請書類の作成

申請書類は、最終的に文部科学省に「設置の趣旨等を記載した書類」としてまとめ、提出しなければならない。この書類は、文部科学省にて認可されると一般公開されることになっている。したがって、例えば教育学部を設置したいのであれば、他大学が作成し、認可を受けた教育学部の「設置の趣旨等を記載した書類」をいわゆる先行研究として参照できるわけである。ところが先述したように、道徳大学院は先例がないため、全くのゼロベースでこの書類

を作成しなければならなかった。もっとも、他大学の教育学研究科や教職大学院の申請書類の形式面には参考になる部分が少なからずあった。

なおこの書類は、結果として本文にあたる部分が30ページになり、それに関連する添付資料は３００ページにも及んだ。30ページは産みの苦しみ、３００ページは書きの苦しみを味わった。

またこの書類は、先述した手引きに則った形式や書式で記載されていないと、そもそも受理してもらえないため、ある程度書き上げると不備がないか何度もチェックを行った。こうした書類のチェックが大変なのは、同じ人間であっても日によって感覚や視点が異なるため、いっぺんに通読するという作業が不可欠になることである。朝から晩まで丸一日使って、とにかく書類を読み切る作業を行った。また当然ながら、一人の人間では限界があるため、複数のプロジェクトメンバーでダブルチェック、トリプルチェックを行った。

③文科省への事前相談

①②の作業を進める過程では、疑問や不明な点がある毎に、文科省へ問い合わせを行った。メールでの問い合わせも可能であったが、重要な案件の場合は直接出向いて、文科省の専門官に相談した。相談に当たっては、事前に電話で予約をとるのであるが、これも非常に大変であった。回線がほぼ毎回混み合っており、なかなかつながらないため、教育研究支援グループの職員が4、5人で受付開始時刻と同時に文科省へ電話をし、ようやくつながった回線にプロジェクトメンバーの担当者が代わって希望日時や相談案件を伝えた。

また、実際の相談も時間（1時間）が決められており、その時間内でこちらの相談案件を伝え、応じてもらわなければならない。限られた時間の中で、文科省の専門官は凄まじい勢いでこちらが用意した書類を読み、その上で、いろいろと指摘をいただいた。最も多かったのが、こちらの不手際であるが、手引き通りの形式や書式で書かれていない点であっ

た。また、不足や欠落している記述についても非常に細かく指摘をいただいた。あれだけ事前にチェックをしたにもかかわらず、やはりミスはあるのである。こうした指摘に対して、これを持ち帰って協議し、書き直すことを繰り返した。

余談であるが、この文科省へ訪問しての事前相談は、「大学の設置等に係る」事業を行おうとする全国の大学が年中行っている。そのため、待合室では他大学の方々をお見かけしたが、地方の大学にとって、この事前相談は一大出張である。相談案件に関係する担当の教職員が総出で、キャリーバッグに膨大な書類を詰めて来ていた。こちらも何度も足を運んだが、文科省まで電車一本で行けるのは、まだまだ恵まれているほうであると感じたことも事実であった。

(3)申請直前

先述したように、設置申請は平成29年3月末に行った。その直前の1～3月は時間との戦いで多忙を極めた。この頃には書類の形式や書式は既に頭に入っており、内容の整合性や説得性のある文章で仕上げることがメインとなっていた。プロジェクトメンバーでのメールのやり取りは日に何通も飛び交い、添付された書類を全員で確認し、それぞれが加筆修正を重ねていった。定期的に行っていた会議・打ち合わせも、この頃には解決すべき案件が上がったり、突発的な問題が生じた度に行い、必然的に回数と時間も増えていた。

最終的に出来上がった書類一式は、文科省へ30部提出することになっていた。330ページ近くに及んだ分厚い書類を30部、落丁がないように確認し、ファイリングしたことも非常に地味であるが大変であった（もちろん郵送した）。不思議なことに、出来上がった書類一式に対しては愛情に近いような感情を持つに至っていた。1年間にわたって、プロジェクトメンバー全員で精魂込めて作り上げてきた実感があったからである。

認可後の準備および具現化の段階

平成29年3月末に申請を行い、文科省から認可に関わる第一次の意見伝達があったのは、5月末であった。文科省からの意見は、是正意見、改善意見、要望意見、その他意見の4つに大別され、順に強い性格のものとなっている。結果的に道徳大学院の設置申請に対しては、改善意見と要望意見がついた。（なお、是正は対応が不十分な場合は認可が不可となる程強いものであり、改善は修正が求められ、要望は回答が求められるものである）。回答への猶予期間は1か月とされ、6月に入って迅速な対応が求められた。再び時間との戦いが始まった。書類の修正はもちろんであるが、当該事項の関係各所、関係者への調整に時間を要することとなった。急なお願いにもかかわらず、関係各位には迅速な対応をいただいた。またこれも地味に大変であったのが、やむを得ない点であるが、例えば加筆修正をするとページ数が変わったり、図を新たに挿入すると図に付与した番号が変わることなどで、改めて書類全体を見直さなければならないことであった。

そして6月末に再度提出し、その結果が8月末に届き、正式に大学院の認可がおりた。1年半に及ぶ設置申請に関わる作業が報われた瞬間であった。ただ、安堵するのも束の間であった。というのも、認可が下りるまでは、学生募集や入試情報の公開、告知は制限されていたため、ここから速やかにこれらのことを推し進めていかなければならなかったからである。

(1)学生募集

もっとも、ある程度は下準備を進めてきており、新たにプロジェクトメンバーに職員の方々が加わって、本格的に始動したというのが実情であった。特に広報の観点から、道徳大学院のパンフレットやホームページの作成に取りかかった。ホームページでは、道徳大学院の概要を周知するとともに、教員就任予定者によるエッセイを定期的に発信した。また、パンフレットは全国の教職課程を持つ大学や、

近都県の小中学校などに送付した。パンフレットの封入作業は、数千部を超えたが、毎回プロジェクトメンバー全員による人海戦術で乗り切った。

一方で、職員のプロジェクトメンバーは、千葉県をはじめ、茨城県、埼玉県、東京都の各教育委員会、またそれらの都県の市区町村の教育委員会を訪問し、いわゆる大学院設置基準第14条特例による現職教員の受け入れについて説明して回った。まさに地道な開拓活動であった。

(2)入　試

入試については、一般入試と特別入試の二つとした。一般入試はストレートマスターを、特別入試は現職の教員を、それぞれ主たる対象として、アドミッションポリシーに基づき、資質や能力を総合的に評価することとした。

入試それ自体は、既存の研究科の日程や概要を参考にしながら2回実施することとした。時間的制約もあり、第Ⅰ期の入試は11月に実施することとなり、直ちに準備を進めた。

以上のような学生募集や入試情報を、受験希望者や関心を持つ人に対して直接周知するために、説明会を行うこととし、大学院グループの職員の協力を得て、第Ⅰ期の入試までに4回開催した。説明会では、道徳大学院の教員就任予定者による研究紹介や現職教員の受験希望者のための個別相談に応じるなどの工夫をした。なお、第5回目の説明会は1月に行い、第Ⅱ期入試は3月に行った。

(3)施設整備

施設整備は、まず環境として、道徳大学院は既存の研究科と同じく、大学院のある生涯教育プラザに置くこととして、教員就任予定者の研究室および在学予定者の研究室を準備するところから始めた。既存の研究科の教員や大学院生にも迷惑をかけたが、十分なスペースを確保することができた。

次に図書として、研究や教育に活用する書籍や雑誌の収集と配架に取りかかったが、こちらもリストを作っておくなどの事前準備をある程度していたことと、図書館の職員の方々の協力を得て、スムーズ

に進んだ。建学以来道徳教育に力を入れてきたこともあり、既に多くの貴重な文献は揃っていた。新たに最新の道徳教育と、広く教育学に関わる文献を揃えた。図書整備に関連して、図書館において、道徳大学院や道徳教育に関する企画展示を実施することにもなった。

おわりに

この事業は、実際に着手して申請するまでに1年、申請して認可が下りるまでに半年、そして認可が下りてから開設までに半年という、実に2年間に及ぶものであった。

総じていえば、山あり、谷ありであったが、今思うのは無事にここまで辿り着いたということと、設置申請という視点から大学というものを改めて眺めることで、いろいろと学ぶことも多く、そして楽しかったということである。こうした感慨を抱くのは、何よりもここまでともに事業を進めてきたプロジェクトメンバーの方々のおかげである。それぞれが高い専門性を持ち、またここが最も本学らしいところであるが、それぞれが高い道徳性を持ち合わせていた。難解な事業に優秀な方々と取り組むことがどれだけ面白いことであるか、仕事の醍醐味というべきものを教えていただいた。プロジェクトメンバーの教員は授業を、職員は通常業務を抱えて、つまり本務と兼務という形でこの事業に取り組まれていたが、本務を滞りなくこなしつつ、この事業でも大いにその力量や経験を発揮されていた。そうした姿に何度も勇気づけられてきたことで、ここまで何とか務め上げることができた、と今は感謝の気持ちしかない。またいささか気障な言い回しになるが、「日本で初めての大学院をつくる」ということに、その一員としてともに仕事ができたことを誇りに思っている。

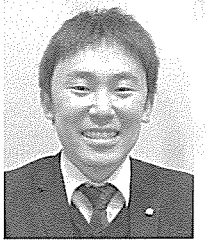
最後に、直接この事業に携わったプロジェクトメンバーの他に、非常に多くの関係各位の惜しみないご支援、ご尽力によって道徳大学院は認可されることとなった。改め深く感謝を申し上げたい。

〈特別企画〉日本初「学校教育研究科道徳教育専攻」

社会人の学び直しに対する私の想い

――「学校教育研究科道徳教育専攻」設置――

大学事務局学校教育研究科設置準備室　松野大祐



既にご存知の方も多いと思うが、平成30年4月から本学大学院に日本初となる「学校教育研究科道徳教育専攻」が開設された。本稿では開設までの経緯や本研究科が目指すもの、そのためのカリキュラムや入試などの概要、私の本研究科に対する想いを述べたい。

開設までの経緯

本学では昭和34年に四年制大学に認可されて以降、道徳は生涯を通じて学び続けるものであるとの考えから、本学の基幹教育として、大学生に対する道徳教育を全学的に実施し、必修科目「道徳科学」として展開するに至っている。このことから、本学は開学以降、道徳に対して真摯に取り組んできたといえるであろう。

平成27年3月27日に「学校教育法施行規則」が改正され、小学校および中学校の学習指導要領、特別支援学校小学部および中学部の学習指導要領の一部改正により、「特別の教科 道徳」が新たに位置づけられ、小学校では平成30年度、中学校では平成31年度から開始されることになった。ここで問題の一つとなるのが、担当教員の養成であろう。そこで、本学がこれまで培ってきた研究と教育の蓄積と実績を、より広く社会に還元する絶好の機会として捉

え、本研究科の設置を計画したのである。

本研究科が目指すもの

本研究科の目指す人間像は(1)道徳教育および道徳科のよりよい在り方を探究する人材、(2)道徳教育を通じて学校の教育力を高めることができる人材、(3)教員および研究者の資質・能力として、自己の品性や道徳性を磨き続ける人材、の3つである。そして、これらを実現するために本研究科では道徳教育に特化し、道徳教育の理論に関する多様な研究者と実務の経験が豊富な専門家による指導を行い、グローバルな時代にふさわしい豊富で多様な蓄積と経験を展開していく。本研究科を修了すれば「修士（教育学）」（英文名称：Master of Education）が授与されるほか、現在取得している教育職員免許状を基礎として、「小学校教諭専修免許状」や「中学校教諭専修免許状」が取得できる。

カリキュラムの概要

カリキュラムの構成は図1の通りである。教育課程の特色は、道徳教育および道徳科の理論と実践をバランスよく研究できるようにカリキュラムを編成しているところにある。実践に関わる具体的な教授法や方法論を、演習を通じて修得する科目が十分に設定されていることはいうまでもなく、それらを基礎づける理論を多様なアプローチによって学修する科目が設定されている。また本研究科は現職の学校教員等、社会人学生の入学も想定しており、このような社会人学生の状況やニーズ、通学の負担等に配慮するため、長期履修制度を設けることや、主要な授業科目を土曜日および長期休暇中（集中講義）に配置し、社会人が学びやすい時間割を編成している。

本研究科での学びの集大成として修士論文を執筆することになるが、修士論文の指導は、内容に応じて少人数ないしは個別のマンツーマンの形態をとる。また指導教員と他に1名の副指導教員（特別研

究を担当する他の教員が担当）による指導体制をとり、多角的かつ効果的な指導を行う体制を整えているだけでなく、ある一定の条件を満たせば特別研究実践報告書に代えることもできる。

入試の概要

本研究科の入学定員は6名である。入試区分は「一般」「特別（社会人）」「特別（現職教員）」の3つで、全入試区分の共通の出願資格として、小学校教諭・中学校教諭一種免許状取得者もしくは当該年度内に取得見込みであることが挙げられる。これに加え、「特別（社会人）」は社会人経験が1年以上、「特別（現職教員）」は教育職員として3年以上の経験を有し、在籍のまま本研究科に入学するなど、一定の条件が設けられている。

また、選抜方法も入試区分によって異なる。「特別（現職教員）」では経験や知識を勘案して口述試験と書類審査のみであるが、「特別（社会人）」はそれらに加え「筆記試験（論述）」が、「一般」はさらに「筆記試験（記述）」が加わる。

試験日程は年2回、11月と3月に実施された。また、本研究科の概要や担当教員による研究発表等を行う説明会も年に数回開催している。本研究科に興味がある方は、まず説明会へご参加いただきたい。

※これらの情報は平成29年度実施のものであるため、詳細は本学大学院のホームページで確認いただきたい。

私の本研究科に対する想い

最後に、私の本研究科に対する想いを述べたい。まず、私は本研究科に限らず、社会人の学び直しの一環として大学院進学は有用だと考えている。普段仕事をしていると「なぜこうなのだろう」という素朴な疑問を抱くことは少なくない。しかし、時間が限られている中でこれらの疑問を全て解消しながら仕事をしている人は、あまりいないのではないだろうか。なぜなら、起源を見つけ、歴史を辿り、現状や課題を見つめ、次へとつなげるといった膨大な作

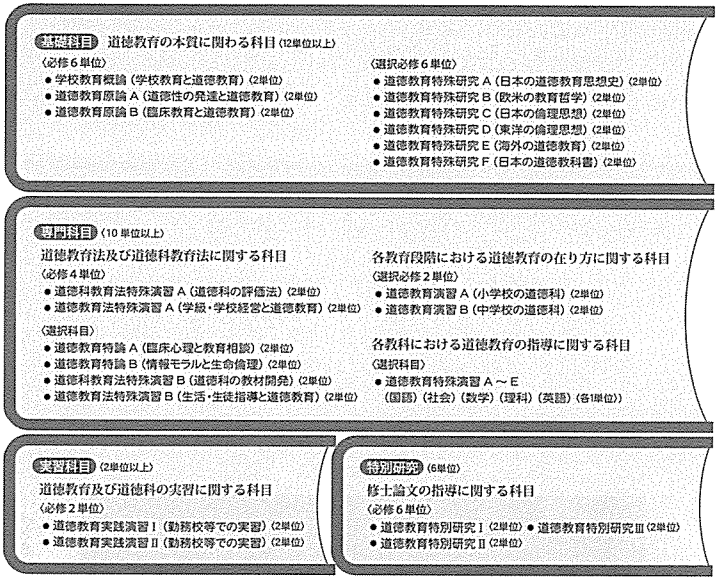


図1　麗澤大学大学院学校教育研究科道徳教育専攻のカリキュラム構成

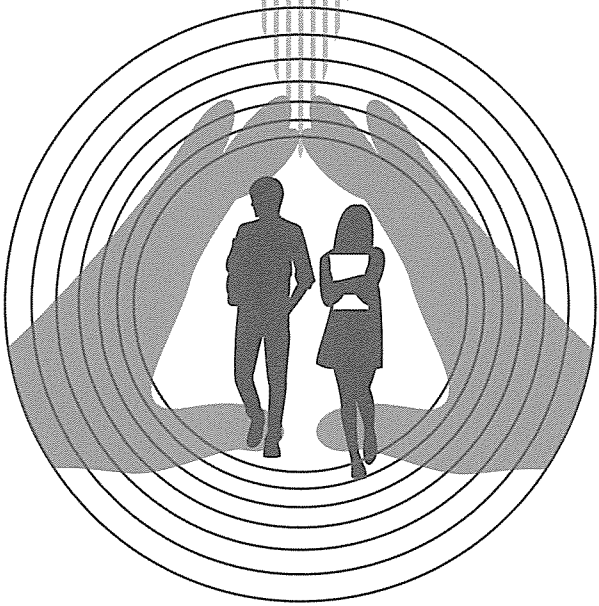
業工程が待っているからである。これらを意識的または無意識的に悟り、「目の前の仕事にすら忙殺されているにもかかわらず、ましてや根本から見直すのはさらに大変だ」という意識になるのも頷ける。

私自身、仕事上でこのような経験を数多くしてきた。きっと誰かがそのうち判断してくれるだろうと心の中で思っていた。しかし数年働くと「このままではいけない」という気持ちが少しずつ芽生え始め、結果として大学経営を学べる大学院へ進学し、平成29年3月に無事修了した。その後は理論を基にした仕事をするように意識し、結果として仕事の質や速度が上がった実感もある。

このことから、本研究科の特徴でもある「理論と実践の往還」は、仕事をする上でも次なるステップにつなげるためにも大変重要なことであると、私は自身の経験から自信をもっていえる。この文章を読み、本研究科への入学者が1人でも増え、学校教育の発展の一翼を担う人材が育ってくれることに期待したい。

特集

特色ある麗澤教育



〈特集〉特色ある麗澤教育

ドイツ語・ドイツ文化専攻の教科書を使わない授業

外国語学部准教授　草本　晶

教科書を使わない理由

ドイツ語・ドイツ文化専攻（以下、ドイツ語専攻）では、5年ほど前に教科書を手放しました。それまでは、日本人教員が文法の教科書を、ネイティブ教員がドイツで出版された教科書を使用して週6コマの基礎演習科目（ドイツ語科目）を分担して授業を行っていましたが、さまざまな理由により、長年続いていたそのシステムを思い切って変えることにしました。

その理由の一つ目は、教科書がシラバスを決めてしまうことに違和感を抱いたからです。教科書を使用していたころは、「一冊を1年で終わらせるためには、1週間ごとに何ページまで終えていなければいけない」という考え方があったため、授業進行のテンポが決まってしまうことがありました。学生がどれだけ理解したかということより、教科書を終えることのほうが優先されていたと言っても過言ではありません。ある年などは、進行が遅れてしまい、つじつまを合わせるためにドイツ語の関係代名詞、zu不定詞句、受動態のすべてを1回の授業で終わらせたこともあります。かなりの無理がありました。

教科書をやめた二つ目の理由は、留学に行った多くの学生が現地で「ドイツ語が話せない」と感じる

ことにありました。日本では、筆記テストでよい成績を収めている学生でも、ドイツへ行くと「言葉が出てこない」「先生の言っていることにどう反応していいか分からない」「他国の留学生がぺらぺら話しているのを見ると自信がない」とこぼします。授業で取り扱った項目も、確認のテストが終わってしまえば、ほとんど忘れ去られてしまい、知識として定着していなかったことも問題でした。

そして最後の理由は、学生たちが苦しそうにしている点でした。留学に行きたいがための条件である検定試験合格のプレッシャーと闘い、テストの結果に落ち込み、勉強ができない自分は頭が悪いと考えて自信をなくしている学生の姿を見て、教員もこれでいいのか悩みました。

特に、コミュニケーション能力が高く、だれよりも会話が得意であるにもかかわらず、筆記試験の点数が芳しくないがために留学の条件を満たせないという学生が現れたとき、「こういう学生こそドイツに送りたいのに」とジレンマに陥りました。そこで、カリキュラムを全面的に見直さなければと考えるようになったのです。

留学プログラムとコミュニケーション能力の向上

ドイツ語専攻では、2年次から3年次1学期までドイツで勉強する留学制度が充実しており、それがカリキュラム全体の柱となっています。この留学で学生たちが多くのことを吸収して学べるようにするためには、まずコミュニケーション能力を育てることが重要であるという結論に至りました。

ただ「コミュニケーション能力を育てる」といっても、具体的に何をどうすればよいのでしょうか。「コミュニカティブ・アプローチ」を謳っている教科書も数多く出版されています。実際に教科書を分析してみると、「コミュニカティブ・アプローチ」を唱えているものでも、ほとんどが文法項目の難易度に沿って組み立てられていることが分かりました。一つの文法事項を理解しないと次の章に進めない、あるいは逆に後に出てくる文法項目は、前の章

で出てきてはいけないということがよくあります。また、その暗黙のルールのために、会話文の例が不自然であったり、シチュエーションに無理があったりと、実生活におけるコミュニケーションの隔たりが感じられました。

こういった教科書を使ってコミュニケーション力をつけることは決して不可能ではありません。ただ、ドイツ語専攻では、文法の知識は後からでも定着させることが可能であると考え、文法シラバス自体をいったん保留にすることにしたため、やはり教科書は使わないことにしました。

私たちにとって何よりも重要だったのは、学生たちが留学先で自信を持って立ち回れるようになることでした。現地に行けば、情報量が多く分からないことがいくらでもありますが、その中から理解できるものを手がかりにして壁を乗り越えることは可能です。また、何か問題が生じたときに、一人だけでそれを解決しようとせず周囲に助けや助言を求められるなら、異文化環境でのストレスは軽減され、新しい人間関係を築くことにもつながります。何よりも周囲と頻繁に言葉を交わすなかで、「伝えたいことがある程度伝わる」というポジティブな自信が芽生えれば、積極的に外の世界と関われるようになり、留学生活もさらに充実することでしょう。

「教科書を使わない授業」の枠組み

以上のような考えから、授業は次のような原則を元）に内容を決めることにしました。

・実生活におけるコミュニケーションに近い状況を教室でも展開すること。
・トライ&エラーに重点を置き、まずはとにかくチャレンジさせること。
・共同作業を多くして、学生同士のインターアクションを活発にすること。
・学生たちの創造性を引き出すために、彼らにとってリアルなテーマを扱うこと。

第二言語習得理論から見れば、これはＴＢＬＴ（Task-Based-Language-Teaching）の考え方と似てい

ます。ＴＢＬＴは、１９８０年代から提唱され、その後の外国語教育に関する数多くの実証研究を基盤にしています。教室における実践については、さまざまな条件や批判もありますが、日本でも英語教育や日本語教育の現場において成功例がいくつも報告されるようになってきました。

幸いドイツ語専攻には、この外国語教育法を経験的に知っている教員が複数名おり、彼らの意見を中心にしてシラバスを練ることにしました。

学習目標は、留学制度を見据えてある程度定まっていたものの、それを実際のシラバスに落とし込むことはそれほど簡単ではありませんでした。どのようなテーマを選び、どのような方法で学習活動を進めるのか、教材の内容、課題の提示の仕方、成果の評価方法などを教科担当者間で、議論、打ち合わせを重ねました。

正直に言うならば、今でもシラバスは確定しておらず、毎年、計画、実施、評価、改善を繰り返しています。それでもだいぶ形にはなってきました。

テーマは、自分自身に関連する事柄から出発して、徐々に周辺の人々、そして自分が暮らしている社会へと広がっていくように決めました。教員は、そのようなテーマに関連させて言語活動を活性化させるようなタスクを定めます。具体的な課題の進め方を示すと次のようになります。

1. 教員は、インプットとしてテクスト、動画、ポスターなどを与える。
2. 学生は、辞書を使わずにその内容を推測し、理解できた部分をまとめる（グループで）。
3. その後辞書などを使って、細かい内容の確認をする（グループで）。
4. 文法や言語表現に関して理解できない場合、疑問を解決する（クラス全体で）。
5. 教員は、テーマに合わせたアウトプットの形式を提示する。
6. 学生は、アウトプットの準備をする（グループで）。
7. アウトプットの発表（グループで）。

8. 発表内容について、質疑応答を行う（グループ、あるいはクラス全体で）。
9. 全体的に振り返りを行い、次の目標を明らかにしておく（クラス全体で）。

「教科書を使わない授業」の成果

このように授業内容を変更したことによって、いろいろと気づく点がありました。まず第一に、学生は教員が思っている以上の能力を発揮することができるということです。それまでは、「むずかしすぎるのではないか、複雑すぎるのではないか」と思ってやらせていなかったことも、敢えてやらせてみることで、期待した以上の成果が出てきました。

第二は、時間を十分に与えることの重要性を認識しました。冒頭にも書いたように、以前は教科書を終わらせるために、学生が理解しているかどうかは二の次にして授業を進めていましたが、学生の学習スピードに合わせて時間をとるようにしたところ、理解度、その後の知識の定着度も格段に上がりました。

次いで第三に、学生にとってリアルなテーマを取り上げることで、モティベーションも上がることも分かりました。架空の人物がドイツに行って経験する話よりも、自分自身や身近なことについて意見を求められたりクラスメイトに尋ねたりすることによって、課題に取り組む姿勢が変わりました。つまり、ドイツ語の形よりもドイツ語で表現された内容のほうに意識が集中するようになり、学生の興味が高まりました。

第四は、互いを尊重する姿勢が見られるようになりました。筆記テストを行っていたときは、個人個人でどれだけの点数を取れたかが重要だったのですが、グループワークを増やし、人の力を借りなければ作業が進まないような課題を組み立てたところ、自分や仲間の得意不得意を認め、うまく役割分担をしたり、互いに補い合ったりするようになりました。クラスメートは競争相手ではなく、互いに助け合う仲間になりました。

しかしながら、この授業には難しい面もあります。まずは、評価の方法です。現在は一つのクラスに少なくとも3名の教員が関わり、複数の目で学生一人ひとりを観察するようにしています。そして成績評価は、教員の協議によって決めています。しかし、筆記テストは行わないため、具体的に何を基準にして成績評価を行うのか、明らかにしておかなければなりません。ここでは教員同士の連携が、特に重要になります。

また、高校までの受験勉強に慣れた学生が、この授業方法を理解するまでにはそれなりの時間がかかります。「文法をもっと教えてほしい」という要望に対して、何のためにこのような授業をやっているのか、文法はどのように学ぶのが効果的か、ときには授業を中断して話し合います。教員主導の授業に慣れた学生に、自己責任が伴う学習者中心の授業を理解してもらうのは、簡単ではありません。

実際に、文法を中心としない外国語学習法はあり得るのかと疑問に感じる人も多いでしょう。ドイツ語専攻では、文法を「中心」にしていないだけで、全く教えていないということではありません。学生が知りたいタイミングに必要なことだけを取り上げるようにしているのです。それでも実力は付きます。今年まで3年連続で留学帰国後すぐの学生がドイツ語検定準1級に合格するようになりました。大学入学から2年半でのこの成果は、誇れるものです。

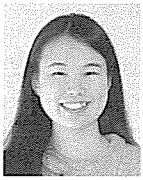
将来に向けて

最近は、高校生を対象に開催しているオープンキャンパスでも「教科書のない授業」について尋ねられることが多くなってきました。実績が積み重ねられていくにつれ、麗澤でドイツ語を学ぶ魅力も高まっていくはずです。留学後の3、4年次のカリキュラムをどうデザインするかなど、まだまだやるべき課題はたくさんありますが、学生が楽しそうに学んでいることが教員のモティベーションにもつながっており、しばらくはこの方法で授業を進めていくつもりです。

○○○○○

学生からの視点

田口華子
（ドイツ語・ドイツ文化専攻2年）



私にとってドイツ語専攻の授業は、言語を学ぶ意味と楽しさを教えてくれるものです。

私がドイツ語を勉強し始めたきっかけは、卒業した高校がたまたまドイツ語教育に力を入れている学校だったからです。高校3年間ドイツ語を勉強していましたが、高校での授業はそれまでの英語の授業と変わらず、日本人向けに作られた教科書を使い文法や表現を決められた順番通りに学んでいくものでした。授業内容も文法事項の説明と長文読解が9割以上を占めていて、高校を卒業した当時の私はドイツ語を3年間学習したにもかかわらず、話すことも書くこともできませんでした。

麗澤大学に入り、草本晶先生の授業での一番最初の課題が、ドイツ語の絵本を見て内容を推測するというものでした。私の他にも4人ほどドイツ語既習者はいましたが、他の同級生はドイツ語を全く知りませんでした。さらに先生に単語の意味を質問しても基本ヒントしか与えてもらえず、当時の私は正直「無茶ぶりにも程がある！」と困惑しました。しかし、ほかの班員が英語に似ている単語を見つけたりなど工夫しながら内容推測を進めていく姿を見たとき、「単語の正しい意味を知らないと文章は読めない」という、これまでの認識が違っていたのだと気づくことができました。また、一つの文章を意見交換しながら読んでいくことによって自然と議論が生まれ、新たな見方や知識を身に付けることができるので、一人で学習する時よりも多くの知識を得ることができると実感しました。それまで語学勉強は一人で机に向かって黙々とやっていくものだと思っていた私にとって、みんなで協力していく学習スタイルは新鮮であり、課題は大変でしたが楽しみながら取り組むことができました。

一通り絵本の内容推測が終わり、次に出された課題は「この絵本を参考にして自分でドイツ語の絵本を制作して発表する」というものでした。他の人の絵本を見て、内容が分からないところはドイツ語で

質問しドイツ語で回答するということでしたが、ドイツ語の単語の意味をドイツ語で分かりやすく説明するのはとても大変でした。しかし、限られた語彙を総動員して自分の伝えたいことを話すという経験は、この授業だからこそできたのだと思います。

今思い返せば、この絵本の課題はドイツ語専攻の授業の特徴を一番色濃く反映していました。ドイツ語専攻の授業スタイルは、分からないところがあったらどんなに小さなことでも質問し、まずはみんなで考えていくというものです。これによって、教わる人が分からなかったところを解決するだけでなく、自分が同級生に教えるという作業を通してより理解が深まります。また、インプットとアウトプットを同時進行で行うことになるためより頭に残りやすくなると感じています。

このような授業体系を実現できるのも、教科書を使わずに先生方が用意したプリントを使って授業を行うからだと思います。私たちは複数の先生方から教わっていますが、各学期ごとに「アイデンティテ

ィ」や「お金」などといったテーマが2、3個あり、そのテーマにあったプリントを各先生が準備して授業が行われています。教科書があると、その通りに授業を行わざるを得ないのですが、先生が作ったプリントを中心にして授業が行われると、以前学んだことを振り返ったりするという柔軟性が生まれます。また、各先生が授業を一から作ることにより授業に個性が反映され、同じ「お金」というテーマでもドイツの大学生の生活費やボランティアの話題など多種にわたり学ぶことができます。こうして、同じテーマを多角的に学ぶことができるのも教科書のない授業の特色です。

また、高校までのドイツ語の授業や英語の授業では、言語の授業にもかかわらず言語を使って何かを表現する時間が十分に取られていませんでした。しかし、ドイツ語専攻の授業では、まず先生が用意してきたドイツ語の記事を読み、その記事の要約や自分の意見をドイツ語で発表することを通して、読解力と会話力の両方を身につけることができます。

約一年半の授業を通して、限られた情報から内容を推測する力と、自分の意見を分かりやすく説明する力が身に付きました。この二つはドイツ語を話すときに限らず、何か自分の意見を発表する場であったり、日常生活の中や就職した後も必要になる力です。ドイツ語専攻の授業はドイツ語を学習できるだけでなく、ドイツ語を使って社会テーマを学び自己表現することができます。

私にとってドイツ語を学ぶということは、ドイツやヨーロッパの社会や文化を学ぶためのツールを身に付けるということです。高校3年間で身に付かなかった会話力が一年半で身に付き、ドイツ語学習の楽しさを知ることができたのも、ドイツ語専攻の授業のお陰です。これからもドイツ語専攻の授業を通じて様々なものを学び、将来、自分が社会のために何ができるかを考えていきたいと思います。

〈特集〉特色ある麗澤教育

スポーツマネジメントコース「自主企画ゼミナール」

～プロスポーツチーム支援活動～

経済学部教授　豊嶋建広
（スポーツビジネス専攻コーディネーター）

スポーツマネジメントコース開設の経緯

スポーツマネジメントコース（２０１８年度よりスポーツビジネス専攻）の自主企画ゼミナールは、柏レイソルから提示された課題の解決を行うＰＢＬ型（課題解決型）授業ですが、この授業の説明の前に、まず経営専攻の中のスポーツマネジメントコースについて説明したいと思います。

近年、時代のニーズに応えて多くの大学でスポーツや健康関係の学部、学科、専攻、あるいはコースが開設されてきました。そこで、本学でも、経済学部の中でスポーツ関連の仕事に就きたいと考えている学生のためのコースを作れないだろうかと検討を進め、２０１５年度、経営専攻の中の特別コースとして「スポーツマネジメントコース」を開設しました。

コースの特徴

本大学の建学の理念である、「知徳一体」を踏まえ、「道徳」と「経営」を軸にしていくことにしました。そこで、高校生にも分かりやすいように、コースの趣旨を『「人間力」[1]、「経営力」[2]、「指導力」の３つの能力を身につけ、スポーツビジネス界で活躍できる人材の育成』としましたが、最終的に、この

3つは「人間力」「経営力」「スポーツ力」[3]に変更しました。そして、道徳教育を担当している江島顕一先生にコースに加わり、「人間力」を高めるための方法を開発していただいています。

スポーツマネジメントコースの学生は、経営専攻の学生と同様に経営学を学び、基礎ゼミナールや基礎演習ではグループワークを主体としてコミュニケーション活動やプレゼンテーションの機会を増やすよう工夫しています。また授業で学んだことを、学生の所属する部活やサークルという組織で実践できたかをチェックする「自己評価表」を作成しました。評価項目の中には、「人間力」、「マネージメント」、「スポーツにおける心技体」等に関する20項目が含まれています。

1　人間力：共感力があり、信頼関係を築くことのできる力（道徳が基本にあり、コミュニケーション能力は必須）
2　経営力：経営学の知識と思考力
3　スポーツ力：スポーツ医科学や健康の知識とそれらを基に指導する力

「スポーツ力」を高めるための資格

「スポーツ力」というからには、スポーツや健康の知識をしっかりと身につけてもらうための仕掛けが必要だと考えました。そこで着目したのが「資格取得」です。スポーツに関する基礎的な専門知識を学ぶことができる公益財団法人日本体育協会の「スポーツリーダー」、そして総合型地域スポーツクラブにおいてクラブ運営を学ぶ「アシスタントマネジャー」の認定校となりました。これによって学生は、大学が指定した科目の単位を取得することで、スポーツリーダーの資格取得ができ、アシスタントマネジャーについては、資格取得の際の講習が免除されます。

その他、「認知症予防ファシリテーター」（ＮＰＯ認知症予防サポートセンター）の資格試験を、「スポーツ・健康と社会」の授業の中で受験できるようにしました。この資格は、認知症予防に関わる知識を有し、認知症予防プログラムの運営に必要な技法、

および効果評価の技法についての知識を有するためのものです。現在、認知症と軽度認知症を合わせて860万人が存在すると推定されており、今後この資格が広い分野で有用になると考えています。

さらに、今後中学・高等学校の「保健体育」の教諭を志望する学生が現れることを想定し、スポーツマネジメントコース開設と同時に、星槎大学と「通信制課程科目等に関する協定」を結び、中高の「保健体育」教職免状を取得できるようにしました。

2015年度は入学後に、経営専攻の学生を中心にスポーツマネジメントコースを希望する学生を募ることとなりました（14名）。この時の学生の約半数が、スポーツマネジメントコース担当の先生のゼミに入り、現在、資格取得やスポーツ関連の会社への就職を目指しています。

2016年度には、スポーツマネジメントコース担当専任教員として、新たに井下佳織先生が就任されることによって、これまで外国学部のみ取得可能だったレクリエーション・インストラクターの資格

が両学部で取得できるようになりました。また、日本ライフセービング協会認定「一次救命処置（ＢＬＳ）」の資格が「救急法」の授業の中でも取得可能になりました。そこで、この年から、上述の日本体育協会の２つの資格取得を必修とし、その他に自分の好みや進路希望に合わせて、残りの「レクリエーション・インストラクター」「ＮＰＯ認知症予防サポートセンター」「一次救命処置」の３つの資格のうち１つの資格を取得することを奨励しています。

スポーツマネジメントコース強化指定クラブ

２０１６年度からスポーツマネジメントコースの強化指定クラブとして、陸上競技部、硬式野球部、剣道部、空手道部、テニス部、弓道部の６つを設定し、高校時代に部活動に励み、大学入学後も強化指定部入部を希望する学生を対象としたスポーツ型ＡＯ入試が始まりました。このＡＯ入試では、高校と本学の部活動顧問の両方の推薦を必要とし、スポーツと勉強の両立が可能な学生を募集しています。

以上のようにスポーツ型ＡＯ入試で入学する学生がスポーツマネジメントコースに所属し、強化指定クラブでスポーツを継続することから、強化指定部の活性化や充実を図るため、あらゆる分野の指導者や有識者を招聘しての顧問・監督・コーチを対象としたコーチングセミナーも開始しました。

２０１７年度には強化指定クラブとして、サッカー部、ゴルフ部、女子ラグビー同好会（２０１８年度よりクラブに昇格）が加わりました。そしてオープンキャンパスでは、多くの学生が、ビジネス専攻の説明を聞きに来ましたが、中でも柏レイソルと本学との教育連携によるＰＢＬ型授業やインターンシップに興味を示す学生が目立ちました。

株式会社日立柏レイソルとの教育連携協定

２０１７年２月に株式会社日立柏レイソルとの教育連携協定締結により、２０１７年度前期からＰＢＬ型の授業が始まったことは前述した通りです。教育連携協定締結後、ＰＢＬ型授業のために柏レイソ

ルのスタッフ2名と担当教員とで数回にわたって打合せを行いました。実は、柏レイソルのスタッフの一人である酒井麗子氏は本学経済学部のＯＧでもあり、お陰で、この授業やインターンシップの打合せも毎回スムーズに進んでいます。

自主企画ゼミナール「プロスポーツチーム支援活動」

この授業の対象者はコースの2年生36名です。この自主企画ゼミは、「学生が企画・発案する学生主体のゼミ」であり、本来なら学生たちが企画するゼミですが、２０１７年度およびその翌年度に限っては教員が企画・発案をすることにしています。２０１９年度からは、スポーツビジネス専攻の2年生を対象とした「スポーツＰＢＬ」という授業になります。

担当に関しては、コース担当の5人の教員によるオムニバスとし、「オリエンテーション」、「中間および最終プレゼンテーション」、「まとめ」では全員参加することにしました。

授業の進め方については、柏レイソルから提示された4つの課題に対してグループを作り、各グループで調査・企画・運営・プレゼン・自己評価（課題の成果と発表を含む）までを行います。最終プレゼンテーションでは、全員がモチベーションと緊張感をもってもらうために、グループのメンバーの全員が発表を行うこととしました。

各回の概要と反省

各回の授業の概要は、以下の通りです。

第1回はオリエンテーション（自主企画ゼミナールの趣旨・目的・進め方の説明）。

第2回の課題の選択やグループ分けは、モチベーションにも関係することから、基本的には学生たちに任せました。ただし、人数の多いグループは、5、6名になるように調整をしました。柏レイソルから提示された課題は、①「ファン感謝デー」企画、②「年間シート特典グッズ」企画、③「アソシエイツ発足10周年」企画、④「ホームゲームイベン

ト」の4つの企画ですが、課題が提示された後、学生からも多くの質問があり、学生たちのモチベーションの高さを感じました。柏レイソルのスタッフ、マスコミや本学の入試広報グループの参加が刺激になったと考えられます。

第3回から第6回の企画・立案では、1年生で学んだブレインストーミング、KJ法、マインドマップ、調査・分析の仕方およびフレイムワーク等がここでも役立つことになり、実戦的なPBL型場合、まさに今まで学んできた断片的な知識（点）が統合されていく（線で結ばれていく）のが、見ていてよく分かりました。

第7回の中間プレゼンテーションでは、発表時間を10分以内とし、その後、約5分の質疑応答としました。発表後のフィードバックでは、課題の成果と発表の仕方、パワーポイントのスライド等について、アドバイスがあり、アンケート調査の再実施や、柏レイソルや他チームについてのさらなる情報収集が求められました。

なお8回から12回では、中間プレゼンテーションでフィードバックされたことを中心に改善が行われ、第13回でプレゼンテーションの準備、第14回で最終プレゼンテーションへと進みました。発表時間は約10分とし、質疑応答やコメントの時間を約5分としました。柏レイソルのスタッフおよび新聞社や本大学の入試広報グループの取材も入り、学生にとっては緊張感のあるものになりました。中間発表に比べると成果内容も発表も改善され、大きな進歩が見られました。柏レイソルのスタッフのお二人からは、すべてのグループに対してコメントをいただき、学生たちも真剣に聞き入っていたのが印象的でした。柏レイソルのスタッフのコメントを総括すると、今回の企画をそのまま使うのは難しいが、部分的に使えそうなものがいくつかあったとのことでした。

第15回はまとめと振り返りです。

後期の「プロスポーツチーム支援活動」

後期には、柏レイソルからの課題に加えて、本学経済学部のＯＢで株式会社千葉ロッテマリーンズのマーケティング部に勤務している吉野慎二氏を特別講師として招聘し、２つの課題を提示していただきました。その課題は、ファンエクスペリエンス（球場での体験）の①楽しいシートの企画（どこにもなくて、嬉しいシートとは）②イベントの企画（共感できるものや楽しいもの）でした。

また千葉ロッテマリーンズ柏後援会から、年一回開催されている柏の葉イースタン・リーグのイベントおよびＺＯＺＯマリンスタジアム「ALL FOR CHIBA柏デー」のプロデュースをするという課題をいただきました。

現在（12月）、学生たちは1月の最終発表に向けて、最後の調整を行っておりますが、プロスポーツチームから提示された現実の課題をグループで取り組むことで、組織の中で協働する力、これまで学んできたことを総動員して統合する力を身につけ、将来スポーツビジネスで活躍するための土台を形成することになったと考えています。

○　○　○　○　○

自主企画ゼミナールのＰＢＬ型授業

大久保　祐樹
（経済学部経営専攻　スポーツマネジメントコース２年）

ＰＢＬ型授業の魅力

私たちが行っている自主企画ゼミナールの授業は、プロスポーツチームである柏レイソルや千葉ロッテマリーンズ柏後援会から課題を頂き、グループでそれらの課題解決に取り組む授業です。そして、このようにプロスポーツチームの課題に私たちが直接取り組むことができ、かつチームに貢献できることがこの授業の魅力だと思います。

また、課題ごとにグループに分かれ、メンバー同

士での意見交換から始まり、調査・分析・企画・プレゼンテーションのすべてを、グループで協働していくおもしろさも魅力の一つかもしれません。

情報収集の大切さ

前期では柏レイソルから頂いた課題を中心に授業は進んでいきました。この授業を通して、創造力だけでなく情報収集の大切さを感じました。なぜなら課題に対しては、新しいアイデアが求められますが、出てきたアイデアが既存であるかどうかを知るためには、それに関する情報が必要だからです。

また、授業を進めていくと、たびたび柏レイソルやサッカーについて調べ知る必要があり、それらについて多くの情報を得ることで、新たな考えや意見を生みだすことができました。このように企画・立案では、まず情報を集めることが重要であると感じました。

その他、なかなか新しいアイデアがでないときは、1年の時に学んだブレインストーミングやKJ法が役に立ちましたが、普段から創造力を鍛える必要性も感じました。

反省と課題

反省としては、自分の意見や考えを述べる時に、現実性や具体性に欠けている場合が多くあったことです。また、プレゼンテーションでも発表の仕方やパワーポイントなどに多くの改善点が見つかり、今後も練習していく必要性を感じました。

3年になり就職活動が始まりますが、スポーツビジネスの世界に就職したいと考えている私にとっては、面接でこの授業で学んだことが大変役立つと考えています。そして、就職した後も即戦力として働けるように、学んだことを自分の中でしっかり整理しておきたいと思います。

○○○○○

「プロスポーツチームの支援活動」授業の魅力

長島　圭
（経営専攻　スポーツマネジメントコース2年）

前期の自主企画ゼミナールでは、プロスポーツチームの柏レイソルから様々な課題を提示していただき、それらの課題についてグループで取り組み、プレゼンテーションを行ってきました。この授業で、プロのスポーツチームと関わりながら学んできたことは、今後スポーツビジネス関連企業の就職に向け、自分の能力を高めることができ、プラスになる面がたくさんありました。

この授業を通して、スポーツマネジメントの難しさ、企画・立案の大変さを学ぶことができました。「いかに人を集めることができるか」、「話題性をつくることができるか」等、今までとは違った視点で様々なことを考えなければなりません。大変でしたが、新たな企画や立案する実戦的な能力が身についたと実感することができます。

また柏レイソルのスタッフの前でのプレゼンテーションは、学内のプレゼンテーションでは味わえない独特の雰囲気、緊張感があり、良い経験になりました。今後、就職活動をするにあたってもプレゼンテーション能力が重要になってきますが、その面で自信をつけることができたのは大変良かった思います。グループワークでも、自分の意見をしっかりと伝えると同時に、他の人の話をしっかりと聞くことの大切さを学ぶことができました。

後期の自主企画ゼミナールでは、千葉ロッテマリーンズ柏後援会から頂いた課題、柏の葉イースタン・リーグのイベント企画とZOZOマリンスタジアムでの「ALL FOR CHIBA 柏デー」の企画に取り組んできました。現在、1月の最終プレゼンテーションに向け、私たちのグループが考えた企画に興味を示していただけるよう、グループのメンバーと意見を出し合い、最後の調整に入っているところで

す。

○○○○○

自主企画ゼミナールで学んだこと

福智佑哉
（経営専攻スポーツマネージメントコース2年）

この授業の魅力は、なんといっても麗澤大学と提携を結んでいる柏レイソルからの課題を自分たちで企画し、それを提案できることです。

私は、前期では柏レイソルの課題に取り組み、後期では千葉ロッテマリーンズの課題に取り組んでいます。実は、私は後期の授業で千葉ロッテマリーンズ柏後援会のことを始めて知りましたが、同じ柏にある麗澤大学の野球部の学生として、この後援会のお手伝いをすることで、プロの野球チームに少しでも貢献できればと思っています。

これまでに、この授業を通してグループにおけるコミュニケーションの大切さを学びました。課題に対して、どのような人たちをターゲットにし、どのような企画が可能かを、グループで何度も話し合うことにより、今まで見えなかったことが見えてきました。

また企画するにあたってアンケート調査やその分析を行うことで、対象者の年齢層や男女の違いによって、企画の内容が大きく異なってくることが理解でき、大変勉強になりました。プレゼンも相手に理解してもらうには、ただ発表するだけでなく、パワーポイントや話し方を工夫する必要があることも分わかってきました。

今後、この授業で学んだ多くのことを、他の授業でも活かしていきたいと考えています。

〈特集〉特色ある麗澤教育

台湾語教育

外国語学部助教　邱　瑋琪

台湾語とは

台湾語とは、中国福建省南部沿岸部閩南語話者が台湾に渡ったときに持ち込んできた閩南語を基に、当時、台湾で使われている諸言語と接触した結果を、オランダ人宣教師が台湾にいた人々の発音をローマ字で記録したことが、現在の台湾語の基の1つとなった。

それから、1895年から台湾は日本植民地時代に入った。初期の言語政策は、台湾の人々に日本語教育を施し、日本の役人に台湾語を勉強させた。この言語接触によって、現在の台湾語の基盤が成り立った。即ち、台湾語の原郷は福建省南部方言の1つであるが、最も影響を受けたのは日本語である。

麗澤大学での台湾語教育

心掛けていること

言葉を学ぶのに、動機と背景があるからこそ楽しくなると思う。九份へ行きたい、夜市が楽しそうなど学生の動機がはっきりしているので、できれば分かりやすく、覚えやすいように台湾語のフレーズを何度も繰り返して練習させる。それから、会話練習を通して、台湾語の中に、日本語の語彙が多く含まれていることに気づき、日本と台湾の繋がりに興味

を持たせることを前期の学びとする。後期は、台湾語の背景、すなわち台湾人の生活、習慣、信仰などについて学ぶ。台湾のドキュメンタリー番組や映画など映像を通して、台湾の本質について理解してから、自国の文化と対照できれば、台湾語学習の目的は達成したと思う。

一方、台湾語は、文字言語ではない。現在の台湾では繁体字を使って台湾語を表記している。しかし、繁体字表記とはいえ、標準化していないので、人によって、同じ単語でも様々な表記が存在している。例えば、「おいしい」という意味で、台湾語では「好吃」「好呷」「好食」などが用いられる。また、発音表記について、16世紀のオランダ人宣教師が記録で使用した「教会ローマ音」のほか、日本植民地時代の「仮名表記」、戦後の「注音符号」「通用拼音」から国際音声記号を用いて、台湾教育部（文部科学省相当）が制定した「ＴＬＰＡ」などが使われている。

これらの発音表記法のうちでローマ字を用いる表記法は、「教会ローマ音」「通用拼音」「ＴＬＰＡ」3種類もあるうえ、これらのローマ字表記は中国語のピンインシステムとは全く異なるものである。特に、中国語学習者に対して、台湾語と中国語を正しく弁別し、混同しないように、前期の授業では、できるだけ中国語を使わないようにし、台湾語の発音には仮名表記を用いるようにした。

一方、台湾語の中に数多く日本語の語彙、外来語が存在している。例えば、「改札」「月給」「水道」から、「カーテン」「スリッパー」「トラック」「シャツ」などがある。日本人学生から見ると、これら日本語由来の語彙に触れるたびに、不思議で楽しく感じられるポイントでもある。

試行錯誤の連続

現在の台湾語の授業の形に辿り着くまで、実は時間が大分かかった。２０１０年度から台湾語の授業を担当するようになったが、最初の5年間は台湾語の成り立ちや歴史、音声体系、発音表記法などを中

心に学生に教えていた。台湾語の発音表記法について、教科書で最も広く使われているのは、上記にも述べたように、オランダ人宣教師が用いた「教会ローマ音」表記法である。一方、履修者のほとんどが中国語専攻の学生であるため、台湾語と中国語は同じローマ字表記を使っているが、それぞれ全く異なるシステムであることを学生に理解してもらわないと上手な発音ができない。学生に教会ローマ音は中国語のピンイン表記の仕組みと異なり、台湾語らしき発音を練習させることで精一杯だった。一方、優秀な中国語専攻の学生が漢字表記を見るたびに、台湾語よりも中国語発音が自然に出てくるので、学生にとって、台湾語の発音記号や発音の仕組みを覚えるのにも苦労が絶えなかったようだ。

せっかく台湾に興味を持ってくれたのに、台湾語の授業で挫折させてしまうことは何としても阻止したかった。そこで、6年目には特別聴講生の台湾人留学生が大人数で授業を聴講してくれたので、台湾人留学生と台湾語会話文の朗読練習をはじめ、共通

の話題を取り上げて、日台文化の相違点などについて台湾人留学生と日本人学生の考え方を互いに聞かせた。異文化交流の楽しさを台湾語の授業を通じて、それぞれ感じることができたが、これに甘んじることなく、今後も更なる進化を目指したい。

現在進行形の台湾語教育

これまでの経験からすると、学生にとって、台湾語の授業で最も苦労したのは恐らく台湾語の発音表記と発音の仕組みであるので、今年度（２０１７）の台湾語授業では、ローマ字による発音表記よりも、戦前の仮名表記に重きを置いた。また、教科書の固い会話内容よりも、台湾人にとって、日常生活でよく使うような会話文を作り、漢字にカタカナで発音表記したプリントを配布することにした。

これらの目的は、主に二つある。一つは、台湾語の発音は難しくない、カタカナだけでも台湾語の発音ができるというイメージを学生に植え付けたかった。それから、もう一つは、会話内容がより単純に、フレーズが短く、すぐ使えるようになったから、自ら発話しても、映画セリフのワンフレーズでもすぐ聞き取れるという達成感が得られやすくなるという狙いであった。

それから、前期の授業は、台湾語の単語と会話文を中心に、発音と会話の練習を重視、授業中に必ず学生全員と会話練習ができるよう時間を取るように心がけた。全員に台湾語が話せるという達成感を味わってもらうためでもあった。後期の授業では、何回かに分けて、台湾語の音韻体系と教会ローマ音の仕組みについて、発音しながら確認する。前期に、ある程度台湾語の発音ができるようになってから、後期に発音の仕組みについて紹介すると、理解しやすくなるからである。

また、後期の授業について、主に映像資料を通して、台湾語の聞き取りと台湾の生活、習慣について学ぶことである。映像資料は、２種類を使い分けている。一つは、現地のドキュメンタリー番組、もう一つは映画を使う。映画と同じテーマを扱うドキュ

メンタリー番組を先に観て、実生活において、これらの内容について考え、台湾と日本との相違点について話し合ってから、映画を観ると、より台湾の生活や習慣が分かりやすくなると考えたからだ。

今後の展望と課題

台湾語の授業は、単なる語学学習だけではいけない。特に麗澤大学は台湾との交流が深く、姉妹校との交換留学制度もあるので、台湾語を通して台湾の生活、文化も学べる授業でありたいと筆者は考えている。また、他の外国語の学習時間を比べると、1年間しかやらない授業なので、いかに楽しく学べ、台湾語を話したくなる、台湾に行って体験したくなるような誘発剤にしたかった。それから、台湾語学習を通して、自らの生活、文化、信仰などを考えることもこの授業の狙いの1つである。最後、台湾に残されている日本文化を探し、先人が台湾に残した偉業を感じ、日本と台湾の繋がりに気づくことになれば、目標達成だと思う。

学生の見方

今学期、台湾の授業を受けていた学生の声を一部抜粋して掲載する。学生の見解と教育者の目標と合致しているかを、以下から確認することができる。

台湾語を勉強したきっかけ

(1)高校生の時の修学旅行の行き先が台湾だったのと台湾人の友達がいるので、何となく台湾にゆかりがあるなと思ったのが履修のきっかけでした。

(中国語専攻3年 髙佐愛海)

(2)今年の夏、語学研修として3週間台北へ行き、台湾の文化、人、暮らしが好きになりました。台湾人は非常に日本人に優しく、台湾で困ったときはいつも助けてくれました。帰国してからも台湾という国と何らかの形で繋がっていたいと思い、この授業を履修しました。

また、私は3年間中国語を第二言語として履修しており、中国語と台湾語の違いについて興味を

持ったので、この授業を通して勉強したいと思いました。（英語・英米文化専攻4年 近藤夏樹）

この授業の魅力

(1)この授業の魅力は、先生が台湾人なので、台湾のことについて詳しく学ぶことができることです。また、少人数での授業なので分からないことや知りたいことがあればすぐにでも質問できます。授業を通して、台湾語や、台湾人と日本人の風習や日常生活での考え方の違いについて様々なことを知りました。私は台湾語や文化について学びながら台湾にとても興味を持つことができました。私がもし台湾に行ったら、台湾語を少しでも使えるように勉強していきたいと思っています。（中国語専攻3年 岡部凪紗）

(2)先生はただ単に台湾語の発音や単語を教えてくださるだけでなく、台湾の文化や習慣なども織り交ぜながら説明してくださるので、とても楽しいし理解がしやすかった。

また今年の6月頃には台湾から来た留学生たちと交流する機会もありました。普段から留学生がたくさんいる麗澤大学ですが、なかなか会話する機会がなかったので、すごく貴重な体験ができましたし、楽しかった。

中国語の授業なら他の大学にもたくさんありますが、台湾語となると他大学にはあまりないと思います。少人数の環境で学べるという点も、とても良かったと思います。（中国語専攻3年 高佐愛海）

(3)台湾語という言語だけでなく台湾の文化についても学ぶことができます。そして、その文化についても伝統的なことだけでなく、最近の台湾の若い人たちの間で流行っているものや流行っていることなどを教えてもらえ、最新の台湾の文化についても学ぶことができました。

また、それだけでなく台湾人の価値観などを日本人と比較しながら、分かりやすく教えていただけたので退屈することもありませでした。そして、この授業では台湾人の学生と交流する機会も

あり、より台湾の文化や台湾人について理解を深めることができました。

このように台湾語の授業では言葉だけではなく、台湾の文化や価値観を台湾人の先生に教えてもらうことができて、台湾という国についても学ぶことができる授業でした。（英語コミュニケーション専攻3年 黒川和幹）

(4) 私はこの授業を通して、台湾について知らなかったことや、間違って理解していたことに多くの気づきがありました。また言語だけの習得ではなく、現地の人だからこそ分かる台湾の生活や習慣の実態を、台湾人の先生から聞くことができ、日本と文化習慣の違いを知ることができます。

台湾は日本語が通じやすいとよく言われますが、この台湾語の授業を通じて現地の人と中国語ではなく日本語でもなく、ぜひ台湾語で会話をしたいと思います。またいつか台湾に行く機会があれば、授業で知りえた台湾の実際を、この目で確認してみたいです。（中国語専攻3年 平田瑞季）

(5) 麗澤大学の中国語専攻ではほとんどの授業が少人数ですので、一人ひとりがちゃんと参加できる授業となっています。台湾語もまた少人数ですので、台湾についてのイメージを出し合い、自分の考えを発言できるなど、参加型授業となっています。

また台湾の冠婚葬祭だけでなく普段の何気ない習慣まで、今まで知らなかった台湾が見える授業であり、毎回、新しい台湾を知ることができました。（中国語専攻3年 朝部瑠美）

(6) この授業の魅力は、少人数制なので先生と学生との距離がとても近く、台湾語だけでなく台湾の文化についても、映画や現地の話題などを用いて授業を行ってくれますので、とても楽しく学べました。また、台湾語の発音や単語の意味を丁寧に教えてくれるので、飽きずに学べるのも魅力の一つでした。（中国語専攻3年 柳田知春）

難しかった点

(1)習い始めて半年間経っても発音だけは難しいなと感じました。しかし先生がいろいろなシチュエーションの会話文を準備してくださり、それを繰り返し練習するので時間があるときは自主的に練習するようにしました。(中国語専攻3年 高佐愛海)

印象的だったところ

(1)一つのテーマについてディスカッションをしたときに台湾からの留学生は流暢な日本語で話していたのがとても印象的でした。(中国語専攻3年 高佐愛海)

(2)最初は中国語と台湾語の違いはそんなに大きくないだろうと思っていましたが、この授業を通して全く違うものだと知りました。発音もぜんぜん違うので初めて聞いたときは衝撃を受けた上に、授業に着いていけるか正直不安でした。しかし先生の丁寧な解説と何回も繰り返し発音してくれますので、台湾語のビデオ教材の中で聴き取れる単語が少しずつ増えてきて、毎回の授業が楽しくなりました。(中国語専攻3年 朝部瑠美)

今後の目標

(1)今後の目標は、授業で扱われるビデオ教材を聞いて全てを理解できるようになることだ。現時点でだいたいの内容は理解できるようになってきていますが、細かな部分が分からなかったり、聴き逃したりするので、聴き取る力を一層つけていきたい。(中国語専攻3年 朝部瑠美)

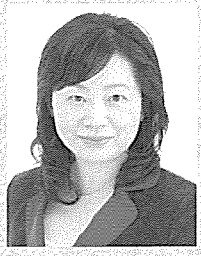
(2)私は前々から台湾に行ってみたいと思っていましたが、この授業を通してより一層台湾に行ってみたいと思いました。また、この授業で知り得た知識を実際に使って、普段とは違う旅行をしてみたいと思いました。

今後は、台湾の文化の日本との違いについてもっともっと学んでいきたい。目標としては台湾語の声調や簡単な単語をマスターしたいと思っています。また、現地に直接訪れて、その土地の文化を肌で感じてみたい。(中国語専攻3年 柳田知春)

〈特集〉特色ある麗澤教育

「ビジネスコミュニケーション上級演習」の概要と学生の様子

言語教育研究科教授・外国語学部教授　近藤　彩



はじめに

経済や人のグローバル化が進む中、世の中ではこれまでにない問題が起き、新たな課題が生まれている。価値観や背景が異なる者と仕事をする機会が増え、これまでの経験知では解決できないことも増えてきた。このような時代では、多種多様な場面における人と人とのコミュニケーションのあり方について自ら考える力がますます重要になる。

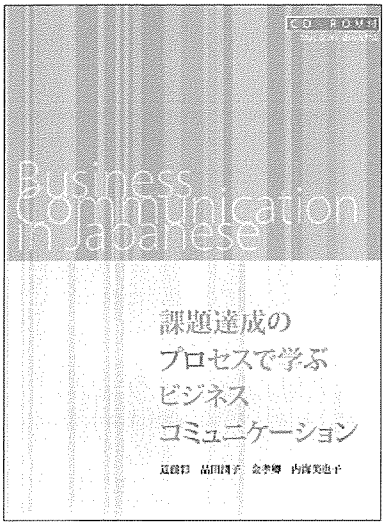
本稿では、企業等において国籍が異なる者同士が共に働く場面を主な題材として、コミュニケーションとは何かについて考える「ビジネスコミュニケーション上級演習」の授業の概要と、履修している学生の様子を紹介する。この授業は、単に就職活動に向けたものではなく、社会人として必要なコミュニケーション力を養成することを目指している。

授業内容と使用テキスト

「ビジネスコミュニケーション上級演習（日本語）」は、日本語・国際コミュニケーション専攻の3・4年生を主な対象とした授業である。人数は40名程度で、クラスには、日本人学生と留学生がほぼ2対1の割合で混在している。筆者が麗澤大学に着任した2014年4月から開講され、半期の演習型の授業

（全15回）である。２０１７年度に履修した留学生の国籍は、中国、韓国、ベトナム、マレーシアであった。

主な使用テキストは、筆者らが共同開発した『課題達成のプロセスで学ぶビジネスコミュニケーション』である。このテキストでは、製造業（化粧品会社）の営業とマーケティングを取り上げ、そこで必要となる言語行動目標（Can-do statements）とタスクを作成した。作成に際しては、ヨーロッパ言語共通参照枠（Common European Framework of Reference for Languages：CEFR）の言語行動目標との照合や、日本人ビジネスパーソンへのヒアリング、経営コンサルタントによるＳＷＯＴ分析の研修受講なども行い、筆者らが作成した言語行動目標との照合を行った。これらの言語行動目標に沿ってタスクを作成、さらに自己評価などを入れたテキストを開発した。

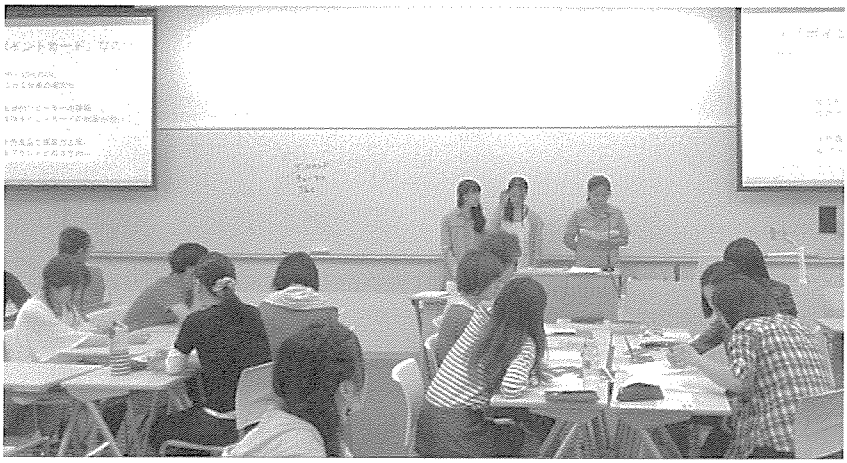


使用テキスト

このテキストはタスクベース型であり、一連のタスクを実行していくことで課題が達成されるよう意図されている。学生にとって馴染みのないビジネス用語は、テキストに何度も登場するため（モジュール型）、全15回終わった時点では使用できるようになる。ほぼ毎回ビジネスに関する単語テスト（日英）が課せられる。

主な到達目標は、①社会人として、特に企業人として必要なコミュニケーションについて理解すること、②課題達成能力、問題解決能力、異文化理解力を身につけること、③多国籍の中でも自分を発信し、相手を受け入れるようになることである。

本テキストは、もともと外国人ビジネスパーソン



（日本語非母語話者／日本語学習者）向けに開発されたものだった。しかし、日本人（日本語母語話者）を対象とした授業や研修でも使いたいという声が大学や企業から多く寄せられ、今では、大阪大学、お茶の水女子大学、早稲田大学、上智大学などの大学や企業でも使用されている。就職活動のためのトレーニングではなく、社会に出てから必要な一般的なビジネスコミュニケーション能力を育成することを目指している点が支持を得ているようである。

目標達成に向かうまでの土台づくり

ビジネス・コミュニケーション能力の育成という目標に向かうためには、実はその前の土台づくり、すなわち自分が社会で働くことについて具体的に考えることが必要となる。年度にもよるが、学生は履修当初、授業のコメントシートに、「自分が何をやりたいのかがわからない」「いくつかインターンシップに行ったが、特にこれといったところはなかった」「それほど強い志望がなく、就職活動へのモチ

ベーションが足りていない」ということを書いてくる。初回の質問シートにも、「英語の資格など、採用の条件は厳しいか」「具体的に就きたい職種が決まらないが、今後どのようにしていくべきか」といった質問が多い。学生の中には「そこそこの生活ができる給料と週2回の休みがとれるところならいい」と待遇のみを重視する者もいるが、これは少人数で、全体としては「志望する業種や職種が定まっていない」「どういうふうに就職活動をすればいいかわからない」「自分では特に調べたことがないが、一応先生に聞いてみたい」という学生が多く見受けられる。

このような漠然とした不安や疑問は、授業でできるだけ共有するようにしている。以前指導した学生から「自分の抱えている不安や疑問を共有してくれることはほとんどない」と聞いたことがあるからだ。

そもそも大学3年生の時点で、自らのキャリアプランをどの程度具体的に考えておくべきかについては、いろいろな意見がある。卒業後、一度企業に就職し日々働くことを経験して初めてやりたいことが見えてくる場合もある。大切なことは、自分に今足りないことを自覚し、それを埋めるために計画を立てて努力することだ。しかし、自分に何が不足しているか、という焦りや危機感には個人差があり、学生によっては、目標設定やその実現のための計画を立てることができない（あるいは、しない）者もいる。そこで、2017年度は、テキストに入る前に、長期目標や短期目標の立て方や、立てた短期目標を自分で可視化し評価することについて触れることにした。このような経験は、就職活動やキャリアについて漠然と悩むという段階から、より身近なもの、乗り越えなければならないものとして捉えることにつながった。

学びの主体を意識させる

講義型の授業では、学生は受け身になりやすい。パウロ・フレイレ（ブラジルの識字教育者）は、知識を貯蓄する知識伝達型教育を「銀行型教育」と呼

んだが、本授業では得た知識を有効に用いることに重点を置き、仲間（他者）と共に学びあう「協働学習」という形式をとった。特に、個人の知識を互いに共有するために、学生同士のコミュニケーション（対話）を通した活動を多く設けた。しかし、単に活動をするだけでは意味がない。学びの主体が学生自身であることが十分に意識できるように、また能動的な参加が最大限できるように、さまざまなしかけを行った。以下にその一部を示す。

(1) テキストに書かれた企業概要を理解するだけでなく、自分で関心のある企業について調べ、グループの仲間に説明、発表する。その発表や質疑応答について報告する。

(2) 自己アピールの準備をするだけでなく、人事担当者になったつもりでコメントをする。その評価観点やcritical thinkingを自身の自己アピールに取り入れていく。

(3) 現状を分析する視点を養う。問題点を改善する視点をもち、新たな提案につなげる。

(4) ＳＷＯＴ分析の方法を理解し、課題達成のプロセスを意識化する。そして振り返る。

(5) 課題を達成するために、グループの意見を集約したり、要点を絞り込んだりする経験をする。

(6) グループの企画を聞き手にわかりやすく発表する。わかりやすかったか、論理的だったかなどを振り返る。

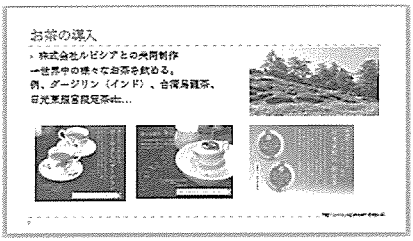
(7) 質問をする、質問に適切に答えることで議論や考えが発展することを体感する。

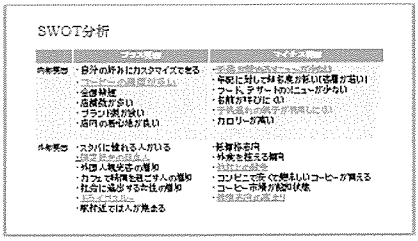
(8) 雑談の役割を考える。人間関係構築やアイスブレーキング、ブレインストーミングに寄与することを実感する。場に応じて、時間に応じて、立場に応じて、雑談ができるようになる。

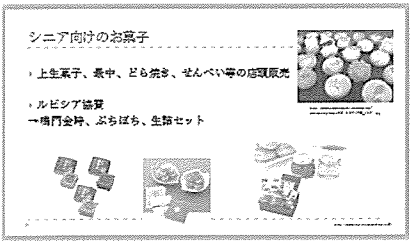
(9) 価値観や考え方、国籍が異なる者同士の中で、上記のことができるようになる。

(10) 企業で働く先輩の話から、自身が働くことへのイメージを作る。自分には何が足りないか、何をいつまでにするべきか計画を立て、実行に移す。

(11) ビジネス用語のクイズは自分のためであることを







意識させる。

(12)誰のために学ぶのか、この授業で何を得ようとするのかを考える。学びを振り返る。

学生の企画提案：SWOT分析とプレゼンテーションより

学期後半は、経営やマーケティングでよく用いられる「SWOT分析」を行う。SはStrength（強み）、WはWeak（弱み）、OはOpportunity（機会）、TはThreat（脅威）の頭文字を表す。SWOT分析では、自らを取り巻く環境をこの4つの要素に分けて網羅的に分析し、戦略を立てていく。

学生はSWOT分析について事前の知識がないため、SWOT分析の考え方を理解するのには時間がかかる。テキストにはトヨタ社についてのタスクがあるが、それ以外にマクドナルド社について全員で少し分析をしてみるなど、足場掛けが必要となる。その際は、「A社の社員だったら、例えばどんなことをしてみたいか」、「（お客として）お店に足を運ばない理由は何か。それが解決されれば行きたいと思

うのか」など、さまざまな問いを投げかけ、学生に考えてもらっている。

分析方法や考え方を理解すると、学生は非常に自由な発想で企画提案をするようになる。楽しそうにいきいきとディスカッションをする姿を見ると、SWOT分析を理解させるまでの労力を忘れてしまう程である。

プレゼン資料は、学生がスターバックス社のSWOT分析をしたものの一部である。プレゼンテーションの際は、社員になったつもりで丁寧体で話すよう指示している。グループごとに発表してもらうが、留学生と日本人学生が協働している様子が観察される。プレゼンの評価は教師と学生双方が行う。

授業の感想

日本人学生と留学生の感想を紹介する。

日本人学生A：SWOT分析は、冷静に、かつ頭をフル回転させて、その企業の強みや弱みを考え出すので、改めて企業がどういうものなのかということを深く認識できると思いました。これから始まる就職活動でもSWOT分析を活用していこうと思いました。留学生と議論した経験は、将来外国人と共に働きたいので、自信になりました。

留学生A：チームワークの大切さを感じました。話し合って意見を出して、その中から良い意見と提案を絞って完成するというプロセスが大変でした。語彙は日本人学生にも難しいと知って、がんばろうと思いました。

ビジターセッション

学期の後半に、現役のビジネスパーソンを招き、生の声を聞く機会を設けている。年によって業種や職種は異なるが、麗澤大学の卒業生に来ていただくようにしている。就職活動や現在の業務、学生時代にしておいたほうがいいことなどについて率直に話してもらえるため、学生たちは大変興味を持つ。また質問の時間を多くとるようにしている。これは、

自ら挙手し質問をする練習を兼ねているからだ。この時期（学期後半）になるとこちらが指導や注意する必要もなく、積極的に質問する学生が増えている。

キャリアセンターや他授業との連携、そして今後に向けて

学生が就活に直面し乗り越えていくには、キャリアセンターの支援や他の授業との連携が今後も必要であることは言うまでもない。実際、本授業が終盤に差し掛かる時期にキャリアセンターの授業が開講され、そこで履歴書の作成やビジネスマナー等について学ぶ機会がある。本授業では履歴書の作成や模擬面接の時間は設けていないため、それらは学生にとって助けとなる。また、学外で企業の人事部の方と話をすると、外国語学部の学生であっても外国語力のみを期待されているわけではないことがよくわかる。就活をゴールとせずに、他の授業と連携をとりながら、今後も学生を支援していきたいと思っている。また、学生に対しては、国籍を問わず、相互理解ができる人材（人財）へとますます成長してほしい。

本授業の取り組みについては「日本語母語話者と非母語話者が学びあうビジネスコミュニケーション教育」――ダイバーシティの中で活躍できる人材の育成に向けて」（近藤2014）に過去の実践が掲載されている。興味のある方はぜひご覧いただきたい。

参考文献

近藤彩（2014）「日本語母語話者と非母語話者が学びあうビジネスコミュニケーション教育」――ダイバーシティの中で活躍できる人材の育成に向けて」『専門日本語教育研究』第16号、専門日本語教育学会
近藤彩・金孝卿・ムグダヤルディ・福永由佳・池田玲子（2013）『ビジネスコミュニケーションのためのケース学習　職場のダイバーシティで学び合う』ココ出版
近藤彩・品田潤子・金孝卿・内海美也子（2012）『課題達成のプロセスで学ぶビジネスコミュニケーション』アプリコット出版

○○○○○

「ビジネスコミュニケーション上級演習」から学んだこと

山本愛美
（日本語・国際コミュニケーション専攻3年）

私がこの授業を履修したのは、「ビジネスコミュニケーション」という授業名の通り、就職活動に向けて、ビジネスについて何かしら学べればいいという漠然とした理由からでした。しかし、この授業は、私が思っていた以上に多くのことが学べ、外国人のために何かできる仕事に就きたいと思っていたこともあり、大変魅力的でした。

グローバル化が進む今の時代では、職場に外国人がいてもおかしくはなく、約半数が留学生という環境でビジネスコミュニケーションについて学ぶことができるため、とても気づきが多いです。実際の会社で行われているような会議内容を聞き、議論をすることや複雑な語彙等を教えあうことも多いため、私たち日本人学生にとってだけではなく、日本で働きたいと考えている留学生にも貴重な場であり、多くのことを学ぶことができる授業です。

それでは、この授業で行うことと学んだことを7つ、簡単に紹介したいと思います。

(1)毎回の授業で10単語ずつビジネスの語彙テストを行います。教科書に沿って、次のレッスンを学ぶ前にテストをするので予習として語彙を学ぶこともできます。日常生活とビジネスにおける語彙は全く異なるので、就活を意識している私にとってとてもためになりました。また、日本人学生は日本語だけでなく英語の表記も勉強するため、グローバルな企業で活躍したいと考えている人も自分の将来を意識してしっかり学ぶことができます。

(2)毎週各自で次の授業までに進めることや、小さな目標を自分で3つ立てます。例えば私の場合は、次のことをすることに決めていました。①気になる業界を3つ調べる。②それらの業界の企業を3つずつ挙げ、企業概要を読む。③SPI（採用のための問

題）を5つ解く。これらの小さな目標を自分自身で立てることによって、就活について考える時間、ビジネスについて考える時間が増えました。また書き出すことによって自分が何をするべきか、どの段階にいるのかを知ることができ、行動に移しやすいことを学びました。

(3)企業概要への理解を深めます。さらに、企業概要から得た情報を元にエントリーシートの書き方や自己ＰＲの仕方を学ぶことができます。私の場合、自己ＰＲは簡単に書けると思っていたのですが、実際やってみると意外に難しく、実際に人に聞いてもらうことや発表する経験がとても大切であることを実感しました。

(4)実際の会議を元にした会話を聞き、自分で説明してみるということをやります。そのため、どこが大切であるのかという重点を置くポイント、会議にふさわしい言い回しや語彙などを学ぶことができました。また、会議内での「そういうこと」「そのあたり」という表現は、外国人には何を指しているか曖昧でわからないということを知ることができ、時には明示的に示すことも大切で、言葉にしなければ伝わらない文化もあるということをビジネスの場面で学ぶことができました。

(5)雑談を行います。雑談と聞き、ビジネスとは関係なく、ただ何となく話せばいいと思っていたのですが、実際にロールプレイとして雑談を行ってみて、ビジネスにおける雑談の難しさを学びました。普段の友人との会話では、特に意識することなく何でも話してしまいますが、ビジネスの相手では、「失礼のないようにしなければ」「どこまでつっこんでいいのだろう」などと考えなければいけないため、あまり話が弾まないと感じました。そこで、誰でも知っているような時事ニュースや様々なことに興味を私自身が持ち、話題を持っていることが大きな強みになることを学びました。

(6)実際に社会に出ている先輩に話を聞きます。企業に勤める先輩から、実際の〝社会〟〝ビジネス〟について学ぶことができるため、とてもためになりま

す。ベンチャー企業で営業職をしている先輩に、「ベンチャー企業はどのような感じなのか」、「営業職はつらいと聞くが本当はどうなのか？」などという企業の方にはなかなか聞きづらいことも直接聞くことができるので、イメージとは全く異なる新しい発見ができました。

(7)ＳＷＯＴ分析を行います。ＳＷＯＴ分析とは、ある会社の「強み」「弱み」「機会」「脅威」を分析することであり、授業ではそれを元に問題を見つけ出し、解決策や戦略を立てました。この際には、日本人と留学生がグループとなり、ディスカッションをするため、日本人の考え方と留学生の考え方・意見が大きく異なることがありました。例えば、ある企業についてＳＷＯＴ分析をしている際に、その企業の脅威として、「外国文化の拒否」が留学生から挙がりました。日本ではその分野において外国文化を拒否することはあまりないと思っていたため、詳しく聞くと、留学生の国では、「その分野に自信があるため、自国以外のものは受け付けない」という強い考え方があることを知りました。

これら７つは、まだ一部にすぎません。この授業では、ビジネスにおいて使われている語彙というビジネスコミュニケーションにおける基本的なことから、仕事における課題を達成する能力やビジネス関連知識など、様々なことを学ぶことができます。常に働くことや就活を意識し、敬語やビジネス用語、ふさわしい言い回し等を使って話し合うため、それらが自然に身につくと思います。留学生とのディスカッションでは、自分にはなかった新たな気づきが多々あるため、私のように就活を意識している３年生やグローバルな企業で働きたいと考えている人にとって、非常に魅力のある授業でした。

〈特集〉特色ある麗澤教育

第2回「グローバル経済経営フィールド演習」(初級)を終えて

経済学部教授　堀内一史

はじめに

グローバル人材育成専攻は、2016年度に本学経済学部経済学科に開設された新しい専攻である。この専攻のセールスポイントは、「全員留学」。世界に通用する経済人を育成するため、「英語で経済学・経営学を学ぶ」ことに特化し、グローバルなビジネス展開に必要な資質を養うため、学生全員が短期語学研修や半年から一年間の留学を経験する。いうまでもなく、徹底した英語教育と英語による専門科目の授業が用意され、語学力＋経済学・経営学の知識＋国際教養＋αの力が身につく専攻である。

今回紹介するのは、2016年度に始まった「グローバル経済経営フィールド演習」というプログラムである。このプログラムの特徴は、英語研修に加え、現地で活躍する日本人ビジネスマンによる企業セミナーの受講や現地日系企業を訪問する課外授業を含む点にある。研修は、冬休みや春休みを使って開催され、海外研修の前後に本学で行われる事前・事後研修を経て、この研修を修了すると、専門科目2単位が認定される。主な現地研修開催国は、米国、オーストラリア、フィリピン、インドである。

本稿では、18名の参加者を得て2017年度にオーストラリアのシドニーで実施した研修について報

告したい。実施日程や内容は、左記の通りである。

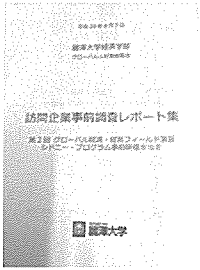
【事前研修】8月7日　9時～12時10分

【現地研修】8月19日出発～9月11日帰国

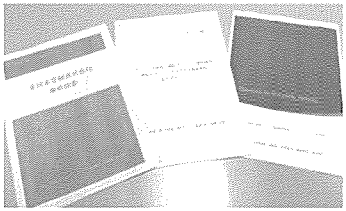
（研修期間：8月21日～9月8日）

習熟度別英語研修（Sydney College of English）

企業に関する調査



事前レポートの完成



日系企業訪問3社（全日空、フジゼロックス、シェラトンホテル）

グローバル企業セミナー（横浜タイヤ、センコー、PWC［プライスウォーターハウスクーパース］）

【事後研修】9月13日　9時～12時10分

【プレゼンテーション】9月18日　11時～12時

ここからは、項目ごとに順を追って説明しよう。

事前研修

事前研修の目的は、参加者に対して、①オーストラリア入国の際に注意すべき点を明確に認識させること、②ホームステイでの生活の心得を十分に認識させること、③現地での訪問企業（組織）についてインターネットを駆使して事前に調査を行わせ、企業訪問による学習効果の向上に資することである。

(1)参加者は名簿で指定されている3つのグループに分かれる。

(2)グループで集まり、リーダーを選出後、その指

示に従って訪問企業（全日空、フジゼロックス、シェラトンホテル）に関する事前調査の役割分担を決める。調査内容は、会社概要、経営理念、ミッション、組織、製品情報、主要業務、その他の特徴である。

(3) 各自役割分担の箇所をインターネットで検索して調べ、各自が日本語で簡単なレポートを書く。その際、疑問点をまとめ実際に現地調査で収集すべき情報に関する質問事項をレポートに書く。

現地研修

① 英語学習

現地研修は、オーストラリア随一の都市シドニーの中心部に位置する語学学校Sydney College of Englishで英語研修とグローバル企業セミナーが行われた。SCEは、1987年に設立され、シドニーで最も早く語学学校としての正式認可を受けた学校で、周りにはシドニー大学、シドニー工科大学、ノートルダム大学が存在する学生街の一角としての立地、講師陣の質、そして何よりも、33の教室と平均クラス人数12名という最適な語学教育環境を誇る語学学校である。このプログラムは、その創立者の1人であり、現地での幅広い人脈を有する新木和広氏の絶大なる協力を得て実現可能となった。また、SCEには日本人の助手が常駐し、日本人留学生の様々な相談に応じる体制が整っている。

英語のクラス分けは筆記試験の後、講師陣が個別に面接を行って決定される。8時30分から午後1時45分まで習熟度別クラスに分かれて英語の授業が行われる。英語運用能力の伸びを促進するために、住環境は、ホームステイを採用している。学生はそれぞれのステイ先から主にバスと電車で登下校する。

② グローバル企業セミナー

セミナーの目的は、グローバル企業に勤務する日本人の先輩が経験した海外勤務の実態や異文化適応上の諸問題を共有し、参加者自らの将来の就職活動

横浜タイヤの相澤氏

センコーの杉原氏

PWCギブソン氏

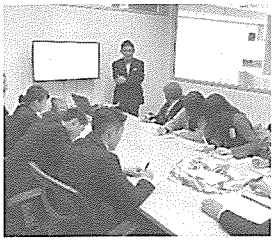
フジゼロックス

の参考に供することである。

ＳＣＥでは、英語の授業の他に、毎週1回、午後2時あるいは3時からおよそ90分のグローバル企業セミナーが行われた。第1回は、8月24日にオーストラリアヨコハマタイヤの相澤幸博社長、第2回は、8月30日に海外での物流大手のセンコーロジックス・オーストラリアの杉原圭典社長による講義が行われた。第3回は、9月6日に、世界4大会計事務所のひとつであるＰＷＣ（プライス・ウォーターハウス・クーパース）を訪問して、日本語の流暢なピーター・ギブソン氏（同社日豪スポーツビジネスプロジェクトのエグゼクティブ・アドバイザー）による会社説明と講義が行われた。

③ 企業訪問

これは、海外で活躍するグローバル企業を自分の目で見てそれぞれの実態に触れる絶好の機会を提供する今回の研修の最も重要な構成要素である。第1回は、8月23日にフジゼロックス・シドニーを訪問。第2回は、2班に分かれ、8月29日と9月1日


全日空会議室での講義

機内へ乗り込む学生

ビジネスクラス

にシドニー空港内の全日空を訪問した。第3回は、9月5日にシェラトンホテルを訪れた。

事後研修と成果の発表

事後研修では、事前研修で把握しきれなかった各企業に関して収集した情報を加え、パワーポイントを作成することが主な目的である。学生は3つのグループに分かれパワーポイントの制作にあたった。

後日、パワーポイントを使った成果発表会を行った。

最後に、数名の学生の感想を紹介しておこう。

●「麗澤大学の学生が18人もいたのでクラスで数人一緒になると思っていましたが、同じクラスになったのは2人だけで他は外国人でした。クラスのレベルもなかなか高く、先生の教え方も今までで一番うまくて感動しました」。

●「オーストラリアでの3週間は長かったようで短かった。自分の英語力は確実に伸びたと感じたし、企業訪問やセミナーでの話は、どれも貴重なものばかりだった。また、これによって将来の目標みたいなものができたのが一番大きかったので、今回このプログラムに参加して間違いではなかったと思った。むしろ参加してよかった」。

●「今回この短期プログラムに行ってみて価値観が変わった。そして、海外への恐怖心が無くなった。英語のスキルはどうか分からないけれど、確実に自分の精神面が成長したと思った。このプログラムに参加して良かったです」。

●「英語が上達するためだけの留学ではなくその他でも成長できたいい経験でした。これらのことを踏まえて、これからの自分の目標をかなえたい。とり

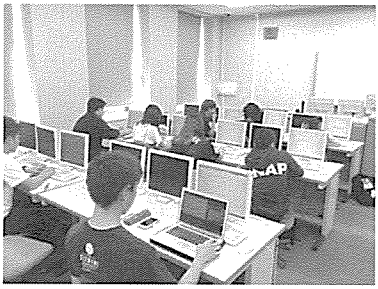
あえずは長期留学を実りある豊かなものにしたいと思います」。

●「今回のプログラムに参加することで、自分の語学力はどれだけ通じるのか、自分に足りないものは何なのかを実感して知ることができた。（中略）今後はこの貴重な経験を活かして日々を過ごし、長期留学に向けて学んでいこうと思う」。

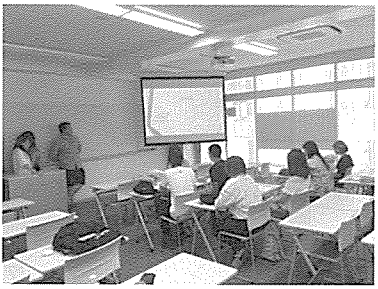
おわりに

帰国後実施した参加学生のプログラム評価でも、7点中ほとんどの項目で、6から7点であったことはこのプログラムへの学生の満足度がいかに高かったかを物語っている。今後ますます充実したプログラムを提供できるよう、評価の低かった項目の改善を図っていきたい。

これが2回目のグローバル経済経営フィールド演習であるが、今回は、先述の新木氏の人的ネットワークの広さから通常訪問が困難な企業にも便宜を図っていただき、見学することができた。この場を借りて新木氏には深く感謝の意を表したい。



事後研修の風景



成果発表の様子

○○○○○

企業訪問を通して学んだこと

笹原 皐
（経済学科1年）

はじめに

私は、8月19日から9月11日までの3週間、オー

ストラリアのシドニーで「グローバル経済経営フィールド演習」の現地プログラムに参加した。その3週間で語学研修、企業訪問、グローバル企業セミナーを受けた。訪問した企業はフジゼロックス、シェラトンホテル、全日空であり、セミナーは、センコー、ヨコハマタイヤ、PWCである。その中でも、全日空、PWC、そしてフジゼロックスへの訪問がとても印象に残っているので、報告したい。

全日本空輸

全日本空輸に関して私たちが学んだことの一つに、オーストラリアから日本へのインバウンド、そしてインバウンドが日本経済にもたらす影響がある。2014年までは日本人の出国者数が多いアウトバンド傾向だったが、2015年からは訪日外国人数が増えインバウンド傾向に逆転した。この事実は日本経済に大きく影響を与えたといえる。定住人口一人分の年間消費額は1年当たり約124万円。しかし、訪日外国人旅行者のおよそ10人分の消費額は一人当たり約15万円である。つまり定住している人一人に対して、訪日外客は10人で同じ消費額である。訪日する外客が増えると消費額も増え経済促進につながる。

ここでオーストラリア人がどれだけ消費するかを示すために分かりやすい例を挙げよう。全市場の滞在日数は5・4泊。一人当たりの旅行支出額はおよそ15万6千円。個人旅行者の割合は75・8%である。しかしオーストラリア人は滞在日数13・0泊。一人当たりの旅行支出額はおよそ24万7千円である。滞在日数の長さ、旅行支出額の高さ、日本文化への理解、地理的・心理的な近さ、個人旅行市場である等、オーストラリアの旅行者はトップクラスの優良トラベラーだといえる。

また、オーストラリアの素晴らしいところは、人口が堅調に増加し、市場が拡大していることだ。それに加えて、先進国で唯一25年間プラス成長している。オーストラリアに住んでいる人は全般的に購買力が高く、富裕層、つまり年収3万6千豪ドル以上

の人口が増加し、２０１２年には全人口に占める富裕率が63％に達したそうだ。

ＰＷＣ

ＰＷＣ（Price Waterhouse Coopers）は非常にいい雰囲気の企業で、日本の企業風土との違いを感じた。ＰＷＣは、世界４大会計事務所の一つである。社員がパソコンや電卓などを使って仕事をしているようなイメージであったが、実際行ってみると、私のイメージとは全く違った。会計事務所だけでなく様々な事業のコンサルティングも行っているからだ。

私たちに対応してくださったギブソン氏からは、ＰＷＣという企業についてではなく、オーストラリアと日本の企業風土の違いについて話を聞くことができた。ここでは、どのように企業風土が違うかを説明したいと思う。

会議室に入ると日本の会社とは全く違う作りになっていた。日本の会社の会議室はホワイトボードが前に一つと四角いテーブルが置かれ、みんなで前に立っている人を見ながら話を聞く、というのが一般的だ。しかし、それとは対照的に、ＰＷＣの会議室は丸いドームのように作られていて、中心に立つと３６０度見渡せるようになっているため、聞き手が話し手に向かって座っている一般の会議とは異なり、話し手も聞き手も振り向くことなく互いを見ることができる。そして１番の特徴は壁全体がホワイトボードになっていることだ。そのため大人数で意見をホワイトボードに書き出したときに、それぞれの背面のボードを見ることで誰がどの意見を言ったかがすぐに把握できるだけでなく、聞き手の表情や態度まではっきり観察することができる。

ギブソン氏によると、日本では、会議での話は経験豊富な上司から経験の浅い若い社員への一方通行的なコミュニケーションが多いが、オーストラリアでは、会議の場では上司だけでなく、若い社員でも遠慮することなく意見や助言を言うことができ、双方向のコミュニケーションが成り立っている。一方、日本では年功序列制度の名残であろうか、たと

え自分の意見や考えが正しくても、上司のいうことを主に尊重しなければならない。たとえ良いアイデアを発言したとしても、認めてもらえないことがあるため、発言者の数が減り、一方通行的なコミュニケーションになってしまうのだろうと思われる。

ＰＷＣは「仕事をする場」という一般的な会社のイメージからはほど遠い。中でも最も感心したのは、スポーツジムにあるようなランニングマシーンを使ったり、楽器を弾いたりすることのできる部屋があることだ。社員は固定された自分のオフィスではなく、その時の気分や体調次第で、自分の好きなところで仕事をしてよいことになっているらしい。ランニングマシーンにはパソコンを置くスペースがあり、走りながら仕事をすることで、普段思いつかないような独創的な発想に辿り着くのだろう。ストレスのない職場。誰もが働きたくなるような理想的な企業だと私は思った。

フジゼロックス

フジゼロックスではさまざまな大型複写機を見せてもらい、説明を受けたが、この会社については、その経営理念に感動した。事前研修で調べているうちに、自分の分担ではなかったが、この経営理念に触れ、特別の思いを持った。それは、企業の目的は利益を得たり、成長することだけではないという理念である。また、この企業は多くのことを大切にしている。お客様の満足、環境、高い倫理観、科学的思考、多様性の尊重や楽しむ心である。この企業が大切にするのは、「社員一人ひとりが幸せ」であり、それが「会社の幸せ」につながり、やがては「世界中の幸せ」へと発展する、という考え方である。

私がこうした経営理念に強く印象づけられたのは、それが、麗澤大学の前身である道徳科学専攻塾の創設者・廣池千九郎の思想、つまり私が麗澤大学で学んでいる「道徳科学」の考え方に非常に似ていると思ったからだ。

最後に、この研修でのさまざまな経験を通して、自分が就きたい職業やそのためには自分に何が必要かということについて少し分かったような気がする。私はオーストラリアで働きたいと思った。それを実現するために、この2月から、シドニーにある麗澤大学の提携校であるオーストラリアン・カソリック大学に留学することになっている。この研修で得た経験や知識を活かして将来の夢に向かって頑張りたいと思う。

〈特集〉特色ある麗澤教育

道徳の授業を創る力と観る力を育むことを目指して

――麗澤大学教職課程「道徳教育の研究Ⅰ・Ⅱ」の挑戦――

学校教育研究科准教授・経済学部准教授　江島顕一

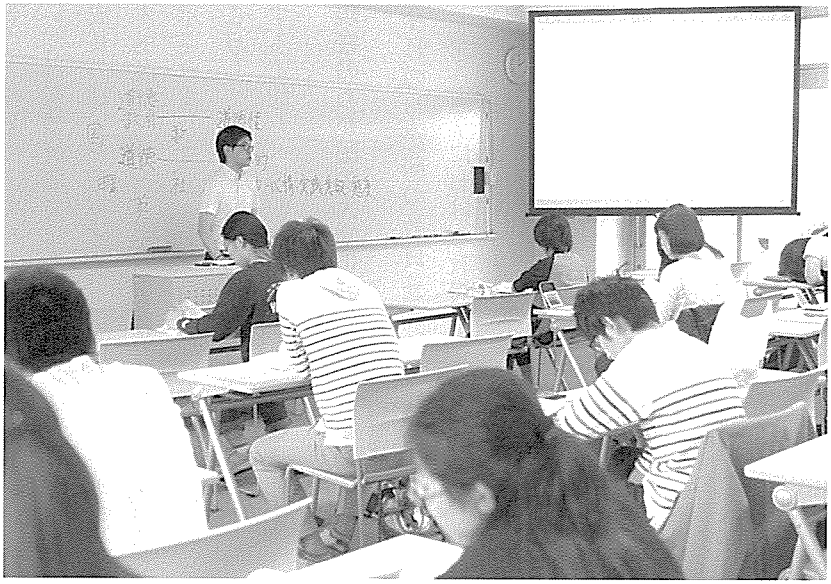
はじめに

「道徳教育の研究Ⅰ・Ⅱ」は教職課程の授業であり、必修の科目です。その内容を端的にいえば、学校での道徳教育や道徳の時間の指導法について学修する科目です。そして、これらの科目の特色を端的にいえば、法的には1科目2単位とされ、それゆえほとんどの大学でも1科目しか開講されていない中、麗澤大学では2科目4単位を必修としています。どうして余分に開講しているのか、そこで何を学修しているのか、「Ⅰ」と「Ⅱ」の関係はどうなっているのか、を本稿で論じてみたいと思います。

現在のわが国の学校における道徳教育

平成27年3月に学校教育法施行規則が改正されるとともに、一部改正学習指導要領（小・中）が出され、「特別の教科　道徳」が成立しました。小学校では平成30年度から、中学校では平成31年度からの全面実施です。

ところで、戦後のわが国の道徳教育は、昭和33年に特設された「道徳の時間」（特設道徳）を中心に行われてきました。それから今日までのおよそ60年に及ぶ歩みの中で一貫・共通してきた特徴を整理すると、道徳教育については、①学校の教育活動全体



を通じて行う、②人間尊重の精神（教育基本法・学校教育法）に基づく、③道徳性の養成、などであるといえます。また、「道徳の時間」については、①学級担任の教師が担当する、②週に1単位時間（年間35単位時間）、③数値による評価はしない、ことなどであるといえます。

一方、こうしたおよそ60年の歩みの中で、特設道徳の課題・問題として指摘されてきたこととして、「小学校学習指導要領解説　特別の教科　道徳編」（文部科学省、平成27年）では、①歴史的な経緯に影響され、忌避しがちな風潮がある、②他教科に比べて軽んじられる、③読み物の登場人物の心情理解のみに偏った形式的な指導が行われてきた、ことなどが挙げられています。

これらの課題・問題に対して、「特別の教科　道徳」は、①教科書については検定教科書を導入し、②内容についてはいじめの問題への対応の充実や発達の段階をより一層踏まえた体系的なものに改善し、③方法については問題解決的な学習や体験的な

学習などを取り入れて指導方法を工夫し、④評価については数値評価ではなく、児童生徒の道徳性に係る成長の様子を把握する、ことなどが「道徳教育の抜本的改善・充実」（文部科学省、平成27年）において示されました。

こうしてこの「特別の教科　道徳」は「考え、議論する道徳」への転換を図ると謳われています。

現在のわが国の大学における教員養成

今日のわが国の教員養成は、「開放性の教員養成」や「大学における教員養成」を原則としています。すなわち、教職課程を有している（課程認定を受けている）大学であれば、どの大学でも教員免許状を取得可能であるということです。これは戦前の師範学校による目的性の教員養成の反省に立ったものといえます。そして、昭和24年に公布された「教育職員免許法」に基づいて、戦後のわが国の教員養成は行われてきました。

ところで、現在の教員養成の具体的な在り方については「教育職員免許法」に基づいて、「教育職員免許法施行規則」に定められています。そして道徳教育に関連しては、その第6条「教育課程及び指導法に関する科目」にて、「道徳の指導法」「備考五」として、小学校および中学校の教員になろうとする者は、「道徳の指導法」に関する科目を「2単位以上」習得することと規定されています（高等学校のみの免許状の取得を希望する者は習得する必要はありません。高等学校には「道徳の時間」がないからです）

こうした道徳教育に関わる教員養成の現状に対しては、例えば、東京学芸大学の「大学・短大における教職科目（道徳の指導法）に関する調査　結果報告書」（東京学芸大学「総合的道徳教育プログラム」推進本部第一プロジェクト、平成22年）によると、この2単位15回という授業回数では決して十分な学修ができているとは言えないことが指摘されています。つまり、授業時間数の制約から、道徳教育に関する多様なテーマを取り上げざるを得ず、演習や模擬授業の実施時間の確保が困難であることが明らか

になっているのです。

先述したように、小中学校において道徳は週に1回の授業があります。言い方を替えると、年間35回の道徳の授業をするための教員養成段階での学修は、2単位15回しかないというのが今の実態なのです。

「道徳教育の研究Ⅱ」の開講

本学の教職課程では、道徳教育に関する理論と実践の両立した学修を目的に、従前から開講してきた「道徳教育の研究」に加えて、「道徳教育の研究Ⅱ」を新たに開講しています。

開講の背景については、①本学の教職課程は課程認定以来、建学の精神「知徳一体」に基づいた教員の養成を目的としてきた、②本学が所在する千葉県や隣県の茨城県の県立高等学校においては道徳が必修化されている、③現今の教育政策の中で小学校、中学校の道徳が教科化される改革動向にある、というように、先述した昨今の道徳教育や教員養成をめぐる現状と、本学の教員養成の目的を改めて踏まえ、平成25年に本学の全学的組織である教職課程委員会（現教職センター）にて審議検討し、平成26年度に新規に「道徳教育の研究Ⅱ」（2単位）を開講し、平成28年度入学者よりこれを必修としました（これに伴い「道徳教育の研究」は「道徳教育の研究Ⅰ」（2単位）と改称されました）。

開講の思いを率直に表すと、麗澤大学の教職課程の卒業生には、教科教育はもとより、道徳教育についてもしっかり指導できる教員になってほしい、というものでした。

「道徳教育の研究Ⅰ・Ⅱ」の概要

授業の概要については、「道徳教育の研究Ⅰ」では授業題目を「道徳教育の研究」とし、到達目標を「道徳教育を本質的、歴史的、理論的、実践的に理解し、その意義や役割を認識できるよう、・日本の道徳教育の歴史や世界の道徳教育の動向を把握し、・道徳教育の多様な在り様と道徳授業の理論を

学修し、・現在のそして将来に生起し得る道徳教育の課題を探究することができる基礎的な諸力を養い、培う」としました。

一方で、「道徳教育の研究Ⅱ」では授業題目を「道徳の授業研究」とし、到達目標を「「道徳科」において十分なパフォーマンスが発揮できるよう、・学校や生徒の実態に応じた適切な全体計画や年間指導計画が考案でき、・多様な資料の渉猟と教材開発による創意工夫ある指導案が作成でき、・導入、展開、終末の指導過程を踏まえた道徳の授業が継続して遂行できる基本的な諸力を養い、培う」としました。

このように「Ⅰ」と「Ⅱ」のすみ分けと接続を明確にして、「Ⅰ」では道徳教育の理論的な側面（学校における道徳教育の意義、道徳教育の歴史、道徳の学習指導要領の内容、道徳の授業方法、道徳性の理解、道徳教育の現代的課題など）に重きを置き、「Ⅱ」では「Ⅰ」での理解を踏まえて、後述するように道徳授業の実践的な側面に重きを置いたことが大きな特色です。

「道徳教育の研究Ⅱ」の模擬授業

「Ⅱ」においては、講義の他に、教材分析や指導案の検討といった演習と、それに基づいた模擬授業を履修者各自に課しています。履修者数にもよりますが、模擬授業では学生1人につき丸々50分間を与えて、その他の履修者が生徒役となって講評する形で運用しています。平成29年度は、指導案を各自作成すると担当教員から事前指導を受けて模擬授業を行い、また模擬授業後には講評を受けて加筆修正した指導案を再提出してもらいました。再提出された指導案は教職センターにストックし、履修者には誰でも閲覧可能としています。

模擬授業についての所感を一言でいえば、学生たちが毎回の授業で確実な成長を遂げていくことに驚きを禁じ得ない、ということです。こちらが意図したこと、求め望んだことをいつもそれ以上のパフォーマンスで応えてくれました。それでは模擬授業を

通じて学生たちはどんな力をつけていったのか、授業者と講評者の視点からそれぞれ述べてみます。

「授業を創る力」

まず、授業者の視点からですが、学生は順番で模擬授業が回ってきます。その意味では初めの方の学生は手探りで授業を行わなければならず、とにかく緊張します。しかし、声量や板書の文字の大きさ、机間巡視などは適切でした。一方で、後のほうの学生は、自分より前の学生が行った模擬授業の改善点を乗り越えて、さらにオリジナリティを出さなければなりません。板書でのチョークの色使いや、ワークシートへのイラストの挿入など随所に工夫を凝らしてきます。また同じ教材を使用した学生とは異なる観点で発問を構成するなどの対応もできていました。共通しているのは、自分が扱う教材や資料をきちんと読み込んでおり、ねらいを明確にした指導過程が練られていることでした。

「授業を観る力」

次に講評者の視点からですが、模擬授業をしていない学生は生徒役になっています。そして授業が終わった後には、よかった点と改善点を忌憚なく授業者に講評します。板書の文字が見辛いといったことから、次の指導の指示が不明確であるや終末段階の時間配分が不足していた、といった細かな点から大きなところまで洗いざらい指摘します。模擬授業者1人と生徒役の講評者多数という授業の形式は、ともすると自分の模擬授業が終わってしまえば、他の学生の模擬授業は適当にやり過ごして聞き流すというような事態になりかねないのですが、全くの杞憂でした。むしろ、講評者としての意見は回を重ねるごとに鋭く、深くなっていきました。それは例えば、「その発問内容では果たして授業のねらいである道徳的価値を理解させる中心発問になり得るのか」というような、まるで既に道徳教育に熱心に取り組んできた現職の教員であるかのような意見に象徴されます。

こうした模擬授業者と講評者による相互的な学修を通じて、「授業を創る力」と「授業を観る力」を

養うことに繋がったと考えています。そして実はこの二つの力こそが、道徳に限らず、様々な教科においても、授業の上達に不可欠な要素だと思っています。もっとも、こうした授業者の視点での工夫や講評者の視点での意見は、単にこの「道徳教育の研究Ⅱ」の模擬授業のみで培われたものではなく、「道徳教育の研究Ⅰ」における理論的な知見や学習指導要領の理解に基づいて表れたものであると考えています。

むすびに

昨今の教員養成をめぐる改革では、今後の教員に求められる資質能力が、「学び続ける教員像」や「アクティブ・ラーナーとしての教師」などのキーワードによって語られています。こうした現代的な課題や時代的な要請に応えていくことが、これから教職に就く学生には一層求められます。

一方で、麗澤大学の教員養成は、課程認定を受けてから今日まで一貫して「「知徳一体」の建学の精神に基づき、仁愛の精神の上に、教育についての見識と各専門教科の知識・技術をもって、わが国の学校教育に貢献できる人材を育成する」ことを理念としてきました。麗澤大学を卒業して教職に就く学生には、是非「道徳的であろうとする教師」を目指して、教育に取り組んでいってもらいたいと願っています。

○○○○○

道徳「も」指導できる教師を目指して

小林愛里
（英語・英米文化専攻4年）

麗澤大学の道徳教育

平成30年度から小学校、平成31年度から中学校で道徳が教科化する。麗澤大学は〝知徳一体〟を建学の理念としている。道徳や道徳教育への関心が高く、道徳教育が非常に手厚い。1年次では、大学生

としての道徳について考え、議論して学ぶ「道徳科学A・B」の授業がある。さらに、教職課程を取っている学生には、学校における道徳教育の基本について広く学ぶ「道徳教育の研究Ⅰ」に加えて、さらに道徳の指導法について深く学ぶ「道徳教育の研究Ⅱ」を履修する。これらの科目を通じて、学生として、そして教師としての視点から、道徳教育の多様な在り方や授業づくりの様々な方法などを学習することができるのである。

「道徳教育の研究Ⅰ・Ⅱ」で学んだこと

「道徳教育の研究Ⅰ」では、道徳教育の歴史や理論、また世界の道徳教育の現状や日本の道徳教育の現代的課題などについて考察する。道徳教育は時代によって変化するところもあると考える。例えば、LINEでの心ない言葉やいじめなどの情報化による事件、グローバル化による異文化理解や価値観の衝突など、時代の変化によって道徳教育も変えていく必要がある。この授業では、現代で生じている様々な道徳的な問題を熟考する。

「道徳教育の研究Ⅱ」では、「Ⅰ」で学んだことを生かしながら、実際に学生が道徳の授業をつくり、模擬授業をする機会がある。「1年間を通してどのような学級になってほしいか」、「どのような学校になってほしいか」、「どのような道徳心を持った生徒に育ってほしいか」など、学校や学級の特色、生徒の実態に合わせた授業を想定し、指導案をしっかりと仕上げ、初めての道徳の授業に挑む。身近な問題や課題を取り上げたり、実際に起こり得る場面について考えさせたり、映像や音源、新聞記事などを使用したりしながら、生徒の興味・関心をつかみ、創意工夫ある授業を展開する。さらに、読みもの資料を通し、登場人物の心情を考えたり、自分が主人公の立場であったらどうするかを考える機会も多い。様々な意見が出るため、自分の意見と比べたり、客観的に物事を捉えたりすることもできる。模擬授業は、各々の学生の個性やカラーが出ている。

私の道徳の模擬授業

私は、「言葉の向こうに」という読み物教材を使用し、模擬授業を行った。読み物教材の内容は、主人公の女の子がインターネット上でサッカーファンとの交流の中で、主人公がファンである選手に対する心ない書き込みに対し、主人公もひどい言葉で返してしまい、それを見ていたファン仲間に咎められ、自らの言動を反省するという話である。主人公の女の子は、ネット上の書き込みには様々な意見があることを知り、人との関わりにおいては互いを認め合う姿勢や相手の立場を考えて発言することの大切さを知るのである。

模擬授業では、まず、ネット上の心ない言葉や書き込みの事例を実際に生徒に見せ、言った方と言われた方の気持ちを考えさせた。その後、読み物教材を通し、主人公、ネット上で選手に対してひどい書き込みをした人、それをネット上で見ていただけの傍観者のそれぞれの登場人物の心情を考えさせ、そのあとに生徒たちにそれぞれの役になってもらうロールプレイを取り入れた。「顔が見えなくてもひどいことを言ってはいけない」、「見えないからいいんだよ、会うこともないし」とグループによって全く異なる展開が繰り広げられ、非常に興味深いものとなった。また、模擬授業を行った私自身、もっと視野を広げた考えや柔軟な考えを持つべきである、と課題も見つかった。

模擬授業を通じて発見したこと

「特別の教科　道徳」のキャッチフレーズである「考え、議論する道徳」を授業で行っていくためには、ディスカッション、ディベート、ロールプレイや自分の意見がたくさん書けるワークシートを使用するなど、言語活動を中心とする授業が求められると考える。

「道徳教育の研究Ⅰ・Ⅱ」の授業自体が、自分の意見発表や学生同士での話し合いの機会があったり、授業終わりに毎回リアクションペーパーを記入した

りするなど言語活動が充実していた。担当の江島先生からの模擬授業者に対するフィードバックには、模擬授業者自身も、そして他の学生も気づかなかった良い点や改善点が数多くあった。自分の模擬授業の良いところには磨きをかけ、修正すべきところは改善をして指導案を書き直すことで、次の授業の改善につながることを教えていただいた。また、自分以外の学生の模擬授業の良いところや工夫されているところを吸収して、自分のものにしたり、自分なりに変化させたりして活用する視点や方法も指導していただいた。さらに、常日頃から現代社会の教育問題や道徳教育に関することなどをマークし、アンテナを張り巡らせ、授業のネタを収集する習慣の大切さも教わった。

つまり、「道徳教育の研究Ⅰ・Ⅱ」の授業での言語活動そのものに、実際の道徳の授業での言語活動の充実に何が大切なのか、どこに気をつけなければならないのか、たくさんのヒントとアドバイスがあった。これもまたこの授業を通じて気づき、学んだことである。

道徳教育「も」指導できる教師

私は、この「道徳教育の研究Ⅰ・Ⅱ」の中で、道徳教育推進教師という存在と役割を学んだ。学校全体で道徳教育についての協力的な体制をつくるためには、道徳教育推進教師という中心人物が必要になってくる。私は4月から英語の教師として中学校の教壇に立つ。英語教育はもちろん、道徳教育にも力を入れ、思いやりのある学級をつくりたいと考えている。そして将来は、道徳教育推進教師として道徳教育を引っ張っていき、思いやりのある学校をつくっていきたいと思っている。麗澤大学で学んだ道徳教育を、今度は教育現場で存分に生かしていきたい。

（編集者註：本稿をご執筆いただいた小林愛里さんは、在学中に埼玉県の教員採用試験に合格し、4月より中学校の英語の教師として教壇に立たれています）

継続活動する麗澤グローバル団体―「麗澤模擬国連」

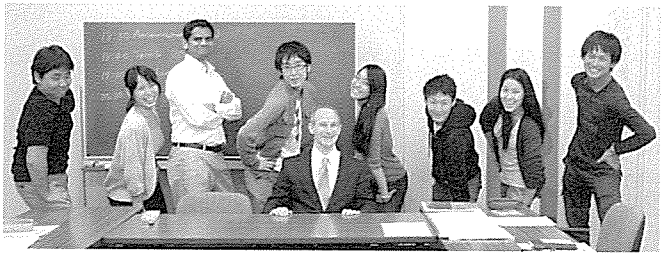
「全米模擬国連大会」の経験と後悔から学ぶ

損害保険ジャパン日本興亜株式会社
第1期代表　鳥畑　剛
（第72期　経済学科―MCコース卒）

模擬国連に出会ったのは在学2年次の夏、パシフィック大学へ留学したときであった。模擬国連は、世界中の大学生が一堂に会し、一国の大使に成りきって世界の情勢や問題を議論する場である。当時、ろくに英語を話せなかった私は「せっかくアメリカに来ているのだから無謀でも何かに挑戦したい」という思いだけで模擬国連の授業を受講した。実際にワシントンD.C.で行われた模擬国連に参加したものの、不甲斐ない結果で会議は幕を閉じた。「経験」という意味では一生ものの大きな財産を得たのだが、個人としても組織の一員としても会議に対しての達成感を味わうことなく、「後悔」だけが残ってしまった。その「後悔」とは、単純な力不足という意味合いが大半を占めるのだが、なぜこの授業をとってしまったのだろうかと自分を疑う意味もあった。今となっては笑い話であるが、私が帰国した後、同授業への参加は語学・知識レベルの参加基準が設けられたのである。罪悪感すら覚えた、そんな想いを思い出した。

しかし帰国後、再度同じ会議に出たいと思い始めた。何が私を動かしたのかといえば、それは〝悔しさ〟であった。もう一度あの場所に戻り、留学時代苦労したことや強く感じた「後悔」を活かしたいという想いからである。しかし、実際に日本からの出

場となると容易なことではない。やるべきことをざっと挙げみると、①組織を立ち上げから、②予算の確保、そして③膨大な資料から代表国の立場、主張を見出していく……といった具合だが、最初の試練はメンバーを集めることにあった。幸い、学内で多岐にわたり活躍し、留学も経験されたＩＭＣコース（経済・経営を「英語」で学ぶ特別コース）の先輩を知っていたこともあって声を掛けさせていただいた。その先輩との繋がりで学部を超えた出会いがあり、今ではかけがえのない第一期メンバーとなった。実際、最初に声を掛けた先輩には加入を断られていたが、その後50回以上であろうか、粘り強く誘いの声を掛け続けた結果、加入していただいた。まずはこの出会いに感謝したい。



顧問のコミサロフ教授を囲んで

実際にワシントンＤ．Ｃ．で行われる会議までは準備期間として6か月ほどあった。一国の大使としての準備は言うまでもなく、まさに苦労の連続で、アメリカで感じていた心が折れるほどのものであった。しかし、何よりも大変だったことは学内でこの組織の存在を確かなものにすることと、一組織として強いものにすることであった。もちろん学内では初めて、かつ日本の大学として初めてチームを編成して出場するため、大学側にどう熱意を訴えればいいのか分からず、日々悩んでいた。また、私だけが一人熱くなっていても仕方がない。大学に認めていただくには強固な組織づくりが必要であった。あいにく私にはリーダーシップは備わっていない。誰が見ても弱そうな草食系の一大学生であった。せっかくの貴重な機会なので、ここからは模擬国連の活動の話ではなく、組織運営という視点で述べていきたい。

第１期メンバー

リーダーシップとはどういうものなのか。今働いている会社の採用試験で「リーダーシップとは何か？」という問いがあったのだが、人事部の方からいただいた当時の小論文には「組織の中の状況を即座に察知して全体を支えていくこと、またその熱意で、人・組織を動かしていくことである」と記載があった。この考えは今でも変わらないが、アメリカ留学で得た「経験」と「後悔」が生んだものである。

当時、組織運営として気をつけていたことはシンプルである。一つは組織の共通認識、情報共有である。ここでの情報とは組織の一人ひとりが同じ方向を捉えているかということである。口酸っぱくメンバーに伝えたのはこれを徹底することであった。メンバーの個性が強すぎることで言い争いも絶えずあったが、これも今では懐かしい思い出の一つである。信頼できるメンバーであったからこそ自由に活動し、組織としては共通認識を徹底して守る。これを貫いてきた。凡事徹底ということに尽きるが、組織を強固なものにする私なりの考え方であった。

もう一つは熱意である。人は何かを成し遂げようとするときには必ず熱を帯びるが、長い期間継続してモチベーションを保ち続けることは、誰しもが困難である。私はリーダーとしてメンバー全員のモチベーションを保つのにかなり気を遣った。個々の能力があってもモチベーションが低下すると組織として機能しないのである。私は何かあるごとに問題点を共有し一緒に解決策を見出していった。時には私生活に絡む問題にも及び、夜遅くなりながらもとことん納得するまで話し合いを続けた。「一緒に問題に向き合う」姿勢を大事にして、そこにエネルギーを注いだのである。私の考えるリーダーシップとは、このような熱意のことである。人にはそれぞれ本気の見せ方があり、模擬国連の活動、特に第一期としては、一人の熱意が組織に、組織から外部にと繋げていくことが必要であった。これこそが私にできる唯一のリーダーシップであった。

今では社会人5年目となり、仕事の責任も年々増えている。これまでに会社を辞めたくなったことは多々あったが、それらの困難に向き合うことができたのは、留学での経験を含め模擬国連で得た成果であったと思っている。これでもかと心の折れる「経験」と「後悔」を得たからである。それは今でも私を支える財産であり、一生ものの価値がつく自信でもある。後輩の皆さんには大学生のときにしかできない「経験」を積んで、自分のものにしていってほしい。自信ほど自らを強くするものはない。困難から避けて生きていくことは簡単だが、成長するためには困難自体をプラス要素として捉え、乗り越えなければならない。それには何に対しても臆せず挑戦することが必要不可欠である。

最後になるが、第一期のメンバー、そして模擬国連の第一期から今に至るまで活動を支えてくださったすべての教職員の方々に感謝したい。また、この活動で出会えた野木清司さんには、企画広報室当時から大変お世話になり、感謝しきれない思いである。麗澤模擬国連団体はこれからも麗澤大学を代表する一団体として輝き続けることを切に願っている。

継続活動する麗澤グローバル団体―「麗澤模擬国連」

本気の楽しさを知る

――麗澤模擬国連団体に、リーダーとして参加して――

第7期代表　スルヤ・ウィジャヤ
（経営学科　4年）

私は「楽しかった」「頑張ってよかった」という言葉が、人生の柱になると信じています。今の大学生活を終えた10年、20年、50年後でも言いたい。私の豊かで楽しい4年間の大学生活がその根拠です。

私は1年次の時から部活動や団体や委員会にも所属し、多くのことを経験したかったのですが、一度に担えるものは限られていましたので決断しなければなりませんでした。「決断」という言葉は「決める」ために、何かを「断ち切る」ことです。やらなかった後悔は避けることはできませんが「これに決めてよかった」ということは自分に言えます。そのために楽しみながら全力で立ち向かうことの意味を、麗澤での4年間で学びました。

私がなぜ「楽しい」ということに重きを置いているか。例えば、何かをやるにしても、見るにしても、その好きなことについてもっと知りたい、もっと上手になりたい、欠点があればそれを直し、本気で楽しくやる。その結果、多くのものを得ることができたからです。

このことは私が3年次に参加した麗澤模擬国連団体の活動で大きく感じたことでした。この活動は4月にスタートし、毎週、プレゼンテーションがあり、本大会のためのリサーチをしました。本当に大変で、リサーチを始めるのも気が重くなるほどでし

た。しかし、嫌でもやらなければならないことだったのですが、やるからには楽しくやろうと思いました。その日に吸収した情報をどのように処理しメンバーたちに伝えていけばいいかを一所懸命考えていると、いつの間にか、次のミーティングが楽しみになっていきました。

第７期メンバー

肝心なプレゼンが上手にできた時は、またやりたいという気持ちになれますが、上手にできなかった場合でも、次はどうすればいいかを考えるようになりました。大会メンバーとして選ばれ、ただただ楽しんだだけのはずだったのに、２年連続で賞をもらうことができました。今回、受賞できたのは模擬国連という活動を楽しんだことの結果に過ぎないということにも気づきました。

今年はリーダーを務めながらも、反省すべき点があります。それはメンバーのモチベーションが下がっていくのを見て、声をかけ動機づけをしようと考えても多くのメンバーはそれに反応しなかったことです。その中でリーダーとしてやってはいけないことは、メンバーに対する意識を下げること、見放すことです。頭の中では分かっていても実際に直面すると普段通りに実行できるかは別問題です。

アインシュタインの言葉を借りると“In theory, theory and practice are the same. In practice, they are not”（論理上、〝論理〟と〝実践〟は同じだ。だ

が、実践では違う）。今になってようやく、その言葉の本当の意味が理解できました。論理的には、できて当たり前だけれど、現実では常識に従う人は少ないのです。例えば、ミーティングに行けても、行けなくても、遅れて行くにしても、必ず連絡をするべきということも常識で、できて当たり前です。しかし、そんな簡単なことですらできない人もいます。常識のすべてに従うのは大変でしょう。しかし、ここで学んできたことは、それを一つずつでもいいので、意識的になれば、行動も変わっていき、やがては意識しなくてもできるようになり、それが習慣となっていくのです。

このように私は大学生活の中では語学や経済学だけでなく、そういった目に見えない、計れないものを学びましたが、半面、失敗も多く経験しました。しかし、その失敗を、私はあえて「学習」と呼びたいです。なぜなら、この失敗に気づき、今後、機会があれば活かせるからです。将来、必ず何らかの形で役立つと思うからです。

壮大なきっかけでなくても、私みたいに小さなきっかけでも、大事なのはそこから何を学び得たかということを実感することです。経験は全てを語ってくれると私は信じています。「自分のSafe Zone（安全地帯）」よりも何歩か先んじて、後輩の皆さんには、とことん挑戦してほしいです。しかし、その中でも楽しむことを忘れずに挑んでください。私の中での大学というのは試行錯誤ができる場所であり、失敗する場所であり、そこから自分自身を見つける場所だと思います。

やりたいことはすべて挑戦し、「本気で楽しむ」ことです。そして、何十年が経った後でも、「よかった」と自信を持って言えるような学生生活を送ってほしい。私はもう既に、卒業した何十年後でも「私の大学生生活は楽しかった、よかったよ」と胸を張って言える自分を鮮明に頭の中に浮べることができます。

「きっかけなんてどうだっていいのさ、大事なのは本気の楽しさを知ること……」

継続活動する麗澤グローバル団体―「麗澤模擬国連」

熱き挑戦者を追い続けた126日

麗澤大学出版会　野木清司

「2011年7月29日、13時30分」。それは私のとって忘れられない日となり、自身の子より若い彼らとの運命の出会いの日でもあった。

長年、広告および出版業界の制作に携わってきた経験を活かし、縁あって、その年の4月から本学の企画広報室（当時）に籍を置き、大学のブランディング広報をはじめ学生の活動を広報支援していた。そんな矢先、第1期麗澤模擬国連の鳥畑剛氏（当時3年）をリーダーとして学部を超えて結成した8名のメンバーを紹介され、この日から「全米模擬国連大会」に挑む彼らの活動を広報室の担当者として追いはじめた。

放課後や夏休みの期間を利用し、代表国大使となったキューバを徹底的にリサーチやミーティングが連日のように続いていることを知った。時にはキューバ大使館や国連大学へ足を運び、分厚い年次決議案に目を通し、過去から現在に至るまでのキューバの主張を分析するなど、限られた時間と情報の中で、調査は困難を極めたと聞く。参加大学は一つの国の大使とし国際情勢や経済事情の問題点を持って、会議で他国と交渉し解決策を見出していく。会議では国際社会で活躍するための知識や柔軟性、論理的に考える力が要求される。

また彼らは世界の学生と模擬国連という舞台で国

顧問のコミサロフ教授より
国際情勢を学ぶ

際情勢をめぐって渡り合うという、途轍もないエネルギーのいる活動であることも分かった。

私にできることは、これらの活動を担当していたHPや「麗澤大学ニュース」で採り上げ、学内はもとより家族や一般に広く広報することを強く感じ、時にはミーティングの最中にカメラ持参で押し掛け取材した。日を追うごとに、彼らが会議に真摯に向き合っている姿が頼もしく、より強く感じたことをホットなニュースとしてHPに載せた。

10月には、ホームカミングデイのイベントの一つとして多くの教職員、OB・OGを前に「模擬国連大会プレゼンテーション」が行われ、挑戦する彼らは一層決意を新たにしたであろう。

ワシントンD.C.で開催される模擬国連大会に向かう前日、メンバーは広報室に大会に挑む抱負を兼ねて挨拶に訪れてくれた。そして翌日には成田空港の出発ロビーでの画像がデスクのメールに届くや否や記事を作成しHPで公開した。

大会は全米をはじめヨーロッパ、アフリカなど80

近い大学が参加する中、麗澤チームは賞こそ逃がしたが、3日間の大会が終わり無事帰国した彼らの顔を見たときは、ホッとした気持と同時に自然と目頭が熱くなってきた。

中山理学長は、「結果はともあれ、挑戦したことが重要。この活動を持続し、皆さんが学んだことを後輩に伝え、本学が継続して出場できる常連校になってほしい」と、8名を称えた。そのことは、第6・7期と連続して彼らの決議案が投票で採択され、優秀な政策提案書に与えられる「Outstanding Position Paper賞」を受賞したことで、麗澤の「挑戦魂」が後輩たちに脈々を受け継がれていることの証である。

また、チームの顧問でありメンバーを指導してきた、コミサロフ・アダム　M教授は、「彼らは英語力アップに併せ、異文化コミュニケーション能力が向上した。また、プレゼンテーションの練習を重ねるごとに相手の意見を尊重し、自分の意見を明確に相手に伝え納得させる力を向上させるなど、高い意識を持った学生たちを誇りに思う」と評した。

帰国後も学内で積極的に報告会や外国語学部の授業では、「模擬国連大会」を通して「世界に挑戦する」ことの意義を後輩たちに熱く語っていた。そして後日、麗澤大学後援会より麗澤大学MUNチームの功績を称え、「後援会奨励賞」が授与された。

7月29日から彼らの活動を追い続けた2011年の126日間。学内での活動取材を全て無事にお終えた日は安堵感と同時に、花火が終わった時の物寂しさが交差する感慨深い日でもあった。

この第1期の広報をきっかけに、第2～7期の麗澤模擬国連団体をはじめ、ASPIRE Reitakuやネパール減災教育団体。そして自主企画ゼミのJapanesiaなど、多くの学生の活動を広報支援することで、学生の成長を身近に感じることができる、実に楽しい時間でもあった。また、彼らは社会人となっても、これらの経験を実務に活かしていることであろう。

当時、帰国後に鳥畑氏が「この大会を通して多文化共存と異文化理解の重要性を理解することができ

た。多くの文化や異文化の理解なくしては、他国と協調することもできないと痛感した」と語っていた言葉を思い出す。このことは国内外問わず同じで、住み慣れた場所を離れ、文化や環境などの違いで戸惑うことも多々あることだが、〝知識〟は〝経験〟あるのみで、大会での経験を知識として彼らは多方面で活躍していることを見聞きしている。

島畑氏、石浜氏、山田氏、内藤氏と（学位記授与式2013.3.14）

1期メンバーとの出会いから7年近くが経過した今、社会人となった彼らとの交流が続いている。それは、「麗澤大学は教職員と学生の距離が近い」ことを、自身が強く感じることができる時間（とき）でもある。そして、そのきっかけをつくってくれた第1期メンバーに感謝したい。

最後に、鳥畑氏が前年の2010年12月から仲間の説得から始まり、チームが信頼と絆を深めた30日間。それはメンバーにとって「人と人との強い結びつき」を改めて考えさせられた時間であり、大きな財産となった日々でもあった。ここに、彼ら8名が「全米模擬国連大会」に挑戦して学び得た当時の声を記す。

☆☆☆☆☆☆☆☆

鳥畑剛氏▼この10か月間、ゴールの喜びを味わうために皆必死にやってきた。チームの発足を機に、学部、学年を越え新しい仲間と出会え、この時を分かち合えたことは、この上なく嬉しく感じた。今後は、ここで得た課題に向かい、次に活かすことが重要である。

武内瑛紀氏▼今回の経験から、積極的に行動し、発言していく力の必要性を痛感した。自ら行動し、リ

ーダーシップを取っていく。その力が世界を変え、新たなアイディアや確信を創造していく一歩にもなる。この積極性の育みこそ、私たちの世代で重要なことである。

鈴木真之氏▼コミュニケーションをはじめ、視野の狭さなど様々な壁にぶつかった。目指す夢がいかに達成困難なものかも痛感したが、それでも、手を伸ばせば届く距離にあることも学んだ。私はこれからも夢に向かって挑戦し続けたい。

内藤恵美子氏▼在学中、何かを成し遂げたいと考えていても、具体的な行動に移せない学生は多く、私自身もその一人であった。そんな中、この活動を通して、100%の実現性がない中での挑戦でも、諦めないこと、アクションを起こせる可能性を信じることの重要性を学んだ。

ナーラカ・クララッタナ氏▼本学を代表するだけでなく、20%を占める留学生の代表として誇りに思った。3月にこの活動に加わり、メンバーの持つ高い意識と卓越した英語能力に驚きを隠せなかった。この経験は私たちの将来を、いくつもの可能性に導いてくれるであろう。

山田亜沙美氏▼このプロジェクトへ参加したことで、自分の視点が180度変わるほどの影響を受けた。正直、辞めたいと思った時もあった。これらの困難や毎日のぶつかり合いにも、最後まで諦めずにやり続けた皆の姿があったからこそ、私は続けられ、大きな財産を得た。

石浜紗貴氏▼多くの仲間に恵まれ、有意義な日々を過ごせた。「受賞」という形は逃したが、それぞれの人生において、最も価値のある出来事と思う。もし参加せずにいたら、味わえなかった感激である。だからこそ、この活動の継続を心より願っている。

齋藤祐介氏▼欧米の人は会議の交渉の場で主張を止めることなく、論理的に述べ続けた。私は圧倒され、反論できる場面もあったが、相手に巧みに阻止された。彼らは自分の意見を押し付けるように話してくる。私は異文化コミュニケーションの重要性を体感した。

継続活動する麗澤グローバル団体――「ASPIRE Reitaku」

学生自らの考えを世界に発信する場に！

千葉県立柏の葉高等学校英語教諭
第1期代表　齋藤祐介
（第73期　英語コミュニケーション専攻卒）

「ASPIRE Reitaku」団体の活動に際して、顧問の先生をはじめ多くの教職員、地域や保護者の皆様、そして活動を引き継いでこられたOB・OGの方々に感謝を申し上げます。同団体が今なお継続して活動できているのは、皆様のご支援の賜物であると強く実感しています。

国連アカデミックインパクト（UNAI）

麗澤大学は2013年6月に国連アカデミックインパクト（以下、UNAI）に加盟しました。UNAIとは、国連の広報局と世界各国の大学（および高等教育機関）がパートナーシップを結び、組織的なネットワーキングを介してイニシアティブを助成する世界規模の取り組みです。以下の10原則が目標として掲げられています。

〈国際連合アカデミックインパクト10原則〉
原則1：国連憲章の原則を推進し、実現する
原則2：探求、意見、演説の自由を認める
原則3：性別、人種、宗教、民族を問わず、全ての人に教育の機会を提供する
原則4：高等教育に必要とされるスキル、知識を習得する機会を全ての人に提供する
原則5：世界各国の高等教育制度において、能

力を育成する
原則6：人々の国際市民としての意識を高める
原則7：平和、紛争解決を促す
原則8：貧困問題に取り組む
原則9：持続可能性を推進する
原則10：異文化間の対話や相互理解を促進し、不寛容を取り除く

これらの原則を達成するためには、大学独自の行いだけではなく、学生が意識的・主体的に活動し貢献することが必要不可欠です。言い換えると、「国連・教育機関」の取り組みに学生を加えることが重要になってきているということです。ＵＮＡＩの原則達成に多くの学生が関われるような構造が求められた結果、「ASPIRE」という組織が誕生したのです。

では、「ASPIRE」とは一体何なのか。「ASPIRE」とは“Action by Students to Promote Innovation and Reform through Education”の頭文字をとった学生団体の名称です。この言葉には、「学生自らが行動を起こすこと」の重要性が意味として込められています。現在では、世界中の「ASPIRE」加盟校の学生がＵＮＡＩの原則実現のために様々な活動を行っており、麗澤大学もその一員として社会貢献に努めています。

「ASPIRE Reitaku」設立の経緯

「ASPIRE」を立ち上げようと思ったきっかけは、小笠原淳也さん（当時、桜美林大学4年生）との出会いでした。ある日、彼が麗澤に来学し、グローバル広場で「ASPIRE」についてプレゼンテーションを行いました。そのプレゼンテーションに私もたまたま参加をしたのですが、そこで、学生が主体的に活動する意義を熱く語られ、私の心にも火が点いたのです。はじめは、「ASPIRE Reitaku」を設立することに躊躇しました。というのも、その当時、他団体である麗澤模擬国連団体に第3期代表として参加をしていて、両立は厳しいと考えていたこと。そして大学4年生だったので設立してもすぐに卒業を迎

えてしまい、活動の継続が難しいと感じていたからです。しかし、小笠原さんと話していくうちに「どうにかして麗澤大学にも〝ASPIRE〟を設立しよう」と思うようになりました。そこで、卒業までわずかな期間ではありましたが、代表となり「ASPIRE Reitaku」を設立する決意をしたのです。

桜美林大学との合同ミーティング
前列左から３人目が第２期代表の小磯尚子さん

「ASPIRE Reitaku」設立への想い

「ASPIRE」を設立することは、麗澤大学の飛躍のためにも重要なことだと考えました。麗澤大学には、国際社会に貢献するために、学生が自分たちで主体的に問題解決を考え、活動している団体が数多くあります。どの団体も素晴らしい活動をしており、その団体のほとんどが「社会貢献・グローバルな視野の獲得」といったような同じ方向性を持っています。しかし、各団体の活動は孤立しがちで、他団体との連携が極めて少ないと感じていました。仮に、それぞれの団体が互いに一致団結して、新たな視点・角度から物事を一緒に考えることができれば、その力は無限の可能性を秘めたものになるのではないか。そう考えた私は「ASPIRE」という組織の下、麗澤大学がひとつになってほしいという想いを込め、設立に着手していきました。

しかし、それは私の目標のひとつでしかありませ

ん。「ASPIRE Reitaku」の立ち上げの本来の狙いは、「できるだけ多くの学生が自分の意見を世界に発信する機会を増やすこと」にありました。いろんな人と意見を交換し、他の人の考えを聞くことで、自分自身の考えを改めるきっかけを得てほしい。そして、「ASPIRE」に所属していれば少しでも自分を磨き上げることができる。そう感じてくれる団体であってほしい、という想いのほうが強かったかもしれません。

後輩たちの活躍

私が「ASPIRE Reitaku」の代表として活動した期間は、ほんのわずかです。それでも、翌年に控えている２０１４年ＩＡＵＰ（世界大学総長協会）横浜総会に向けて何ができるのかを一生懸命考えました。他大学との共同セッションや交流会なども頻繁に行いました。そのような活動の中で、後継者となる当時国際交流・国際協力専攻１年生だった小磯尚子さんに出会えたこと、そして彼女がこの活動に興味を抱いてくれたことは幸運でした。彼女がまだ１年次生だった頃に、第２期「ASPIRE Reitaku」の代表を任せましたが、プレッシャーを感じながらも立派に責務を果たしてくれました。小磯さんがいなければ、現在まで活動が続いていなかっただろうし、２０１４年ＩＡＵＰ横浜総会での、彼女の立派なスピーチを目にすることもなかったと思います。団体の設立に携わった者として、後輩の活躍する姿を見聞きすることは一番の幸せです。そして、今後も彼女のような学生が「ASPIRE Reitaku」から出てくるのを楽しみにしております。

「ASPIRE Reitaku」での活動は、自身の成長に繋がったと思います。半年間程度でしたが、とても有意義な時間を仲間と過ごすことができました。グローバルに活躍していきたいという想いがあれば、誰でも歓迎してくれると思います。少しでも興味があれば、ぜひ団体に参加をして自分を磨いてほしいと思います。今後も「ASPIRE Reitaku」の、そして麗澤大学の更なる躍進を、心より願っております。

継続活動する麗澤グローバル団体―「ASPIRE Reitaku」

ASPIREの活動を通して得た産物

第3期代表　志賀千晃
（日本語・国際コミュニケーション専攻4年）

私はASPIREの活動を通し、大きく成長することができました。それは、多くの方々と関わっていく中で、私自身の価値観が広がったからです。ASPIREの魅力の一つに、この多くの方々と関われることが挙げられます。

まずはASPIREという団体について、説明いたします。ASPIREとは、国連アカデミックインパクト（United Nations Academic Impact、以下ＵＮＡＩという）の活動を学生レベルに落とし込んだ団体です。ＵＮＡＩとは、高等教育機関同士、さらには高等教育機関と国連の橋渡しとなっていて、それに対し学生団体であるASPIREは、国連・教育機関・学生という三者の輪を構築するために活動しています。高等教育を提供している側だけでなく、高等教育の受給者である学生が関わることで、内側からも教育について考えられるようになっています。

ASPIREは麗澤大学だけでなく、桜美林大学をはじめとする他大学と協働で活動しています。そのため学内での週例ミーティングに加え、月に一度ASPIRE Japanの全体ミーティングが行われています。さらにASPIREは日本国内にとどまらず、韓国やメキシコにも支部があります。海外の支部とは、年に一度ほど議論を行う機会があります。ASPIREとして活動するにあたって、私たちは高等教育や国

際交流というとても大きなテーマに向き合っていて、「どうしたら今より良い大学、教育環境になるか」を考え続けています。

ASPIREのメンバーには異なる学年・専攻・学部の学生、さらには他大学の学生、大学院生も所属していて、彼らとの議論を通して知識が増加します。心理学や法、メディア、保育、芸術などさまざまな専門分野を学ぶ学生が集まることで、普段の大学生活では知る由もない知識に触れられます。経済用語の「PDCAサイクル」という考え方やメディアリテラシーについてなど、メンバーから教えられ、私の世界は広がりました。

「国際シンポジウム」での留学プログラム報告会

またASPIREの活動の一環として、2017年7月、IAUP（International Association of University Presidents：世界大学総長協会）がオーストリアの首都ウィーンにて開催したYoung Scientists Conference（IAUPの3年次総会IAUP Triennial Conference 2017と並行開催された若手研究者・博士課程学生向けの会議）にオブザーバーとして参加させていただきました（本誌カラーページ参照）。そこでは「学校の役割」や「テロを防ぐためにどのような教育をするべきか」などのテーマに対する研究者たちの意見を伺うことができました。その会議では、とても大き

な舞台で中山理学長が研究発表されている姿も拝見し、麗澤大学の学生であることに誇りを感じました。中山学長は日本から参加した学長らの中で唯一登壇し、道徳教育の重要性や現状の問題点、さらには麗澤大学の取り組みについて発表されました。鋭い質問に対しても柔軟に答えている学長の俊敏さと聡明さには、改めて感銘を受けました。

また、オーストリアでは唯一日本語教育が行われているウィーン大学への視察もさせていただきました。海外の日本語教育現場を見ることができるのは、日本語教育を専攻している私にとって、大変価値がありました。教科書や書籍から学ぶのとはまた違い、実際の現場を肌で感じることができました。日本語教育がどのように行われているのかを知ると同時に、知識と実践の相違にも気づくことができました。さらに、ウィーン大学と日本の大学に違いが多くあることも知りました。学費が無償であること、マトゥーラと呼ばれる資格が大学入試の代わりになっていること、休学の期間に制限がないことなど、日本の大学制度が世界共通のものではないことに気づかされました。ウィーンで過ごす一日一日は、私の中の常識や固定概念を大きく払拭する貴重な時間でした。英語でのディスカッションも含め、このような大変素晴らしい機会に恵まれ、更に大きく成長することができました。

この他にも、これまでのASPIREの活動成果で特に印象的なものに、短期留学プログラムを考案したことが挙げられます。現行の短期留学プログラムは異文化体験が主な目的になっていて、語学を習得することは困難であるということがアンケート調査から明らかになりました。そのため、1か月留学し、6か月自国で学習する期間を設け、そしてもう一度1か月短期の留学へ行く「1－6－1留学プログラム」を考えました。海外への留学は合計2か月ですが、そこに6か月の学習期間を含め、全体では8か月のプログラムになっていて、語学力の向上が図れるプログラムです。留学に行って「いい体験をした」で終わるのではなく、その留学での反省点を払

拭するための行動を起こしてこそ、そこからさらに成長が望めると考えました。

考案にあたってメンバーの所属大学ごとの特色や個人の留学経験を参考にしましたが、やはりそれでも実際に大学で運用するにはまだまだ未完成な部分が多々ありました。そのことに、フィードバックしていただき気づくことができました。大学の学長や理事長、教職員の方々からの評価や曖昧な箇所の指摘をしていただいたことで、このプログラムをより客観的に深化することができました。発表して終わりではなく、フィードバックを元にさらにプログラムを改善していくことで、現在もより良いものを目指しています。

ASPIREのメンバーとして活動している中で、やはり一番大きな成長となったのは価値観が広がったことです。先にも述べた通り、ASPIREを通してさまざまな人と繋がることができました。他大学の学生や教職員、学長、教育機関や国連で働く方など、多様なバックグラウンドを持った方々と意見を交わすことで、毎回「そんな考え方もあったのか」と気づかされます。他者との協働によって、物事を複数の視点から捉えられるようになりました。これは麗澤大学で学んだ道徳とも通ずるものがあると思いますが、唯一絶対の答えを求めるのではなく、色々な考え方があることを理解し、その色々な考え方を受け入れるべきなのだということを学びました。ASPIREの活動を通して、寛容・柔軟性の強化ができたことはもちろん、アンケート調査や毎回の議論から、表現力、思考の深化・習慣化など、ここには書ききることができないほど多くのことを学びました。大学生の限られた時間の中でこんなにも大きく私を成長させてくれたASPIREの活動は、今後も多くの学生の成長に繋がることと思います。ASPIREの一員として、またASPIRE Reitakuの代表として活動できたことを誇りに思います。今後もASPIREは麗澤大学の名に恥じぬよう活動により一層力を入れていきますので、変わらぬご支援、よろしくお願いいたします。

継続活動する麗澤グローバル団体―「ASPIRE Reitaku」

ASPIRE Reitakuの発展とともに

外国語学部長　渡邊　信
（ASPIRE Reitaku顧問）

ASPIRE Reitakuが２０１３年に誕生して５年。少数精鋭による力強い活動は、毎年「運命」に導かれるように現れる知的で頼りがいのある歴代の代表（齋藤祐介さん、小磯尚子さん、志賀千晃さん、秦健太さん）とメンバーの皆さんによって支えられて来ました。現在は以下の６人で活動しています（２０１７年11月現在）。

代　　表：秦　健太さん（Hata Kenta）　国際交流・国際協力専攻２年

副 代 表：伊藤良美さん（Ito Yoshimi）　国際交流・国際協力専攻２年

メンバー：志賀千晃さん（Shiga Chiaki）日本語・国際コミュニケーション専攻４年

スルヤ・ウィジャヤさん（Surya Wijaya）経済学部・経営学科４年

横田ほのかさん（Yokota Honoka）　国際交流・国際協力専攻１年

楊邵予さん（Yo Shoyo）　国際交流・国際協力専攻１年

ASPIRE Reitakuを本学学生によるグローバル活動の一つの核に育てるため、学内のサポート体制も徐々に整って来ています。２０１６年８月30日、大

学校舎「あすなろ」1階の道徳科学教育センター内に活動拠点「ASPIRE Reitaku Center（通称：ARC）」が開設されました。また職員の松野大祐氏が副顧問として、また野木清司氏が広報担当として活動を見守ってくれています。

2017年度はASPIRE Reitakuにとって更なる飛躍の年となりました。既に学生の皆さんが執筆したことと重なる部分も多いと思いますが、今年度のASPIRE Reitakuが運営等にかかわった二大イベントを総括してみたいと思います。

IAUP総会

IAUP（International Association of University Presidents、世界大学総長協会）のウィーン・オーストリア総会（第18回3年次総会）が2017年7月5日～8日の4日間、壮麗な「ホーフブルグ宮殿」を主会場にアッパー・オーストリア応用科学大学がホスト校となり開催されました。本学からは中山理学長、私、そしてASPIRE Reitakuを代表して次の学生が参加しました（学年は当時のもの）。

日本語・国際コミュニケーション専攻4年
志賀千晃さん
国際交流・国際協力専攻2年　中村文美さん
国際交流・国際協力専攻2年　伊藤良美さん

IAUPは3年に1度、世界各地の異なる開催地において3年次総会を開催します。高等教育におけるさまざまな課題や変革について議論する場となっています。各国の大学総長・学長だけでなく、国連など国際機関関係者やグローバル企業の経営者などが知見を共有し、また世界レベルでの人的交流を可能にする絶好の機会です。学生の時からこんなハイレベルな国際会議を経験できるなんてASPIREは本当に幸せです！

私にとっては2014年IAUP横浜総会、2015年IAUP50周年記念会議（イギリス・オックスフォード）以来3度目のIAUPへの参加でし

た。２０１４年ＩＡＵＰ横浜総会で当時国際交流・国際協力専攻2年生だった卒業生の小磯尚子さんが、学生による全体会議<VOICES of the FUTURE>で、各大学代表とともに英語で発表したことを今でも昨日のことのように思い出し、誇らしい気持ちが蘇ってきます。

本年の総会で特筆すべきだったのは、ＩＡＵＰ３年次総会と今回新設された〈The Young Scientists Conference若い科学者の会が〈Sustainability（持続可能性）〉をテーマとして同時開催されたことです。①〈Global Challengesグローバルな諸課題〉②〈Mobility of the future未来の流動性〉という二つのサブテーマが設定され、それぞれに関して提案がなされました。7月8日にはＩＡＵＰとYoung Scientists ConferenceのWorld Cafeも開催されました。ASPIRE Reitakuの学生にも貴重な発表の機会が与えられました。

「IAUP横浜総会2014」の特別パネルセッションでスピーチする第２期代表の小磯尚子さん

ＩＡＵＰ総会での中山学長の講演

今回のＩＡＵＰ総会で麗澤大学関係者としてとても誇らしかったのは7月5日に行われた本学の中山理学長のHow Can Japanese Universities Contribute to the New System of Moral Educationと題する研究発表でした。中山学長のＩＡＵＰでの研究発表は２０１４年横浜総会以来2度目です。午後に行われたセッションInnovation in Educationにおいて、今回

の大会を通じて日本からは唯一の発表者として登壇されました。私もASPIRE Reitakuのメンバーも大変誇らしい気持ちで拝聴したのを記憶しています。

（発表概略）

グローバル化が進む今日、日本の道徳教育には国際標準に見合う教育的・学術的貢献が求められている。文部科学省の強い政策的支援もあり、小学校と中学校で道徳が「特別な教科」になることは重要な前進である。しかし、日本の大学には道徳を専門とする学部などは皆無に等しく、その結果として初等・中等教育で道徳を教えることのできる教員を養成する仕組みが整っていない。こうした問題の解決の一助とするべく、麗澤大学大学院では学術的な道徳研究を踏まえて道徳を教育できる教員を養成するため、学校教育研究科道徳教育専攻を設置する。また学士課程4年間を通じて道徳を体系的に学べるよう2016年に全学でカリキュラム改定を行った。また研究面では、例えばミズーリ大学と、広池学園各校における道徳教育のインパクトの測定に関する共同プロジェクトを進行させている。20世紀のアメリカでは、大学は専ら、批判的思考力を鍛え、知識を習得する場と捉えられ、道徳教育は軽視された。しかし21世紀になると状況は好転し、現在では全米で100以上の大学に道徳や倫理などの教育・研究拠点が設けられている。翻って日本の高等教育における道徳教育を考える時、世界の最先端の教育・研究に遅れることなく、率先して未来を切り拓いていくことが、今後何よりも重要である。

（「教育学術新聞」第2704号（平成29年10月18日）に筆者が執筆した記事「IAUP2017ウィーン総会」から改変して転載）

日本私立大学協会国際交流推進協議会

2017年9月13日、本学の中山学長、私、そしてASPIRE Reitakuの以下のメンバーが、本学も加盟する日本私立大学協会の「国際交流推進協議会」に参加しました（私は私大協で国際交流委員を拝命し

ています）。

日本語・国際コミュニケーション専攻4年
志賀千晃さん
経営学科4年　スルヤ・ウィジャヤさん
国際交流・国際協力専攻2年　伊藤良美さん
国際交流・国際協力専攻2年　秦健太さん

第4期代表・秦健太氏（前列右から二人目）と新メンバー

国際交流・国際協力専攻1年　楊邵予さん
国際交流・国際協力専攻1年　横田ほのかさん

ASPIRE Reitaku、ASPIRE Japanのメンバーとして、大学学長や大使館員の前で、独自の留学プログラムに関してプレゼンテーションを行いました。この留学プログラムは、私立大学協会70周年記念国際シンポジウム（2016年12月2日）で当時国際交流・国際協力専攻4年生だった小磯尚子さんと、日本語・国際コミュニケーション専攻3年の志賀千晃さんが提言した「1-6-1留学プログラム」のことです。最初に1か月間の留学を終え何らかの課題を抱えた上で日本に帰国した後、大学（6か月）でその課題解決に向けて授業を履修・受講し、再度1か月間留学することで、より充実した留学生活を送ることができるというものです。大変好評でしたので、このプログラムの実現可能性を高めるためにユーザーモデルを設定し、具現化しました。実際にこのプログラムを利用する学生がいた場合、どのよう

な目標、後悔、行動があり得るのか、ASPIREの学生の留学経験も含め十分に考え抜いた議論を提示し、参加者の皆さんからは大きな反響がありました。

まとめと今後の活動について

今後ますますの活躍と発展が期待されるASPIRE Reitakuですが、２０１８年の主な活動として、以下が予定されています。

①ASPIRE CETYSのhackathonへの参加

ASPIRE MexicoとASPIRE Japanのメンバーが協同で行うプロジェクト。具体的なテーマ、日時は未定だが、お互い自国に居ながら交流を図る。インターネットを介し、24時間アイディアを出し続けるというもの。

②ASPIRE Koreaとのイベントの開催

ASPIRE Koreaのメンバーとともに、日韓の共通課題である「高齢化」について議論を行う。韓国のメンバーが来日し、「高齢化」について課題発見・解決を目指す。２０１９年2月頃開催の予定である。

③国連本部訪問

アメリカ・ニューヨークにある国連本部へ訪問し、ASPIRE Japan としての成果物を発表する。２０１８年6月頃を予定している。「国連アカデミック・インパクト」（ＵＮＡＩ）の事務局長であるDr. Ramu Damodaran 氏から本部訪問の誘いを受けたのである。

また次の大きな目標は日本が東京オリンピック・パラリンピックで大いに盛り上がるだろう２０２０年にメキシコシティで開催される第19回ＩＡＵＰ総会への参加です。各国ASPIREの学生たちの交流セッションが検討されているとのことですので今から楽しみです。

私が外国語学部長として、また顧問としてASPIRE Reitakuを心から応援している理由ですが、もちろん優秀な学生さんに活躍の場を提供したいからです。さらに、あまり聞きなれない組織かもしれませんが、〈全国外大連合〉への良い意味での

ライバル意識があります。大学の日本語名に「外国語」ないし「外語」という言葉を含む、全国７つの国公私立大学（関西外国語大学、神田外語大学、京都外国語大学、神戸市外国語大学、東京外国語大学、長崎外国語大学、名古屋外国語大学）のコンソーシアムで、学生通訳ボランティアを２０１９ラグビーワールドカップや２０２０東京オリンピック・パラリンピックなどの国際的なスポーツイベントや各種国際会議、今後日本で開催予定の国際的な競技大会へ派遣する予定だそうです。私の夢は麗澤大学も加盟する日本私立大学協会の４００を超える加盟校のうちで国際志向の強い大学の学生組織としてASPIREを育てていくことです。そうすれば日本を代表する大学生の〈シンクタンク〉として認知されるようになるでしょう。私大協は日本オリンピック協会とも提携関係にあるので、ASPIREのメンバーにも東京オリンピックで活躍の機会が与えられることを期待しています。

最後になりますがASPIRE Japanに所属する学生を日ごろから丁寧にご指導いただいている山崎慎一先生（桜美林大学助教）、小笠原惇也先生（同助手）に深く感謝の意を表したいと思います。

（付記：本稿には一部　筆者が原稿を作成し麗澤大学学長室スマイルトーク（http://www.reitaku-u.ac.jp/president/）で公開している「中山学長が世界大学総長会議（ＩＡＵＰ）ウィーン総会でスピーカーとして登壇（教育における革新のセッション）」「ＩＡＵＰこぼれ話」、また「教育学術新聞」第２７０４号（平成29年10月18日）に筆者が投稿した「ＩＡＵＰ２０１７ウィーン総会を振り返って」から改変し使用した部分があります。）

卒業生の今①

「特別なところ」

CBC株式会社　豊田貴士
（第57期　国際経営学科卒）

麗澤で大学4年間を過ごしてから、はや20年が経過しました。現在は、大学生のころには想像もしなかった40代中年への仲間入りを果たし、都内の商社で貿易業務に携わっております。現在の私にとって、麗澤での4年間は文字通り、たった4年間であり、人生の10分の1未満の時間に過ぎません。しかし、ここで学んだことや詰まった思い出は、その後の人生のどの部分を切り取っても比べることができない貴重な時間となりました。

この度、大学時代にお世話になった恩師から、『麗澤教育』への執筆を！との命題を頂戴しましたので、筆不精ながら大学時代のことや、現在の自分のことを中心にお伝えしたいと思います。

尾道から柏へ

私は広島県の尾道市生まれです。19歳までのんびりと尾道で過ごしましたが、アメリカへの強い憧れがあり、高校を卒業したら絶対にアメリカで学ぼうと決意しておりました。高校3年の時、アメリカの大学に行かせてくれと両親に直訴しましたが、「お前はアホか、そんな金はない」「日本の大学に行け」と猛反対にあい、最終的にこの道は断念しました。その後は、留学できる大学を第一志望として浪人時代を過ごし、麗澤に入学しました。

尾道から一人上京してきた私が最初に考えたことは、「東京で多くの人のなかに埋もれてはダメじゃ。まず目立ったる！」ということでした。それには見た目も大事だと考えた私は、誰も持っていないような派手で目立つスーツを着て入学式に出ることにしました。叔父からの入学祝いに、上下紫色のスーツと、同じ色のネクタイを買ってもらい、式に臨みました（成人式で暴れる若者とは違いますよ）。

しかし入学式当日、私に声をかけてくる新入生はなく、サークルの誘いで囲まれることも想像していましたが、それも全くなしでした。しかし、ここで落胆する訳にはいきません。入学式の終盤、桜が見事な学園の庭を見渡し、一番話し易そうな新入生に声をかけました。それが20年来の友人となるK氏でした。K氏は私の第一印象を「反社会的人物か？」と思ったという話は、20年たった今でも酒の肴になっております。

サンノゼ州立大学での留学時代

2年次にサンノゼ州立大学への留学を果たしました。留学候補生が決定される選抜面接で、西鋭夫教授と大場裕之教授に「アメリカに行かせてやる」と言われた時は、あまりの嬉しさに研究室棟の廊下と中庭を全速力で走って帰ったのを覚えています。

アメリカ留学中は、思ったほど言葉には苦労しませんでした。1か月くらいで自分の言いたいことは全部言えるようになっていました。これは、それまでの麗澤での英語教育の賜物です（と言っておきましょう）。

滞在中は日本では考えられない多くのことに遭遇しました。最初のカルチャーショックは、学食で起こりました。アメリカは多くの人種が混ざり合っても皆仲良く、人種のサラダボールのように、一つになっていると考えていた私でしたが、初めて学食の中を見て驚きました。学生たちが完全に白人、黒人、アジア系と別れて食事を取っていたのです。

あるフランス系の黒人の学生は、自分が黒人であることに深いコンプレックスを持っていました。「そんなことは馬鹿げている！」と、白人の友人と深夜まで議論したこともありました。人種も宗教も皆違いま

す。皆が一人ずつ全く違うという環境の中では、自分自身が確固とした意見と考えを持ち、相手の目を見て明確に伝えなければなりません。「自分の意見はあなたとは違う」ということを堂々と伝え、相手に納得してもらわなければなりません。そのためにはどうすればいいのか？留学期間中、そんなことを強く意識して過ごしました。

友人の幅は、次第に増えていきました。アメリカをはじめ、欧州、アジア出身の友人もできました。明日帰国するという日に、仲良くしていたフランス人の友人と寮の玄関先で、2人で深夜まで飲み明かしました。もう遅いので帰ろうと立ち上がった時、彼と固く抱き合い泣いたのを、今でもはっきりと覚えています。

就職活動を休止してサラエボへ

大学3年次後半に、犬養道子先生（2017年7月ご逝去）との出会いがありました。大学4年間で最も影響を受けた恩師の一人です。犬養先生は、世界の飢餓や難民問題に深くかかわってこられた方です。数週間の講義の後、サラエボでの復興支援活動のボランティア募集がありました。当時のサラエボは内戦終結から2年が経過したばかりで、まだ地雷も数多く残っている場所と聞いていましたが、私は迷わず申し込みました。当時、まだ就職先も決まっていませんでしたが、それもほったらかして参加を決意します。今では笑い話ですが、出発前には念のため遺書も書きました。

冬季オリンピックが開催されたサラエボですが、街中に銃弾や砲撃の跡があり、数え切れないほどの地雷が埋まっていました。街には、片腕がない人、両足が地雷で飛ばされた少年、片目が無い人など多くの傷ついた人たちがいました。内戦は終息していましたが、そこに住む宗教が違う人々の憎しみはまだ収まっておらず、夜中に響く銃声や、建物の爆破事件も滞在中頻繁に起こりました。

どんなに人々は落ち込んでいるか、落胆しているかと思いこの街を訪れたのですが、復興を目指して立ち上がる若者や子供たちに多く出会うことができたのが、嬉しかったです。「明日は何が起こるか分からな

いけど、今日は大丈夫だから良いじゃない。〝Don't worry. Be Happy〟と地雷だらけの山を背に笑う人たちと話しながら、自分の両親や友人、日本の人々のことを考え続けていました。人間は、こんな状況に置かれても笑いながら、明日に希望をもてるのだと分かったことは、その後の人生を生きて行く上での糧となりました。当時の手記を中心に、サラエボの内戦の経緯や現地での活動をまとめたものが、私の卒論となりました。

社会人として20年が経過

その後なんとか就職活動も滑り込みで、現在の商社に就職することができました。今は都内で勤務しながら、年に何度も海外出張に出ます。北米をはじめ、欧州、アジア、中東など仕事があれば世界中どこへでも行くというのが商社マンの基本です。今まで仕事で訪れた国は30か国を超えました。

一般企業なのでいわゆる営利団体であり、利益の追求が会社の第一目的になります。数字を上げること、利益を上げることが優先されます。しかしながら、その中においても自分が関わった製品開発が、特定分野の技術革新の手助けとなり、どこかの国の誰かのためになって喜んでもらえることが、この仕事の醍醐味です。

ただ、走り過ぎたとき、日々連続する経済活動中心の生活の中で、大事なものを忘れてしまいそうになることがあります。そんな時は、ふと麗澤での4年間を思い出し原点に立ち返ります。休日に家族と一緒に麗澤に戻り中庭を散策することがあります。すると学園の見事な新緑や、季節の中で変化する紅葉が、自分にとって一番大事なことを思い出させてくれます。20年が経過した今、ここは私にとって単なるきれいな庭ではなくなっています。立ち止まり、麗澤の庭に帰り、大事なものを思い出し、また走り出し、思いっきり走って、また戻って来る。今でもここは私にとっての原点であり、大切なものを思い出させてくれる、「特別なところ」であり続けています。

卒業生の今②

クリスマス２０１７

ルフトハンザドイツ航空　小林 奈々子
（第60期　ドイツ語学科卒）

私は今ルフトハンザドイツ航空機の機上でこの手記を書いています。大学を卒業して約17年、空港という毎日ドラマがあふれた場所で、そのほとんどを過ごしてきました。人種も文化も違う様々な旅行者のお手伝いをすることは刺激が多く退屈することのない日々でした。

私は新潟県十日町市という雪深い街で生まれ育ちました。３６０度山々に囲まれた美しいところですが、高校生の頃になると、都会で暮らしてみたい、さらに、ただ漠然と海外で暮らしてみたいと思うようになりました。今思えば、明確な目標もなりたい職業も分からないまま、ただ海外に行きたいという憧れだけが目標になってしまっていたのかもしれません。

イエナ大学へ留学

在学期間中に留学できる大学を探し始め、高校の英語の先生に薦められたのが麗澤大学でした。「ドイツ人はたいてい英語も話せるから、ドイツ語学科に行けばトリリンガル（3か国語を自由に話す人）になれるんじゃないか？」ドイツ語には縁もゆかりもないし、こんにちはさえ何ていうか分からないけど、それお得！そして麗澤大学なら留学への門戸が広い。少人数制だし、語学を学ぶには良さそう。

もちろんそんなうまい話はありません。１００％信

じた訳ではないけれど、ドイツ語だけで手いっぱい、というか頭いっぱい。ドイツ語の難しさ、複雑さには驚きました。ただ、留学への近道という意味では大正解でした。麗澤大学で1年半ドイツ語を学んだ後、いざドイツ留学に向かいました。フランクフルトのユースホステルでチェックインをしようとしたとき、ドイツ語で話しかけたのに、あっさり英語で返され、悔しい思いをしたのを今でも鮮明に覚えています。その後5週間、Montabauer（モンタバウアー）という静かな村で文字通り山篭りの語学研修を受けた後、イエナ大学での交換留学に臨みました。

イエナでの1年は一言では言い表せませんが、毎日が新鮮で、経験が凝縮された1年でした。私のその後の人生のターニングポイントとなる経験を与えてくれた麗澤大学とそれを全面でサポートしてくれた両親に心から感謝します。

念願の航空会社に入社

大学卒業後、成田国際空港で航空会社の旅客業務を請け負っている、新東京旅客サービス（現ＡＮＡエアポートサービス）に入社し、ルフトハンザドイツ航空、オーストリア航空担当に配属されました。

とてもトリリンガルになったとはいえない状況で挑んだ英語面接は、英語ではなかなかうまく話すことができませんでしたが、最後に面接官が「今話したことをドイツ語でどうぞ」と、ドイツ語で話す機会を与えてくださいました。これがその後の配属のきっかけになったのだと思います。その後4年4か月ほど空港での外資系航空会社の旅客ハンドリングに携わった後、ルフトハンザドイツ航空に入社するチャンスをいただきました。その後9年間は成田空港で、２０１４年の羽田空港就航から２０１７年の8月までは羽田空港で勤務し、現在は東京営業事務所で日本・韓国支社長の専属アシスタントとして働いています。仕事をする上で、外国語を使うことはツールでしかないことを日々感じます。しかしながら、その基盤となり、異文化への理解と受容力を養えたのが麗澤大学とイエナ大学での4年間でした。

ドイツでのクリスマス

そして今、婚約者とドイツのクリスマスマーケットをめぐり、その後、彼の実家でクリスマスを過ごすため、ドイツに向かっています。

ここからは今回のドイツ旅行を紹介できればと思います。まず降り立ったフランクフルトではクリスマスマーケットでヘッセン地方の名物であるアップルワインをホットでいただきました。通常は冷たいものですが、寒いクリスマスマーケットならではの飲み方で、新しい発見でした。夜は元同僚のお宅でFlammkuchen（フラムクーヘン：ドイツ版ピザ？）をいただきながら近況を報告し合い、楽しい時間を過ごすことができました。

ドレスデン

フランクフルトからベルリンにはＩＣＥ（ドイツの高速鉄道）で向かいました。航空会社に勤めていながら4時間もかけて電車に乗るの？の友人に聞かれることがありますが、ドイツの街並みを眺めながらゆっくり電車に乗るのも悪くありません。

ベルリンでは久しぶりに会う友人夫婦と一緒に夕食を楽しみ、クリスマスマーケットにも足を運びましたが、ちょうど1年前にクリスマスマーケットをターゲットにしたテロがあり、そのメモリアルセレモニーが催されていました。近年のクリスマスマーケットではテロ対策のためか警察官の姿が目立ちます。また、荷物検査が必要な場合もあり、そういう対策をしなければ安全に伝統的なお祭りさえ催すことのできない現状はとても悲しいものです。

また、ベルリンでは日本大使館に勤める麗澤大学の同級生宅にもお邪魔しました。彼女とは5週間の山篭り語学研修を相部屋で一緒に過ごした仲間です。会う機会は少ないですが、留学時代の話をしたり近況を報告しあったり、共に学んだ友人と過ごす時間はとても刺激になります。

ベルリンはとても好きな街です。古いものを排除せず、新しいものと共存させる。そこには自分たちの歴史を忘れないというも意味もあるのかもしれません。

ベルリンを後にした私たちはドレスデンに向かいました。クリスマスマーケットは伝統的でとても趣がありました。多くの手工業品やスウィーツの屋台が並び、メルヘンの物語のコーナーがそこかしこに設けられています。ヘンゼルとグレーテルのお菓子の家や七人の小人、塔の上のラプンツェルが髪を梯子のように垂らしていたり、まさにメルヘンの世界です。

ドレスデンからは、こちらもクリスマスマーケットで有名なニュルンベルクに向かいました。ニュルンベルクは城塞を含め、中世の街並みが残る街です。美しい女性教会をバックに盛大にクリスマスマーケットが催されています。

その後は、婚約者の実家でクリスマスを過ごしました。ドイツのクリスマスは日本のお正月のように、家族で過ごします。日本と少し違うのは、プレゼントを交換するだけでなく、キリストの生誕を祝うという目的の元に家族で祈り、歌うことです。今年は自分自身がドイツの新しい家族と共に教会に行き、飲んで、食べて、話しての繰り返しの3日間でした。当時とは対照的な素敵なクリスマスを過ごすことができました。

ドイツ観光大使のような寄稿になってしまいましたが、自分が歩んできた道を振り返ると、改めて、今の自分の根本にある考え方やキャリアの基盤が大学生活の4年間で培われたものだと感じます。今後も麗澤大学が活発に海外等の交流の架け橋になっていくことを願っています。

卒業生の今③

「今」につながる麗澤大学

株式会社サニーサイドアップ　榊　初美
（第62期　英語学科卒　比較文明文化専攻博士課程前期修了）

「私は多様な文化の中にある〝つながり〟に興味を持っています。多様性の中にある人と人との繋がりは、その全てが繋がった時に円相を描くことが可能であると信じています」。

15年前、比較文明文化専攻修士課程（前期）の願書に書いた言葉です。このような場に出すのはお恥ずかしいのですが、何かに思い詰めていたような当時の自分が懐かしく、この言葉から書き始めてみました。

「世界」の大きさに衝撃を受けた時

今回、執筆の機会をいただき、学生時代を思い出そうと、捨てられずに眠っていた当時のノートやプリントやらをひっくり返していたら、出てきたのがこの願書でした。このようなことを考えるに至り、大学院を目指すことになったきっかけは、大学1年次の必修科目だった「教養ゼミナール」で、服部英二先生にお会いしたことでした。先生との出会いはとにかく衝撃、その一言に尽きます。初めての講義で、自分が知っている世界がいかに狭かったかを思い知らせれるほどに、先生のお話は一つの地域に留まることがなく、私の頭の中では、常に地球儀がくるくると回っているような感覚。世界地図が隅々までどんどん広がっていくようでした。そうして、私の比較文明文化を中心とした麗澤大学での6年間の学生生活が始まりました。

在学中は、知的好奇心を常に刺激してくださる、たくさんの魅力的な先生方に恵まれました。比較文明文化には垣根がありません。研究する分野に決まりはなく、先生方の専門分野もそれぞれに異なり、人文学だけでなく科学分野の先生方のお話を伺う機会もありました。いつも感じることは、先生方の生き生きとされた姿です。誰よりも好奇心が旺盛で、新しい考えをどんどん広げていらっしゃるのは、先生方でした。

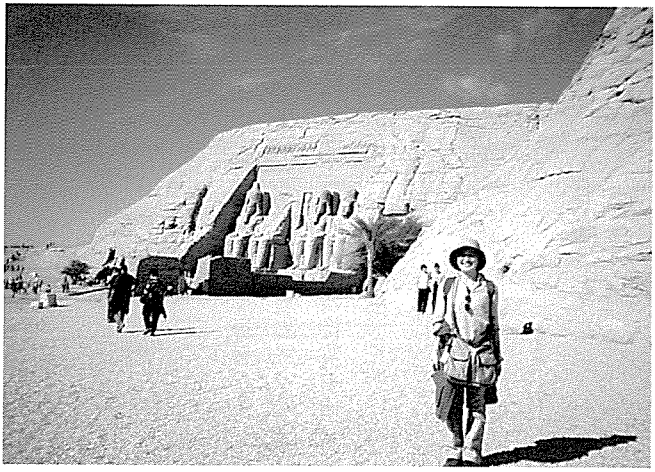
多くの学問や研究はその分野の中で専門性を深めていくことが多いかと思いますが、比較文明文化のアプローチは横割りだと思います。違いを持つもの同士を比較することで、共通項を求め理解し合い共存の知恵を見つけていくことを目指すのが比較文明文化です。服部先生から教えていただいた「通底の知」は、麗澤大学での学問を超えて、私に深く刻み込まれている言葉です。表面的には相容れない程の違いを感じさせたとしても、人間の文化としてその根底では一つに結びついている、それは「互敬」の精神に基づく考え方です。

学部の卒業式の当日、服部英二先生と

服部先生のゼミでは、フィールドワークの重要性からゼミ旅行でエジプトとスペインに行き、その土地に立ち、空気を吸い、自分の目で見ることで、多くのことが感じ取れることを学びました。

エジプトではその壮大さに圧倒され、5千年前に生きた人々の持つ高度な文明に驚き、生と死に対する純粋な思いが持つ強さを感じました。夕日が沈むナイル川のクルーズは大学生には贅沢な時間でしたが、なぜか「川の流れのように」を口ずさんでしまったほど、

人生を考えた旅でもありました。以来、エジプトを思い出すと、自然に、この曲が頭の中で流れてくるようになってしまったのですが、人生の最期にはまたナイル川をクルーズしてしたいと思っています。



エジプトのアブシンベル神殿の前で

スペインでは、聖地は信じる神が違っても聖地である、という場を見てきました。セビリアのカテドラルは、世界で3番目に大きい大聖堂ですが、レコンキスタ以前はイスラム教のモスクでした。外観からも、どこまでがモスクでどこからが教会なのかがはっきり分かるほどなのですが、これはキリスト教の征服でありながらも、憧れでもあり、融合だったのではないかと、その地を歩くことで理解できました。聖なるものは、時代を超え様々な人の手で受け継ぐことができる――そんなことを感じられたのも、その地を自分の足で歩いたからなのだと思います。

友人たちとの思い出

友人に会いたい、と思ったらいつも学食に行きました。誰かしら友人がいて、課題をしたり他愛もない会話に花を咲かせたりしていました。大学院を受験するその日の朝、緊張していた私は、誰かがいてくれたらと思い学食に……。期待通り、いつもと変わらぬ笑顔の友人がいてくれました。緊張をほぐそうと、腕相撲

をしてくれた彼のお陰で大学院生になれたのだと、今でも感謝しています。

大学院でも私の見聞を広げてくれる友人たちに出会いました。私が在学していた時の比較文明文化専攻は、半数近くが留学生だったので、院生が机を並べて研究している院生室はとにかく毎日が比較文明文化そのもの。「国際化が進み、人類が一つの地球で共存していくために、様々な異文化の特質を相互に比較研究し、またその相互理解の懸け橋を架けることによって、国際社会に貢献することを特色としている」麗澤大学の比較文明文化専攻は、日々違いと〝つながり〟を感じる環境でした。

いま、スポーツの仕事をして

卒業後は、スポーツ業界と広告業界を経て、5年前から株式会社サニーサイドアップというPR会社に勤め、主にマラソン大会のPRを担当しています。1年を通じて、テレビや新聞などのメディアに対して情報を配信したり、取材の対応をしています。大会当日は多くの取材陣がゴールしてくる選手を撮影できるよう取材環境を整え、そのマラソン大会の情報が正しく国内外に発信されていくことを目指しています。

私はこの仕事を〝つながり〟を作ること、だと考えています。一般的なPR=Public Relationsの定義は、企業・団体が社会に理解され、人々と信頼関係を築くためのコミュニケーション活動のことで、サニーサイドアップでは「たのしいさわぎをおこしたい」を合言葉に、様々なニュースを作るお手伝いをしています。苦労もありますが、担当した仕事がニュースとしてテレビで流れたときには、社内で拍手が沸き起こり、みんなで喜ぶ、そんな仕事をしています。つい先日行われた東京マラソン（2月25日）で、設楽悠太選手が日本記録を更新した瞬間にも立ち会うことができました。これも、この仕事の醍醐味のひとつです。

サニーサイドアップとの出会いも不思議なご縁でした。実は大学生になった年に、ある新聞記事を読んだときから、憧れていた会社でした。当時、イタリアに移籍したサッカー選手の中田英寿さんのマネジメント

をしているPR会社として報道されていました。無知な私は、テレビで見る選手以外にも、裏側でスポーツに関わる仕事をしている人がいることをそこで初めて知り、「スポーツで仕事がしたい」と漠然と思うようになったのがきっかけでした。人生、どこで何が巡り巡ってくるのか分からないものですね。

スポーツが好きな理由を聞かれた時、私はいつも「そこには喜怒哀楽があるから」、と答えます。日常の生活では見せることのない、表情がたくさんあります。あんなに人前で大声を出して感情を爆発させたり、人目もはばからず涙を流したり、物を投げつけるくらいの怒りを露わにしたり、抱き合うほどの喜びを分かち合うことがあるでしょうか。「スポーツには感情を動かす力がある」一緒に仕事をしている友人はそう表現しました。

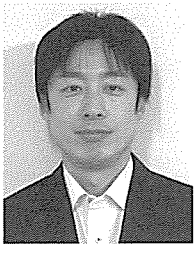
もう10年も前のことですが、6万人の観客で埋め尽くされたスタジアムのピッチに立たせていただいたことがあります。あの時のようにもう一度、満員のスタジアムのピッチに立ちたい。熱狂させたい。それが私の夢です。私にとってあの場所は、どんな人でも〝つながり〟、大きな一つの丸い円を描くことができる所。大学時代から私が求めているものは変わっていないようです。

卒業生の今④

麗澤大学で学んだことを活かす

――人づくり、仕事づくり、職場づくりを意識して――

東日本旅客鉄道株式会社　佐藤大輔
（第63期　経営学科卒）



麗澤大学を卒業し、この春で早いもので14年が経とうとしています。卒業したばかりの頃は麗陵祭などに顔を出していましたが、時間の経過とともに訪問する機会も減り、気が付けば10年以上も経過してしまいました。そのような時に、本誌への執筆依頼があり、突然のことで驚きましたが、自分を覚えていてもらえた嬉しさもあり引き受けました。過ぎ去った年月を考えると長いと感じるものの、思い返してみると今でも鮮明に覚えています。麗澤大学で過ごした4年間がとても充実していたのだと改めて感じました。今回、このような機会をいただいたので、麗澤大学で過ごした4年間を思い出しながら、大学生活で学んだことなどを振り返ってみたいと思います。

ＲＩＦＡとの出会い

大学生活を振り返った時に欠かすことができないのがＲＩＦＡ（麗澤国際交流親睦会）との出会いでした。入学当初はサークルにも所属していませんでしたが、大学生活にも慣れた頃に留学生との交流を深めながら大学生活をサポートしているサークルがあると聞いて興味を持ったのがきっかけでした。様々な国や地域からの多くの留学生がいた麗澤大学。身近にそんな交流する機会があるのなら自分もその輪に飛び込んでみよう！と当時ＲＩＦＡの窓口になっていた国際交流

センターを訪れたのが始まりでした。

ＲＩＦＡでの活動

ＲＩＦＡでは留学生が困った時の生活サポートをはじめ、身近なところではお昼を一緒に食べたり、授業の空き時間に日本語の勉強の手伝いをするなど、日常の身近な関わりを大切にしていたと思います。時には英語や中国語などを逆に教えてもらったり、普段の会話からお互いの国のことや文化を学んだりするなど、楽しみながら交流していました。

また普段と違ったイベントとして、留学生を交えてスポーツをしたり、夏には海や山に合宿に行ったりもしました。そして冬に行っていた「餅つき」は、実際に杵と臼を使っての本格的なもので、留学生はもちろんのこと、たくさんの人が集まるＲＩＦＡを代表する一大イベントでした。餅つきを見るのも初めてなら食べるのも初めてという留学生も多くいて、日本の文化を実際に見て体験してもらえる、やりがいのあるものでした。

こうしたＲＩＦＡでの活動を通じて、実は多くのことを学んでいたのだなと気づいたのは卒業してからでした。社会人となって多くの人と出会い、様々な仕事と向き合ってきましたが、そんな時、ＲＩＦＡで培ったコミュニケーション力や価値観や文化の違いに対する考え方は大いに役立っています。特に人との関わり合いにおいて、自分の考えを伝えることや相手を理解することは、まさに文化や考え方が異なる留学生とのコミュニケーションを通して磨かれていたのだと思います。また各イベントを企画、準備、実行してきたことも、規模こそ異なるものの、仕事におけるそれと何ら変わりありません。これらは自分一人の力ではできず、そこには仲間の存在があり、また相手の存在もあります。それぞれ役割があれば、目的もあります。どれか一つ欠けても成り立ちません。そんな大切なことを実は学生時代に意識もせず学んできたことが、今の私にとって財産そのものです。ＲＩＦＡ時代はすべて楽しみながらできていたということが、今とは大きく違うことかもしれません（笑）

RIFA夏合宿

ＲＩＦＡでの出会い

ＲＩＦＡを語る上で避けては通れないこと、それはＲＩＦＡを通じて出会った多くの「人」です。留学生はもちろんのこと、先輩や後輩、そしてＲＩＦＡの活動を陰で支え、いつも温かく迎えてくれた国際交流センターの方々など、本当に多くの出会いがありました。大学生活の中心であったＲＩＦＡでの活動。そこで常に一緒に居たのがここで出会った人たちでした。みんなで笑い、みんなで悩む。悩めば相談もするし相談もされる。そんな当たり前であったことができる存在が実は貴重なものであったことも卒業してから気づき、そして今日改めて再認識しました。残念ながら、今では会う機会が少なくなってしまいましたが、麗澤大学で得た大切な絆です。今日をきっかけにして、この絆をより大切にしていこうと思います。

ＲＩＦＡから外へ

２００３年10月、国際交流センターから「日韓共同

未来プロジェクト」事業に推薦していただきました。これは２００２年の日韓共催Ｗ杯の成功を受け、両国間の交流を更に推進しようと始まったもので、両国の大学生が共同生活をし、そこで様々なアクティビティを通じて互いの理解を深めていくという事業に参加しました。第二外国語で韓国語を学んでいたものの片言の韓国語では思うように伝わらず、やはり言葉の壁に苦労しましたが、そこはＲＩＦＡでも経験していたことです。伝えたい！理解したい！という気持ちで向き合った結果、すぐに打ち解け楽しく過ごすことができました。円滑なコミュニケーションに言語は大切だと思います。しかしそれ以上に相手を理解したいという気持ちや意思が重要だと身をもって体験できました。このような貴重な機会をいただけたことに本当に感謝しています。

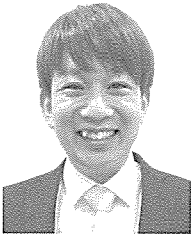
日韓合同プロジェクト

そして現在

この春で社会人として15年目を迎えます。気が付けば部下もいる中堅どころとなってしまいました。今回の執筆にあたり、これまで忘れていたこと、また意識せずとも活かされてきたことなどを思い出すきっかけとなりました。今の私があるのは麗澤大学で学んだ4年間があるからだと改めて実感しているところです。現在は人づくり、仕事づくり、職場づくりを意識して仕事をしています。麗澤大学で学んできたことをいかに活かすかが今の自分に求められていることなのかもしれません。これまでの出会いと学びに感謝し、自分自身の更なる成長を目指して一歩一歩進んでいきたいと思います。

「同じ志を持つ者の大切さ」を知る

第54回麗陵祭実行委員会委員長　落合　愁斗
（英語コミュニケーション専攻3年）



11月3日から5日の3日間、麗澤大学の大学祭である「麗陵祭」が行われました。２０１７年は日取り、天気共に良好で、およそ９５００名の来場者があり、無事に終了することができたことを誠に嬉しく思います。今年の麗陵祭は「日進月歩」というテーマを掲げ、来場者の皆様、そして実行委員の成長のきっかけにしていただければという思いで開催しました。そこから私は私自身が麗陵祭を通してどのように成長し、どのようなことを学ぶことができたのかということに焦点を当て進めていきたいと思います。

私が麗陵祭実行委員会に入ったのは1年に入学してからすぐのことでした。入った理由は大人数で何かをやることが好きで、大学でも何かできないかと考えていたからです。高校までは部活一筋、文化祭はただの行事の1つに過ぎませんでした。だからしっかりと自分たちで準備してやってみたいと思いました。麗陵祭実行委員会には5つの部署があり、それぞれ違った仕事を持っています。イベント・展示のサポートをする対外局、出店・フリーマーケットの運営を主な仕事とする総務局、麗陵祭全般の装飾物を作る装飾局、ホームページやパンフレット、ポスターなどの広報活動に関わる仕事を全て担う広報局、そして私が1・2年次に所属していたイベントの企画・運営が主な仕事をする企画局があります。そこで私は1年の時にはイベン

トの司会を、2年の時にはオープニングセレモニーとフィナーレイベントを管轄する班の班長をやらせていただきました。この2年間は私にとって麗陵祭実行委員としての基礎をたくさん学んで一委員としての気持ちを知る期間だあったと、今は振り返ります。

3年目になり私たちが最上級生になる時が来て、私は委員長として委員会全体のＴＯＰとして活動することになりました。最初は分からないことばかりで、局員のサポートにどこまで手を貸していいのか分からず、多少なりとも葛藤がありました。正直楽なことばかりではなく、自分の時間をたくさん犠牲にしてまでやらなくてはいけないこともありましたが、その中でも学ぶこともたくさんありました。上に立つまでは、仕事を持つ人は全員がやりたくてモチベーションが高いものだと思っていました。しかし現実は、やりたくなくてもやらなくてはいけなかった人、一時の感情で軽い気持ちでやってしまった人など、一人ひとり委員会に対しての想いや背景が違い、それがいい意味でも悪い意味でも影響するということです。これまで私は仕事がしたくて続けていたのでその立場の人の気持ちしか知りませんでしたが、委員長になりたくさんの人と関わることで逆の立場の人のことをより深く考え、知りたいと思うようになりました。物事のとらえ方の視野が広がった、充実の1年でした。

また麗陵祭における個人の時間の使用についてはどうしてもマイナスなイメージが付きやすく、それをプラスイメージをどう持たせるかということもとても難しかった。マイナスのイメージが付きやすいことだからこそ、局員たちにはその一瞬一瞬を楽しんでもらえるようにと常に考えていました。２６０名を超える麗

陵祭メンバーを動かすのはとても難しく、事前の準備は不可欠でしたが、局員が楽しんでいる姿を見るとやっていてよかったと思います。なぜ私がここまで局員について考えたかというと来場者を楽しませるのは私ではなく局員一人ひとりだからです。私一人がどう動いても来場者に伝わることは限られてきます。ですから、局員たちが心から楽しんで活動してくれることで、それが周りの人たちに伝染していくのではないかと、「局員第一」で考えました。それにもし私が来場者に対してどのようにしてほしいか具体的に事細かく言ってしまうと、局員たちが考え成長する機会を失ってしまうと考え、ヒントだけは伝え、あとは自身で考えてもらうことにしました。その結果、今年の局員たちの、自ら考え行動している姿をたくさん見られたように思います。一見、放任過ぎるように見えますが、こうすることで、私自身も伝え方について学べたのではないかと思います。

麗陵祭実行委員会に入り、これまでいろいろなことを経験して改めて思うことは「同じ志を持つ者の大切さ」ということです。局員を含め私もなぜ準備などで大変と分かっていながらも続けらたのは、全員で成功させたいという強い想いがあり、その中に責任感が生まれ、私をここまで成長させてくれたのではないかと考えております。

最後になりますが、この第54回麗陵祭に携わってくださった皆様、本当にありがとうございました。今年２０１８年度は第55回で節目の年を迎え、後輩たちはすでに高い志を持ちながら準備を開始しております。皆さん、ご期待ください。

編集後記

◆平成30年4月、日本で最初の道徳に特化した大学院の開講に併せて、〈特別企画〉「学校教育研究科道徳教育専攻」を掲載した。その中で、中山理学長は、「道徳教育の理論と実践の融合を通して、教科化される「道徳科」に精通した教員や専門研究者の養成に取り組むとともに、教育学における新領域「道徳教育学」の開拓に向けた研究と教育を展開するにあたり、3つの人間像の育成を目指したい」と述べている。

◆〈特集〉は「特色ある麗澤教育」とした。どこの大学も教育内容・方法等にも工夫を凝らしているが、本号では「ドイツ語専攻の教科書を使わない授業」、「『英語で経済学・経営学を学ぶ』ことに特化し、全員が海外研修・留学を経験する」、「道徳の授業を創る力と観る力を育むことを目指して」など6つの授業を取り上げた。学生が、それぞれにその魅力を語っている。

◆学生の声としては、「言語を学ぶ意味と楽しさを知ることができた」「小グループに分かれて課題解決に取り組むことで、チームに貢献でき嬉しかった」「企業に勤める先輩から、実際の〝社会〟〝ビジネス〟はどのようなものかを学ぶことができ、新たな発見があった」「「道徳教育の研究Ⅰ・Ⅱ」では、道徳教育推進教師という存在と役割を学んだ。英語の教師として教壇に立ちながら、道徳教育にも力を入れ、思いやりのある学級をつくりたい」などで、学生たちの本音が聞こえてくる。

◆先輩から後輩に受け継がれている麗澤グローバル団体の活動で、「麗澤模擬国連」（7年）と「ASUPIRE Reitaku」（5年）がある。「結果はともあれ、挑戦し続けることが重要。この活動を持続し、学んだことを後輩に伝え、本学が継続して出場できる常連校になってほしい」と声援を送り続ける中山学長。それに応えようと、学生たちは学業と並行して、これらの活動に智慧と膨大なエネルギーと時間を注ぎ込んでいる。参加した学生たちには、喜びと自信、さらに成長の跡がはっきりと窺がえる。

◆「卒業生の今」では、商社、航空会社、広告会社、一般の企業に勤務する4名のOB・OGの方から寄稿いただいた。麗澤での「学び」を生かし、それぞれに頑張っている姿が目に浮かぶ。

麗澤大学事務局入試広報グループ

『麗澤教育』第二十四号

二〇一八年四月一日

編　集　麗澤大学事務局入試広報グループ

発　行　麗　澤　大　学
〒二七七―八六八六
千葉県柏市光ヶ丘二―一―一
電話　〇四―七一七三―三〇三〇

印刷所　ベクトル印刷㈱